茨城県行方郡麻生町

道城平遺跡

発掘調査報告書

1996年7月

道城平遺跡調査会
麻生町教育委員会

序

麻生町は霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と緑の豊かな自然に恵まれています。古代より人々が生活するうえで、恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところです。

今度の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。その結果、貝輪、タカラガイ、鹿角製品等が出土しました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと鹿行文化研究所・汀安衛氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することができました。ここに関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担してくださいました有限会社茂木建材取締役茂木宗五郎氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げごあいさつといたします。

平成８年７月

道城平遺跡調査会長
麻 生 町 教 育 長
橋　本　豊　榮

例　　言

1. 本報告書は、茨城県行方郡麻生町字道城平１６５９番地他に所在する道城平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、土砂採取事業に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。
3. 本遺跡は平成８年６月10日に予備調査を行い６月20日より本調査に入り７月20日に終了した。
4. 本遺跡の現地調査は、麻生町遺跡調査会を組織し調査は鹿行文化研究所の汀　安衛が担当した。整理は予算の関係で概報を平成９年『麻生の文化』に報告した。当初は貝塚は確認されず予算は、大幅な超過になった。整理、図面、原稿は鹿行文化研究所で負担した。
5. 整理は、西田和子が図面、拓本、実測、横田泰隆、菅谷益尚が貝類の整理、貝類の細分は汀安衛、魚骨等は西田和子が行い汀が総括し報告文を作成した。

職　名	氏　名	所　属
会　長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺田　弘	文化財保護審議会会長
理　事	羽生幸三	文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	羽生　均	文化財保護審議会委員（麻生地区）
〃	平輪一郎	文化財保護審議会専門調査員
〃	植田敏雄	文化財保護審議会専門調査員
〃	汀　安衛	調査主任
〃	茂木宗五郎	（有）茂木建材
〃	糸賀洋一	麻生町教育委員会事務局長
監　事	橋本政衛	（有）茂木建材
〃	羽生文男	麻生町出納室長
幹　事	額賀修一	麻生町教育委員会社会教育係長
〃	永作賢司	麻生町教育委員会社会教育主幹

凡　　例

1. 本報告書の縮尺は遺構は1／60、1／30を基準とし、遺物は1／30を原則とし水糸レベルは、その都度図中に表示した。
2. 本調査の組織は次表のとおりである。
3. 本調査にあたり次の方々に御協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

調査協力者　：　茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、茂木建材
調査協力員　：　横田泰隆、菅谷益尚、大川義久、根本武雄、高須松男、西田和子、前田京子
佐々木トミ子、清宮　久、人見美智子、大崎千代子、永沢すて、本沢フク

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査に至る経過 …… 2
1.　調査日誌 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
1.　住 居 跡 …… 4
第１号住居跡 …… 4
第２号住居跡 …… 5
第３号住居跡 …… 6
第４号住居跡 …… 7
2.　土　坑 …… 7
第１号土坑 …… 7
第２号土坑 …… 7
第３号土坑 …… 8
第４号土坑 …… 9
第５号土坑 …… 9
第６号土坑 …… 9
第７号土坑 …… 9
第８号土坑 …… 9
第９号土坑 …… 9
第10号土坑 …… 9
第11号土坑 …… 9
第12号土坑 …… 10
第13号土坑 …… 12
第14号土坑 …… 12
第15号土坑 …… 12
第16号土坑 …… 12
第17号土坑 …… 12
3.　溝 …… 12
第１号溝 …… 12
Ⅳ　貝　塚 …… 13
はじめに …… 15
1.　土　器 …… 15
Ａ－２区 …… 15
Ａ－３区 …… 15

B－2区 …… 16
B－3区 …… 17
C－2区 …… 20
C－3区 …… 23
C－4区 …… 28
D－2区 …… 31
D－3区 …… 31
D－4区 …… 32
D－5区 …… 36
E－3区 …… 37
E－4区 …… 39
E－5区 …… 42
F－4区 …… 42
F－5区 …… 44
G－5区 …… 46
グリット外出土遺物 …… 48
Ⅴ　貝類遺体 …… 50
Ⅵ　骨・角・歯牙製品 …… 56
Ⅶ　総　括 …… 73

挿　図　目　次

第1図　遺跡周辺地形及び位置図 …… 1
第2図　遺構位置図 …… 3
第3図　第1号住居跡実測図 …… 4
第4図　第1号住居跡　実測図 …… 4
第5図　第1、2、3号住居跡出土遺物実測図 …… 5
第6図　第2号住居跡実測図 …… 6
第7図　第3号住居跡実測図 …… 7
第8図　第4号住居跡実測図 …… 7
第9図　第1、2、3、4、5号土坑実測図 …… 8
第10図　第7、8、9、10、11号土坑実測図 …… 10
第11図　第13号土坑出土遺物実測図 …… 11
第12図　第13、14、15、16、17号土坑実測図 …… 11
第13図　第1号溝実測図 …… 12
第14図　道城平貝塚グリット及び地形平面図 …… 13

第15図　貝塚土層実測図 …… 14
第16図　A－2、A－3G出土土器拓影図 …… 16
第17図　B－2G出土土器拓影図 …… 17
第18図　B－2、B－3G出土土器拓影図 …… 18
第19図　B－3G出土土器拓影図 …… 19
第20図　B－3G出土土器拓影図 …… 20
第21図　C－2G出土土器拓影図 …… 21
第22図　C－2G出土土器拓影図 …… 22
第23図　C－3G出土土器拓影図 …… 23
第24図　C－3G出土土器拓影図 …… 24
第25図　C－3G出土土器拓影図 …… 25
第26図　C－3G出土土器拓影図 …… 26
第27図　C－3G出土土器拓影図 …… 27
第28図　C－3G出土土器拓影図 …… 28
第29図　C－4G出土土器拓影図 …… 29
第30図　C－4G出土土器拓影図 …… 30
第31図　C－4G出土土器拓影図 …… 31
第32図　D－2G出土土器拓影図 …… 32
第33図　D－3G出土土器拓影図 …… 33
第34図　D－4G出土土器拓影図 …… 34
第35図　D－4G出土土器拓影図 …… 35
第36図　D－4G出土土器拓影図 …… 36
第37図　D－5G出土土器拓影図 …… 36
第38図　D－5G出土土器拓影図 …… 37
第39図　E－3G出土土器拓影図 …… 37
第40図　E－4G出土土器拓影図 …… 38
第41図　E－4G出土土器拓影図 …… 39
第42図　E－4G出土土器拓影図 …… 40
第43図　E－4G出土土器拓影図 …… 41
第44図　E－4、E－5G出土土器拓影図 …… 42
第45図　F－4G出土土器拓影図 …… 43
第46図　F－4、F－5G出土土器拓影図 …… 44
第47図　F－5G出土土器拓影図 …… 45
第48図　F－5、G－6G出土土器拓影図 …… 46
第49図　道城平G外出土土器拓影実測図 …… 47
第50図　道城平G外出土拓影実測図 …… 48
第51図　B－3G出土土器拓影実測図 …… 48
第52図　C－3G出土土器拓影実測図 …… 49
第53図　G出土土器拓影実測図 …… 50

第54図　Ｂ－４、Ｃ－２、Ｃ－４、Ｘ貝製品実測図 …… 52
第55図　Ｅ－４、Ｅ－５出土骨製品実測図 …… 53
第56図　Ｂ－３、Ｃ－３、Ｃ－４、Ｃ－５、Ｄ－３、Ｄ－４出土遺物実測図 …… 54

表　目　次

第１表　貝類遺体Ｂ－２Ｇ一覧表 …… 57
第２表　貝類遺体Ｃ－３Ｇ一覧表 …… 58
第３表　貝類遺体Ｄ－４Ｇ一覧表 …… 59
第４表　貝類遺体Ｅ－５Ｇ一覧表 …… 60
第５表　微小貝類遺体一覧表 …… 61
第６表　Ｇ別アカニシ遺体 …… 61
第７表　Ｇ別ハマグリ遺体 …… 62
第８表　Ｇ別サルボウ遺体 …… 62
第９表　Ｇ別オキシジミ遺体 …… 63
第10表　Ｇ別カガミガイ遺体 …… 64
第11表　Ｇ別アサリ遺体 …… 65
第12表　Ｂ－２　２層貝一覧表 …… 66
第13表　Ｃ－３　２層貝一覧表 …… 66
第14表　Ｄ－４　２層貝一覧表 …… 69
第15表　Ｅ－５　２層貝一覧表 …… 71

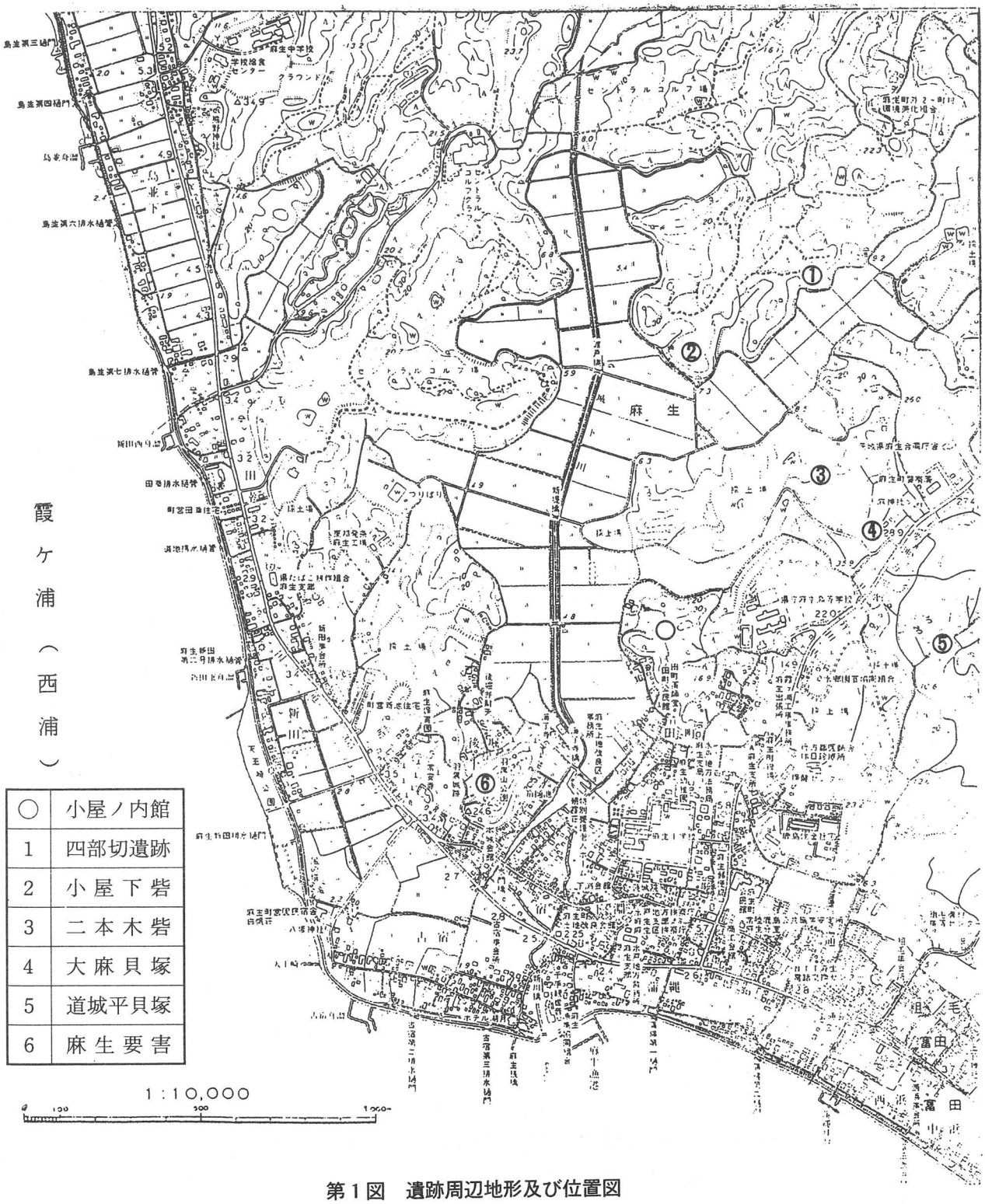
写真図版目次

ＰＬ－１　住居跡全景、１・２・３号住居跡完掘、１号・２号土坑土層
ＰＬ－２　２・３・８・９・10・11・12号土坑完掘
ＰＬ－３　12・13・14・15・16・17号土坑完掘、１号溝完掘
ＰＬ－４　貝塚全景、同近景、同北側から、Ｂ－２・Ｂ－３・Ｂ－４貝層、Ｃ－２土器出土状態
ＰＬ－５　Ｃ－３土器出土状態、同Ｃ－３貝層、貝塚完掘、同北側から出土状態
ＰＬ－６　１・２・３号住居跡出土土器、表採遺物、出土貝類・貝刃等
ＰＬ－７　貝輪、タカラガイ（ホシキヌタ、ハタジョウタカラガイ）　角製品
ＰＬ－８　骨製品、人骨、歯骨

Ⅰ 位置と環境

本遺跡は、茨城県行方郡麻生町大字麻生字道城平1659番地他に所在し麻生町役場の東方500ｍ、麻生町警察署の南側300ｍに位置している。遺跡は粗毛・富田地区から入り込む谷津の最奥部に位置し、Ｙ字状に分かれる部分の半島状に突き出す台地上に占地し、遺構は標高33ｍ程の狭長な馬の背状台地に散在して検出された。

遺跡は字名が示すように先端部に道城の存在が推定されたが立木焼却の際山火事をおこし消化



○	小屋ノ内館
1	四部切遺跡
2	小屋下砦
3	二本木砦
4	大麻貝塚
5	道城平貝塚
6	麻生要害

第１図　遺跡周辺地形及び位置図

の為に土砂を利用したため遺構の大半は欠失してしまった。したがって前述の遺構は確実な資料は得られなかった。若干の残部と地形図から「小屋」の存在は推定される。時代は鎌倉時代〜室町時代前期の時期が推察される。(注1)

その他、この先端部には住居跡1軒と土坑が3基が確認されたが、遺跡の大半は前述のとおり欠失していたため、その広がりは不明である。欠失部では奈良時代の住居跡4軒、土壙12基、縄文時代の落し穴状土壙1、東側からは溝1条と土坑2基が検出され北東側中程に10〜15m程の長円形状の縄文時代の貝塚が認められた。新発見の貝塚である。

周辺は、道城平貝塚、大麻貝塚、二本木城跡、小屋ノ内館跡、麻生陣家跡、羽黒山城跡等の遺跡が所在して史的環境にめぐまれた自然豊かな地域である。

注1．調査前に若干の土塁が「コ」の字状に認められた。形は屋敷に近い。

Ⅱ　調査に至る経過

調査に至る経過については、下記のとおりである。

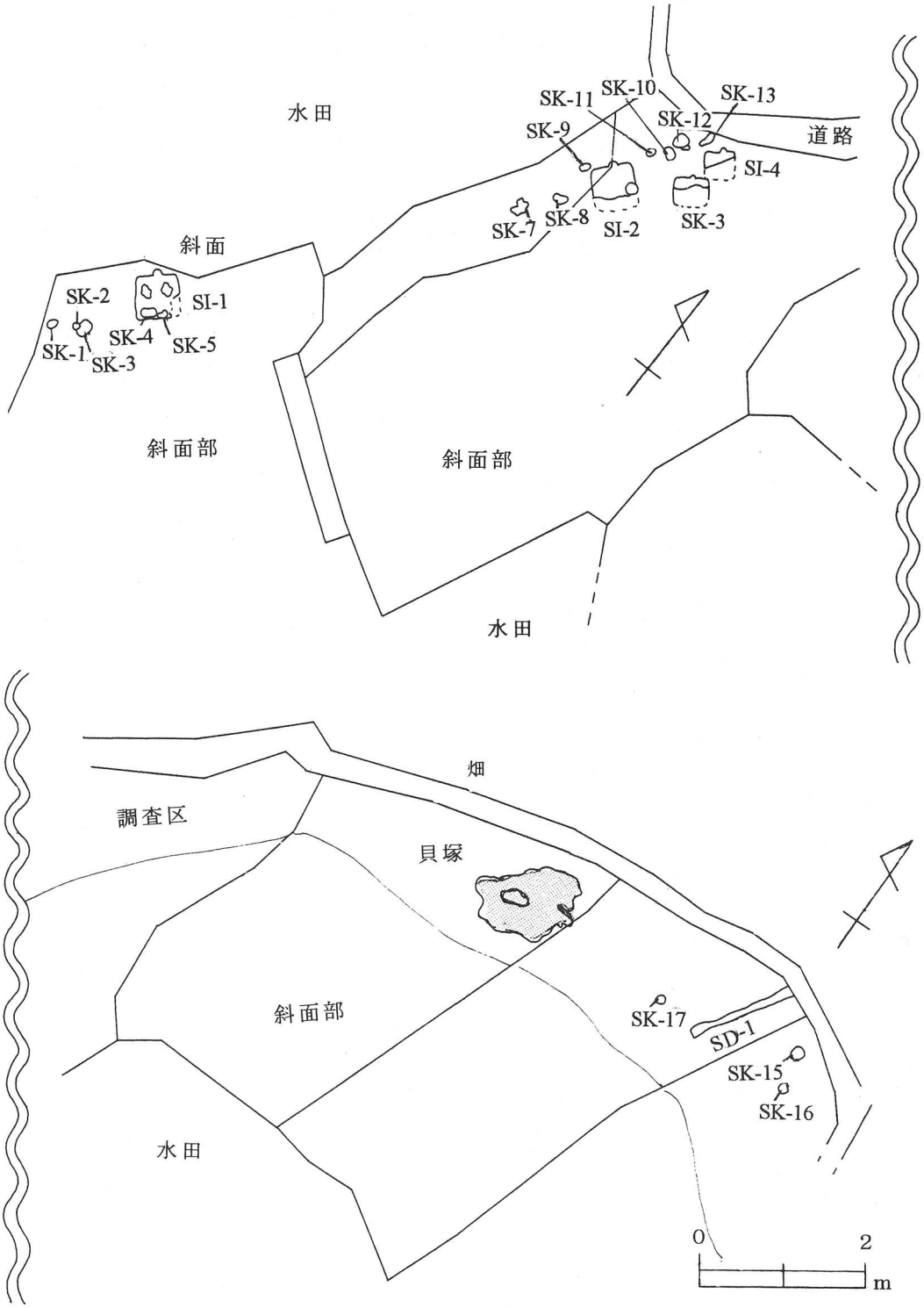
平成8年3月19日　㈲茂木建材より埋蔵文化財の所在の有無について照会があった。
平成8年4月 9日　現地踏査を行った。
平成8年4月17日　文化財保護審議会に諮問した。
平成8年4月18日　埋蔵文化財の所在の有無について回答した。
平成8年5月 7日　予備調査を行った。
平成8年6月 7日　道城平遺跡発掘調査会が発足した。
平成8年6月17日　調査を開始した。

1. 調査日誌

本遺跡調査開始前に、火災のためかなりの部分が消化作業の為に欠失した。その為大部分の遺構が消滅したと推察される。貝塚部分は100m離れていた為被害は免れたが予想以上の貝層の厚さ、遺存状態の良さに予算を軽くオーバーした。金額的には予算の倍以上かかった。そのため全量を報告する事は出来なかった。以下調査日誌を箇条書きに述べる。5月中に3日をかけて予備調査を実施した。

平成8年

6月17日　テント、道具搬入、表土除去、遺構確認。
6月18日　表土除去、1号、2号、3号土坑、1号住居跡調査開始。
6月19日　1住居跡、4号、5号、6号土坑調査。
6月20日　1住居跡図面、竈エレベ作成。
6月21日　2号住居跡調査、4、5、6号土坑調査。
6月24日　3、4号住居跡調査、竈調査、平面図作成、7号、8号、9号土坑調査。
6月27日　3、4号住居跡図面作成、竈図面作成、11、12、13号土坑調査。
6月28日　調査区東側の14号、15号、16号土坑調査。1号溝調査。貝塚調査。
6月29日　貝塚のA、B、C、D各2区を調査開始。G別に層序確認。
7月1日　前述同様各G別を調査。遺物、純貝層が見られる。細かいフルイで分類。
7月2日　かなりの貝層の量に驚く、3、4区のGに進む。ほぼ3層に分類される。



第２図　住居跡、土坑、溝位置図

７月３日　完形に近い遺物出土、鹿の角の装飾品出土。歴史館斎藤氏見学、教示。
７月４日　かなり膨大な量になる。土嚢袋200袋。ほぼ費用の半分使う。
７月５日　Ｄ、Ｅ、Ｆの４、５区に入る。地形にそってかなり斜行。20°前後。
７月６日　Ｅ、Ｆグリットはかなり深く入り時期に若干の差が見られる。
７月８日　前述に続いての作業。午後３時降雨の為作業中止。
７月９日　台風のため午後から現場。後少しとなる。運搬の準備。
７月11日　残り部分の調査。あと少し残る。Ｅ５、Ｆ５区の一部。
７月12日　残部の精査と遺物運搬。本日で終了とす。簡単な打ち上げ。

その後、貝の水洗い、土器水洗い、注記、分類、図面作成等かなり時間をついやし、費用が欠乏し当研究所の負担で作業を続行、概要を麻生の文化に寄稿する。残った修理作業の写真、魚骨、獣骨、鳥骨等や貝類の分類はすべて鹿行文化研究所の負担で行なった。そのため報告書刊行に4年を費やした。(交渉を重ねたが予算面での増額は認められなかった。)

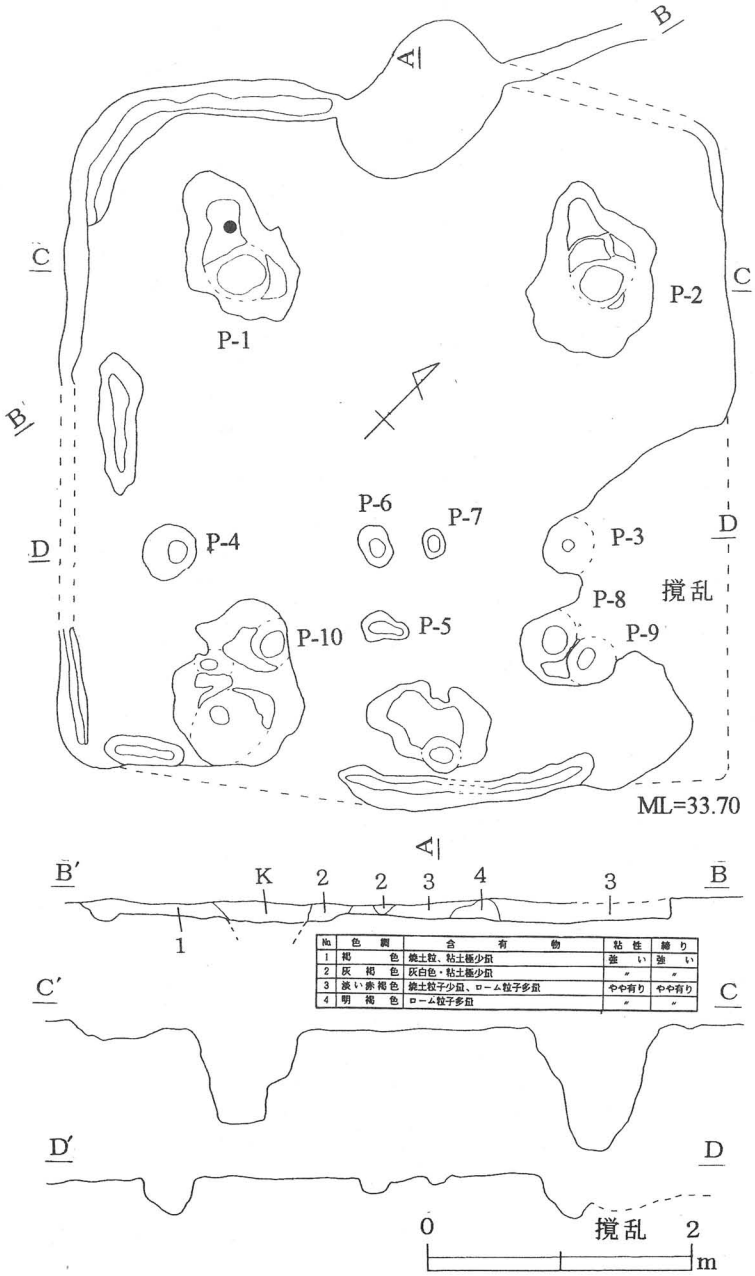
Ⅲ 調査の概要

本調査は、1997年６月10日に予備調査を実施し、牛糞部分は凹地のため確認しなかった。現実的には貝層の厚さ、貝類の量は推定の２倍以上であり、予算面ではるかにオーバーした。遺構は縄文時代の貝塚。時期は中期中葉を主体とし、後期の一部、奈良時代の住居跡４軒等が検出された。以下、奈良時代の住居跡、縄文時代の土坑、その他の土坑の順に延べ、遺跡の主体を占める貝塚は各グリッドの貝層状態、遺物等の順に述べる。

1. 住居跡

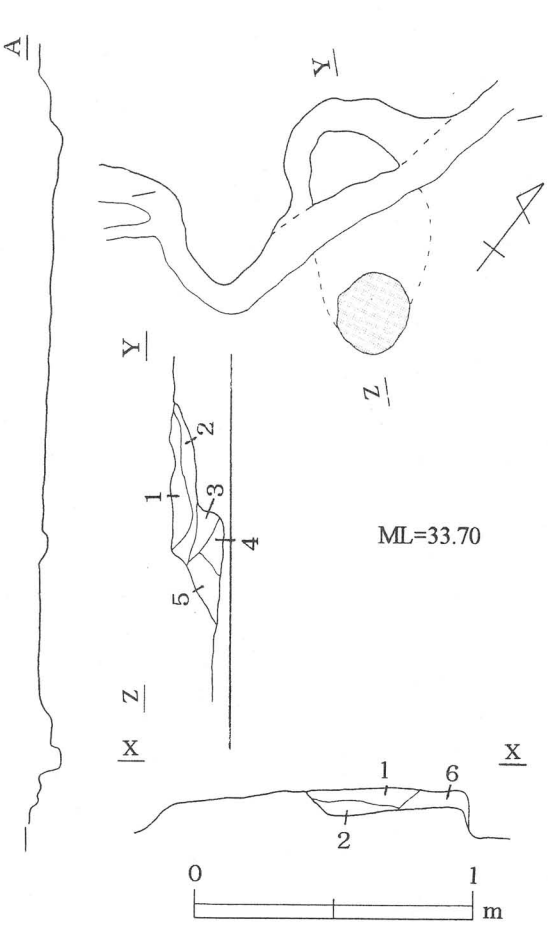
第１号住居跡　（第３図、４図、６図）

本遺構は、先端部に唯一検出された住居跡であり、遺存状態は最も良いが、かなりの撹乱が認



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	褐色	焼土粒、粘土極少量	強い	強い
2	灰褐色	灰白色・粘土極少量	〃	〃
3	淡い赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子多量	やや有り	やや有り
4	明褐色	ローム粒子多量	〃	〃

第3図　第１号住居跡実測図



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい赤褐色	焼土粒子少量	弱い	弱い
2	赤色	焼土粒子全量	〃	〃
3	灰白色	灰白色粘土全量	強い	強い
4	黒褐色	粘土・焼土粒子極少量	弱い	弱い
5	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子粘土粒極少量	〃	〃
6	黄灰色	黄色粘土多量、ローム粒極少量	強い	強い

第4図　第１号住居跡竈実測図

められた。N－37°－Wに主軸を置き、東西5m、南北5.04mのほぼ方形状プランを呈する住居跡で、東、北側で欠失部が残る。掘り込みは10～15cm前後で浅く下部は、白色粘土層で地形状、それ程の掘り込みをもたないと考える。覆土は極一部しか遺存しておらず、土層セクションはかなり変則的な位置で取った。土層は、4層程に分けられ焼土粒子、灰白色粘土、ローム粒子等を含む。粘性、締りはややある。白色粘土の部分は強い。堆積状態からは埋められた感じの層順である。

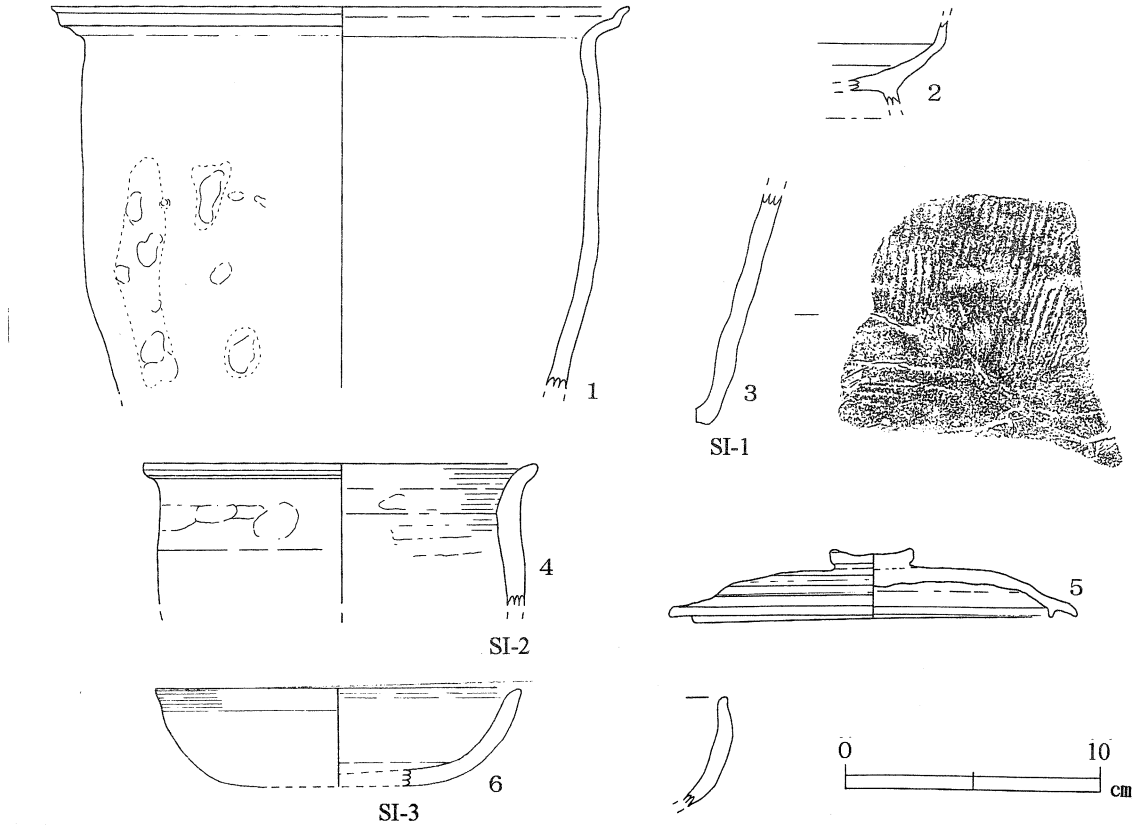
柱穴は、4か所認められ、いずれも数回の建て替えが行なわれたと思われる掘り込みであり、いずれも1m前後の不整形な掘り込みをもつ。その他、P－6～10までの小ピットが認められる。柱穴は、P－9、P－10の可能性が高い。円形状で「U」字状の掘り込み。周溝は、部分的な掘り込みが認められる。

竈は、北西側壁面中央部に位置し、外側に「U」字状に掘り込んでいる。袖部は、ほぼ欠失し不明、火焼部のみ円形状形態で前面に遺存していた。用材は灰白色の粘土を用いている。全体的に外部の張り出しが強い形態である。

遺物は、甑と思われる器肉の薄い長胴形状の土器が見られる。口縁部は、水平に近く屈曲し口唇部に若干の凹凸あり。2は須恵器、皿に近い形状で器肉は薄く付高台、3は甑で縦位の平行叩き目をもつ。これらの出土遺物から奈良時代後半の真間Ⅱ式前後の住居跡である。

第2号住居跡　（第5図、6図）

本遺構は、東側の1割程を欠失し不明、中央部に炉跡状の焼けた部分をもつ。主軸をN－48°－Wに置き、かなり西側にふれる。東壁面にはSK－15号が掘り込まれている。東西4.8m、南北は不明であるが、ほぼ同様な形態で方形状を呈すると思われる。柱穴はP1～P4は想定するものと理解され、径30cm程の円筒状掘り込みをもつ。P1のみ、やや不規則な形態であるが柱穴部分は鍋底状形態。床部は、ほぼ平坦で、締りは強い。



第5図　第1・2・3号住居跡出土遺物実測図

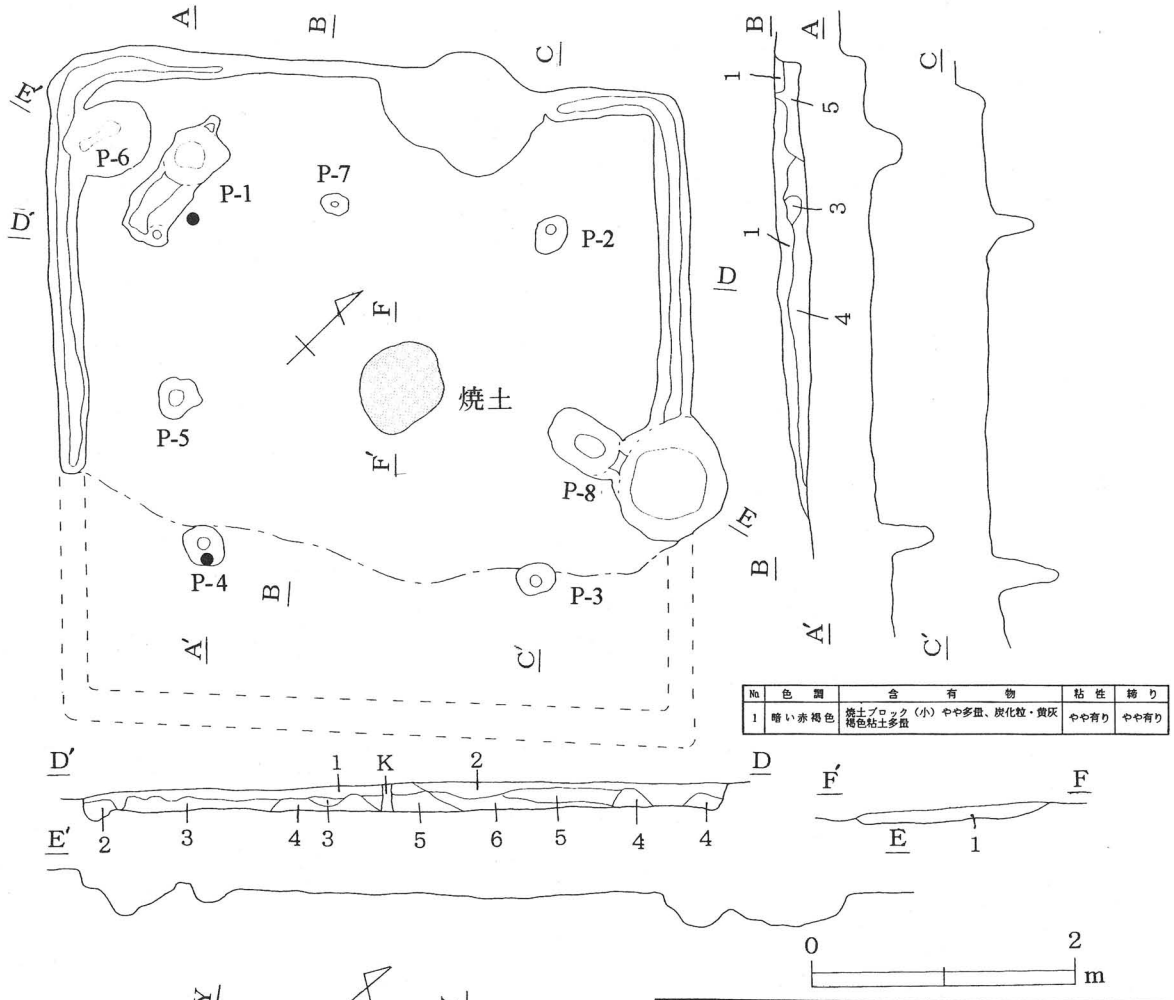
覆土は、6層でいずれも投げ込み状の層順を示す。褐色系及び黄褐色、黒褐色でローム粒子、焼土粒子、黄褐色粘土、白色粘土を含む。

竈の袖は、ほぼ住居内に直線的に伸びて灰褐色の砂質粘土を用いて築いてあり、長さ55㎝程で左右同一、壁面にとって付けたような感じであり、遺物を見る限り古墳時代末の鬼高期Ⅱ式にあたる遺構と推定される。焼土は単純な層順を示している。

遺物は、5図4、5で4は、小型の鉢形に近い土器で短い口縁部は外反し、口唇部は水平に近く丸く収めている。5は、須恵器の蓋で肩部の張りはやや弱くなるが、カエリは良く残り擬宝珠摘みはやや扁平化している。中央部に炉跡と思われる焼土があった。

第3号住居跡　（第5図、7図）

本遺構は、大半を欠失し竈の存在がかろうじて北側壁面に火床部と思われる部分が認められる。袖、外部の掘り込みは認められない。周溝は、南側に一部残り、全周するのか、したかは不明である。



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗い赤褐色	焼土ブロック（小）やや多量、炭化粒・黄灰褐色粘土多量	やや有り	やや有り

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい暗褐色	焼土粒子、ローム粒子極少量	弱い	強い
2	褐色	ロームブロック、焼土粒子やや多量	やや有り	やや有り
3	褐色	焼土粒・白色粘土、ローム粒少量	〃	〃
4	黄橙色	黄褐色粘土、白色粘土、焼土粒、ローム粒少量	〃	〃
5	にぶい黒褐色	炭化粒子、焼土粒子極少量	〃	〃
6	黒褐色	白色粘土やや多量	〃	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒多量、灰褐色粘土・焼土粒少量	強い	強い
2	にぶい黒褐色	焼土粒多量、炭化粒子極少量	〃	〃
3	赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒粒子少量	弱い	〃
4	褐色	ローム粒子多量、砂質粘土多量	強い	〃
5	褐色	ローム粒子多量、灰褐色粘土多量	〃	〃
6	淡い赤褐色	焼土粒子多量、砂質粘土多量	〃	〃
7	淡い赤褐色	焼土粒子やや多量、砂質粘土やや多量	〃	〃
8	赤褐色	焼土ブロック全量	なし	やや有り
9	赤橙色	焼土粒少量、炭化粒少量	弱い	弱い

ML=33.50

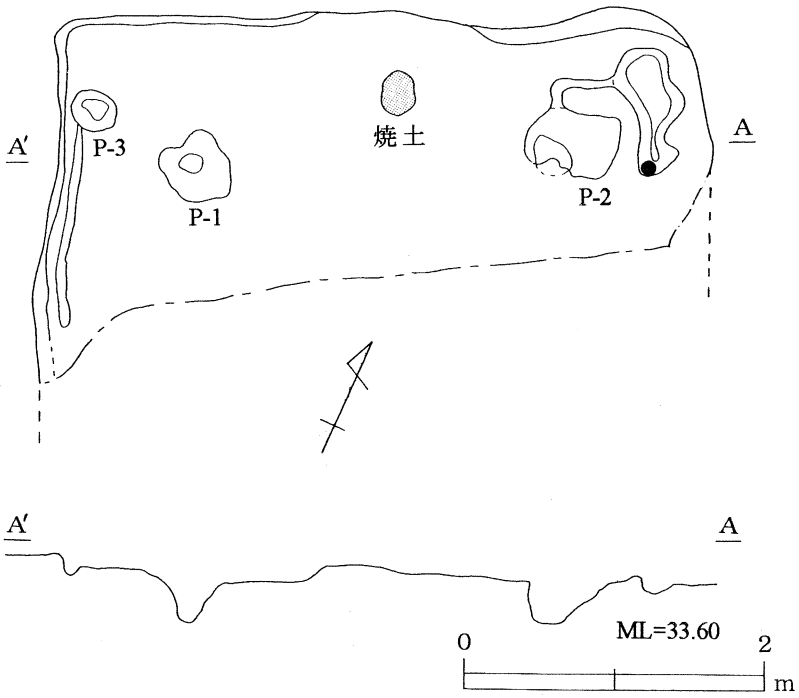
第6図　**第2号住居跡実測図**

0　1 m

柱穴は、Ｐ１、Ｐ２が想定される。ややだれた「Ｕ」字状形態で浅い。径は40～50㎝、深さは30㎝前後。主軸はＮ－11°－Ｗに置き、東西 4.3 ｍ程のプランを呈すると思われる。

覆土は、作図出来る部分はない。前述の住居跡状投げ込みの可能性が強い。

出土遺物からは真間Ⅱ式前後の遺構と推察される。



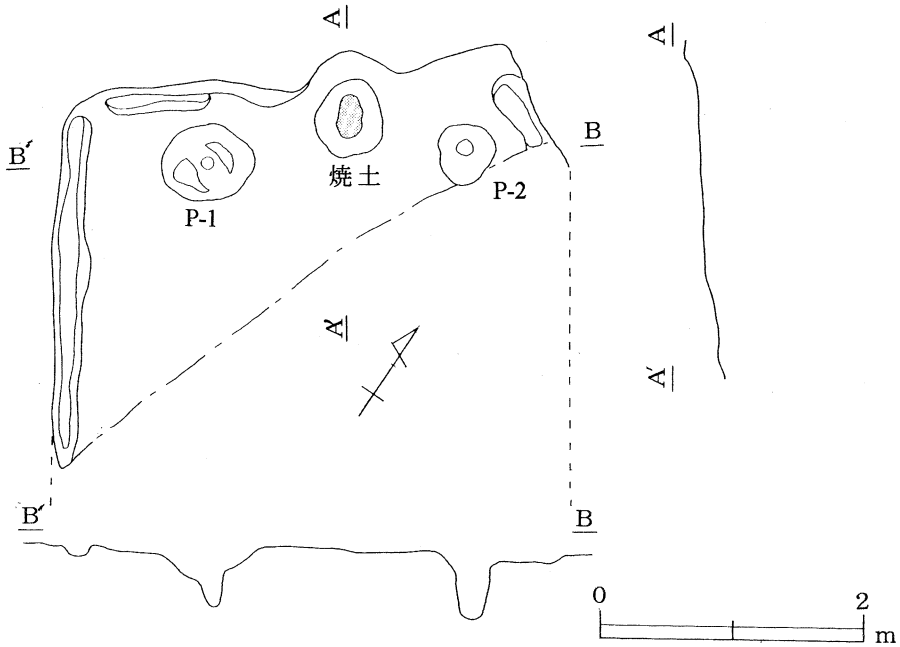
第７図　第３号住居跡実測図

第４号住居跡　（第８図）

本遺構は、三角形状に欠失し南側の一部と西壁面が遺存していた。割合は40％前後である。主軸をＮ－59°－Ｗに置き、東西 3.9 ｍ程で西壁中央部に竈をもつ。袖は確認出来ず、火焼部のみ長く残る。

柱穴は、Ｐ１、Ｐ２のみ認められ「Ｖ」字状、円筒状形態で径60㎝、深さ45㎝、Ｐ２は径40㎝、深さ50㎝で円筒状形態である。床面は平坦でやや締りはある。

遺物は、図示出来るものはない。プラン、竈、柱穴等から、本遺構も真間期の新しい時期が推察される。



第８図　第４号住居跡実測図

2. 土　坑

第１号土坑　（第９図）

本土坑は、調査区の南端部に位置し、三角形状プランで東西１ｍ、南北95㎝で浅い。５㎝程の掘り込みで、遺物は皆無に近く遺構の性格を位置ずけるものはない。土層からはかなり新しい時期になると思われる。中世か。

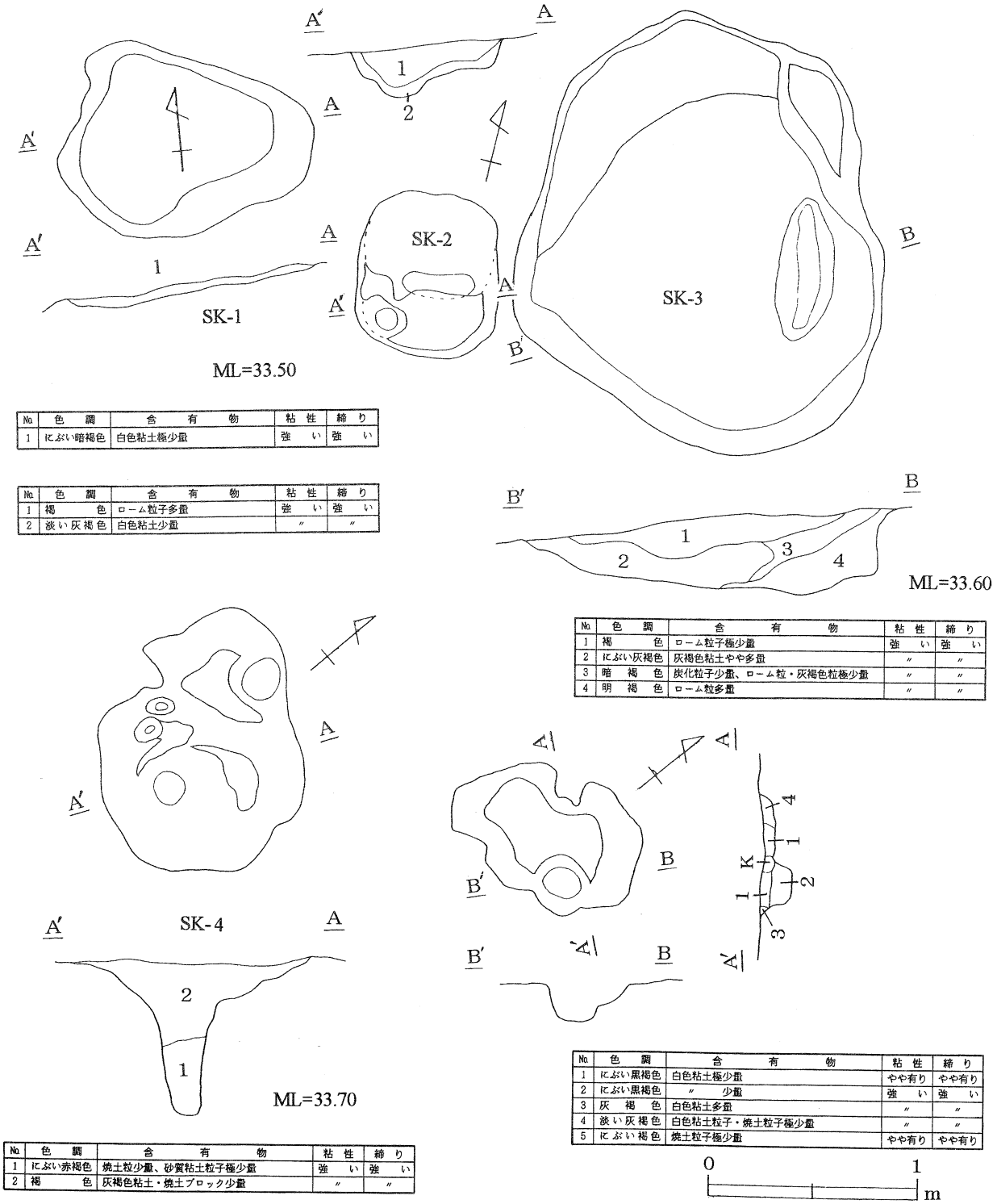
第２号土坑　（第９図）

本遺構は、１号土坑の東側に位置し、方形状プランで２段になる。南側に円形の径20㎝程の小穴がある。深さは25㎝程である。覆土は２層で１層は褐色、ローム粒子を多量に含む。２層は淡

い灰褐色で白色粘土を少量含む。粘性、締りは強い。遺物は、土師器が少量検出されたが、時期を決定するだけの資料はない。平安以降～江戸期頃の遺構か。

第3号土坑　（第9図）

本土坑は2号土坑の東側、1号住居跡の南側に位置し、東西 17.5 m、南北 2.1 m の長円形状プランで東側では壁面は鋭角で31cm、南側に向かって次第に浅くなり自然に緩やかに立ち上がる。土層は自然堆積状で4層で褐色、にぶい灰褐色、暗褐色、明褐色で灰褐色粘土、炭化粒子、ローム粒子、灰褐色粘土等を含む。粘性、締りは強い。



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい暗褐色	白色粘土極少量	強い	強い

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	褐色	ローム粒子多量	強い	強い
2	淡い灰褐色	白色粘土少量	〃	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	褐色	ローム粒子極少量	強い	強い
2	にぶい灰褐色	灰褐色粘土やや多量	〃	〃
3	暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒・灰褐色粒極少量	〃	〃
4	明褐色	ローム粒多量	〃	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい黒褐色	白色粘土極少量	やや有り	やや有り
2	にぶい黒褐色	〃　少量	強い	強い
3	灰褐色	白色粘土多量	〃	〃
4	淡い灰褐色	白色粘土粒子・焼土粒子極少量	〃	〃
5	にぶい褐色	焼土粒子極少量	やや有り	やや有り

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい赤褐色	焼土粒少量、砂質粘土粒子極少量	強い	強い
2	褐色	灰褐色粘土・焼土ブロック少量	〃	〃

第9図　第1・2・3・4・5号土坑実測図

遺物は、土師器が少量検出されたのみで時期を特定すべく遺物はないが、出土遺物からは奈良以降～江戸期の遺構と推察する。

第4号土坑　（第9図）

本土坑は、1号住居跡の東壁側に位置し、検出された遺構である。複雑な掘り込みを呈し、断面図部分では円筒状に掘り込む。土層は2層に分けられる。 1層はにぶい赤褐色で 焼土粒子、砂質粘土を極少量含む。2層は褐色で灰褐色粘土、焼土ブロックを少量含む。粘性、締りは強い。

遺物は須恵器片、土師器等が出土している。出土遺物等から奈良～平安時代前後の遺構か。

第5号土坑　（第9図）

本遺構は、4号土坑同様、1号住居跡の東壁中央部から検出された土坑で全体的に浅く5㎝程の掘り込みで、東側に円形状の小穴が見られ、深さは15㎝で鍋底状形態。土層は5層に分けられにぶい褐色、灰褐色、淡い褐色等で白色粘土を含み4、5層は焼土粒子を含む。

遺物も4号土坑同様で時期もさほどの差はないと考える。性格的には、4、5は平安時代～室町時代位の建物、もしくは柵列の1部とも考えられるものである。（6号土坑は欠番）

第7号土坑　（第10図）

本遺構は、2号住居跡の西側に位置し、東西 1.45 ｍ、南北 2.10 ｍの長円形状で底部は凹凸があり、締りは良い。掘り込み深さは2～5㎝前後で本来の形状とは差があると思われる。土層は褐色土1層で白色粘土を含む。遺物は皆無で時期、性格は不明。

第8号土坑　（第10図）

3号住居跡の南側に位置し、東西 1.2 ｍ、南北75㎝、中央部に径18㎝、深さは10㎝程の変則的な掘込みをもつ。その他は平坦で底部の締りは強い。掘り込みの深さは3～5㎝と浅く、前述の土坑同様性格、時期は不明である。遺物は皆無である。

第9号土坑　（第10図）

本遺構は、2号住居跡の北側に位置し東西95㎝、南北65㎝で中央部北寄りに長円形状に10㎝程の掘り込みをもつ。底部やその他は平坦で締りは強い。土師器破片が10片程出土している。これらから奈良時代～平安時代の土坑と推定される。性格は不明。

第10号土坑　（第10図）

本土坑は、2号土坑の北側に位置し、東西50㎝、南北65㎝、深さ5㎝程で中央部に長円状の5㎝程の掘り込みをもつ。底面の締りは強い。形態的には倒卵形状。少量の土師器が出土している。時期は、奈良～平安時代か、性格は不明。

第11号土坑　（第10図）

本遺構は、3号住居跡の西側に位置し、東西90㎝、南北 1.70 ｍで西側は若干、10㎝程の掘り込みで円形状の小ピットが2ケ所見られる。北側はやや開いた「V」字状形で、深さ30㎝、径80㎝で中央部に10㎝程の小さな底をもつ。覆土は3層で褐色層主体でピット下部では灰白色粘土層を掘り込み、若干混じる。時期は出土遺物の土師器から前述同様の奈良時代～平安時代が推察される。

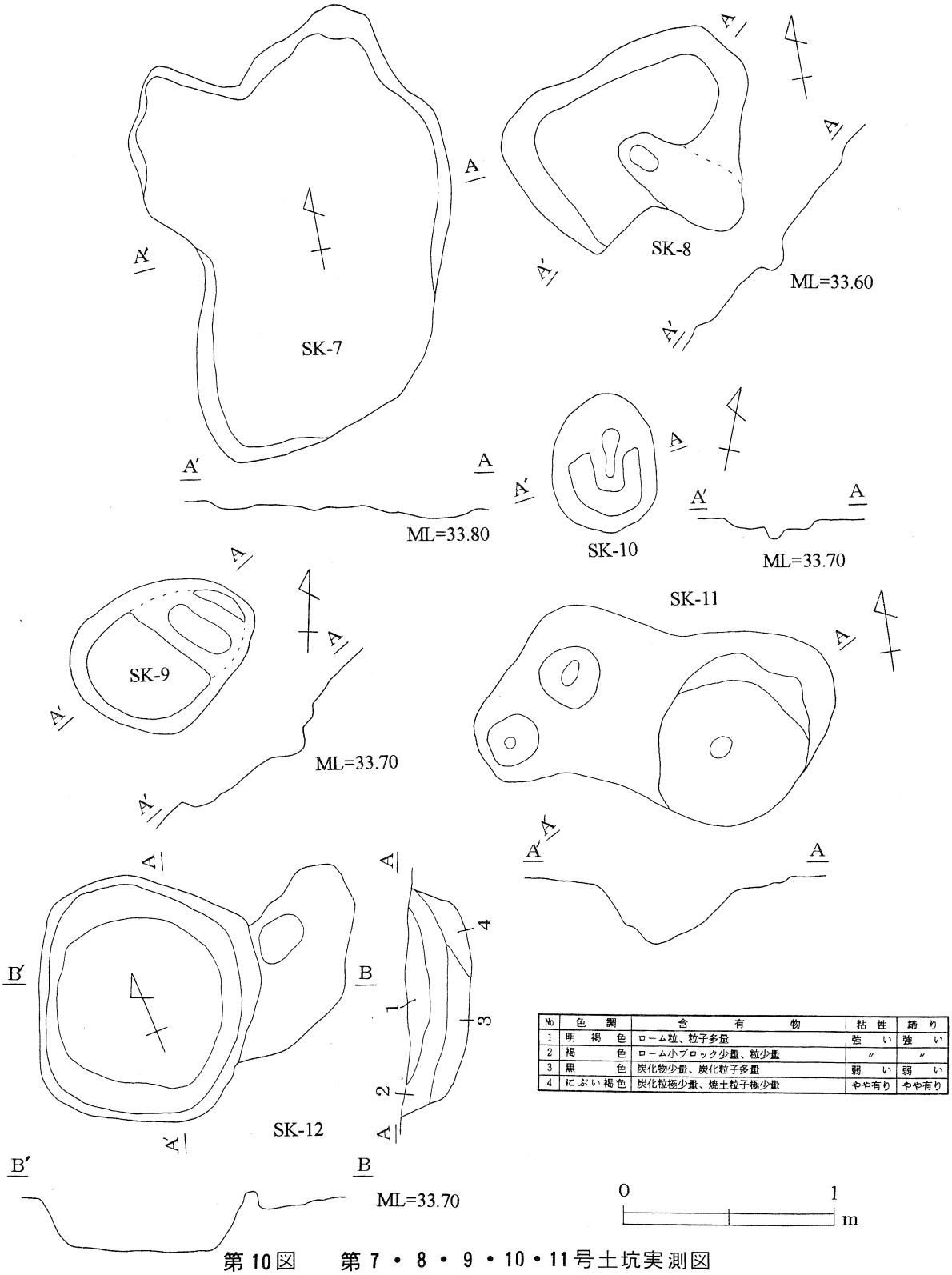
第12号土坑　（第10図）

本土坑は、3号住居跡の北西側に位置し、長方形状プランで、東西 1.13 ｍ、南北 1.03ｍで形態的には、芋穴状で壁面は緩やかな立ち上がりを呈して、中央部が若干落ち込む。土層は、レン

ズ状の自然堆積で4層に分けられた。明褐色、褐色、黒色、にぶい褐色で3層下位が底部に付き自然堆積を明示している。いずれも粘性、締りは強い。混入物は下部程炭化物の混入が多く粘性、締りは弱い。芋穴の可能性が強い。明治～昭和20年代位？。

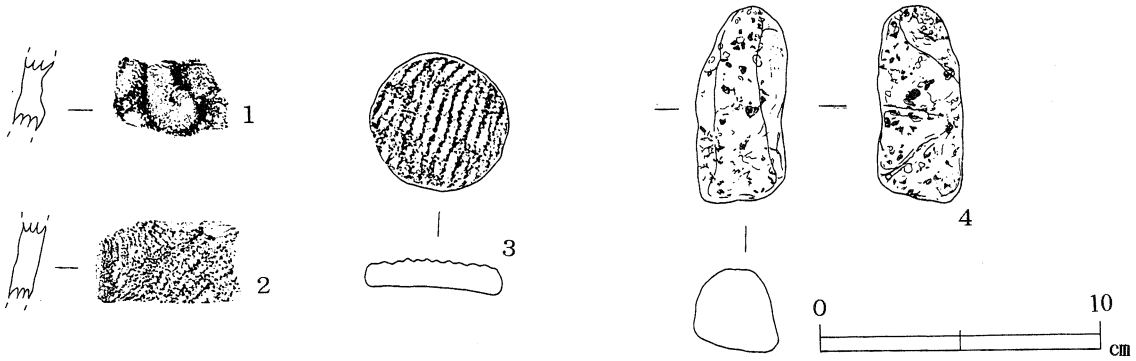
第13号土坑　（第11図、12図）

本土坑は、調査区の北端部に位置していた。（その他は東側に折れ、貝塚方面に「く」の字状に折れる。）東西 1.95 ㎝、南北60㎝で地山層の白色粘土層を掘り込み下部の砂質層近くまで掘り込む。深さは80㎝、長方形で縄文時代のT形ピットとはやや差があるが掘り方プラン、出土遺

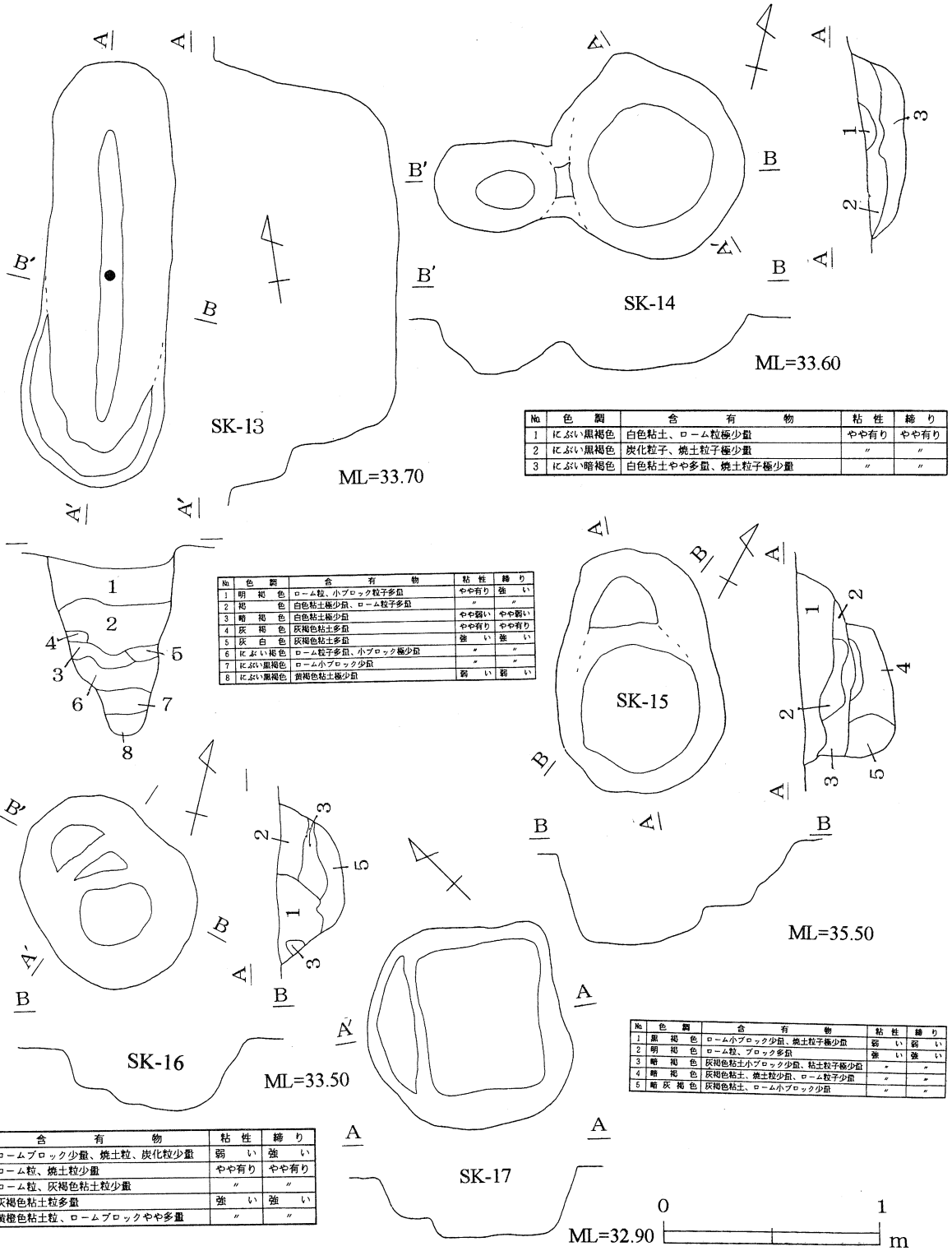


No.	色調	含有物	粘性	締り
1	明褐色	ローム粒、粒子多量	強い	強い
2	褐色	ローム小ブロック少量、粒少量	〃	〃
3	黒色	炭化物少量、炭化粒子多量	弱い	弱い
4	にぶい褐色	炭化粒極少量、焼土粒子極少量	やや有り	やや有り

第10図　第7・8・9・10・11号土坑実測図



第11図　第13号土坑出土遺物実測図



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい黒褐色	白色粘土、ローム粒極少量	やや有り	やや有り
2	にぶい黒褐色	炭化粒子、焼土粒子極少量	〃	〃
3	にぶい暗褐色	白色粘土やや多量、焼土粒子極少量	〃	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	明褐色	ローム粒、小ブロック粒子多量	やや有り	強い
2	褐色	白色粘土極少量、ローム粒子多量	〃	〃
3	暗褐色	白色粘土極少量	やや弱い	やや弱い
4	灰褐色	灰褐色粘土多量	やや有り	やや有り
5	灰白色	灰褐色粘土多量	強い	強い
6	にぶい褐色	ローム粒子多量、小ブロック極少量	〃	〃
7	にぶい黒褐色	ローム小ブロック少量	〃	〃
8	にぶい黒褐色	黄褐色粘土極少量	弱い	弱い

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量	弱い	弱い
2	明褐色	ローム粒、ブロック多量	強い	強い
3	暗褐色	灰褐色粘土小ブロック少量、粘土粒子極少量	〃	〃
4	暗褐色	灰褐色粘土、焼土粒少量、ローム粒子少量	〃	〃
5	暗灰褐色	灰褐色粘土、ローム小ブロック少量	〃	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒、炭化粒少量	弱い	強い
2	暗褐色	ローム粒、焼土粒少量	やや有り	やや有り
3	暗褐色	ローム粒、灰褐色粘土粒少量	〃	〃
4	灰褐色	灰褐色粘土粒多量	強い	強い
5	にぶい黄橙色	黄橙色粘土粒、ロームブロックやや多量	〃	〃

第12図　第13・14・15・16・17号土坑実測図

物から縄文時代の落し穴と推定される。土器片を利用した円形の円盤状土器が出土している。縄文時代中期後半の所産か。覆土は8層で白色粘土を各層とも含む。

第14号土坑　（第12図）

本遺構は、4号土坑近くに位置し、円形状の土坑の2基の切り合い状態である。大きい部分は、径85㎝程の大穴で緩やかな壁面で、覆土は、自然堆積と推察される。3層に分けられ、にぶい黒褐色、にぶい暗褐色で白色粘土、炭化粒子、焼土粒子等を含む。粘性、締りはややある。

西側はやや小型で、東西40㎝、南北55㎝の緩い鍋底状に近い形態である。遺物は皆無に近く時期、性格を推定するには困難である。

第15号土坑　（第12図）

本遺構は、調査区の東方エリア東端に位置し、東西1.10ｍ、南北75㎝で長円形状プランを呈し、1層以下は複雑な層順を示している。いずれもローム粒、焼土粒、灰褐色粘土を含み、2回前後に分けて使用された可能性がある。遺物は土師器等3点のみで時期は特定出来ない。

第16号土坑　（第12図）

本土坑も2回前後に掘り込まれて使用されたと推定される土層を示す。東西90㎝、南北75㎝で掘り込みはやや鋭角的で底面は緩やかに凹凸をもつ。深さは30㎝である。土層は5層でにぶい黒褐色、暗褐色、灰褐色、にぶい黄褐色でローム粒、焼土粒、炭化粒を含む1層は別遺構か？2層からはローム粒、灰褐色粘土、黄橙色粘土を含む、含有物、粘性、締りに若干の差をもち、時期に差がある。遺物は縄文土器3、土師器1片が出土している。前の時期は縄文時代か。

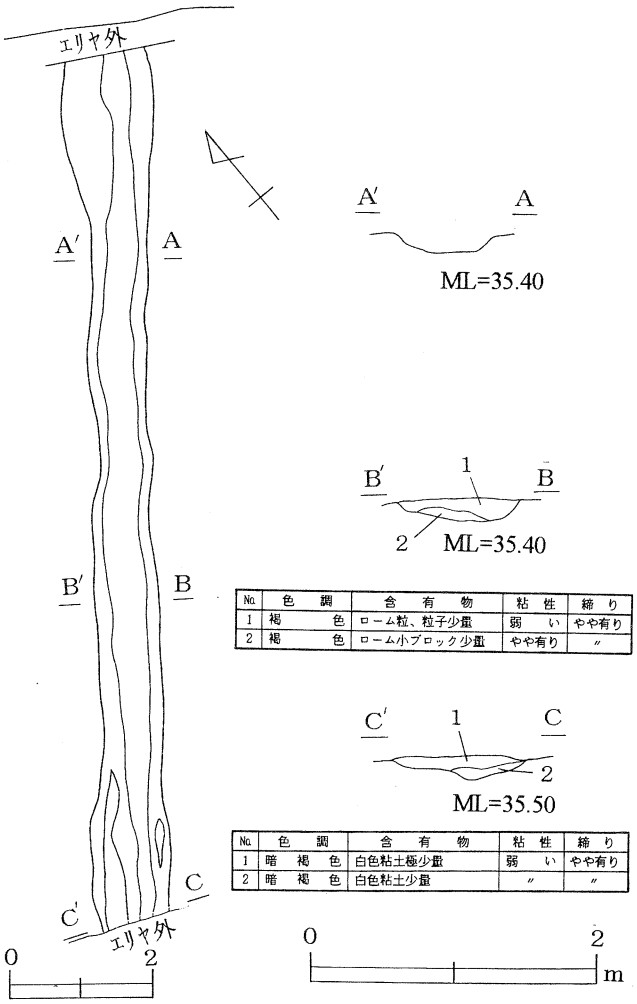
第17号土坑　（第12図）

本遺構は、貝塚の近くに位置して検出された遺構で2回前後使用した可能性が考えられる。東西90㎝、南北90㎝程の方形状プランを呈している。北西側に一段あり、掘り替えが行なわれた可能性が強く、性格的には芋穴か。遺物は皆無に近い。

3. 溝

1 号 溝　（第13図）

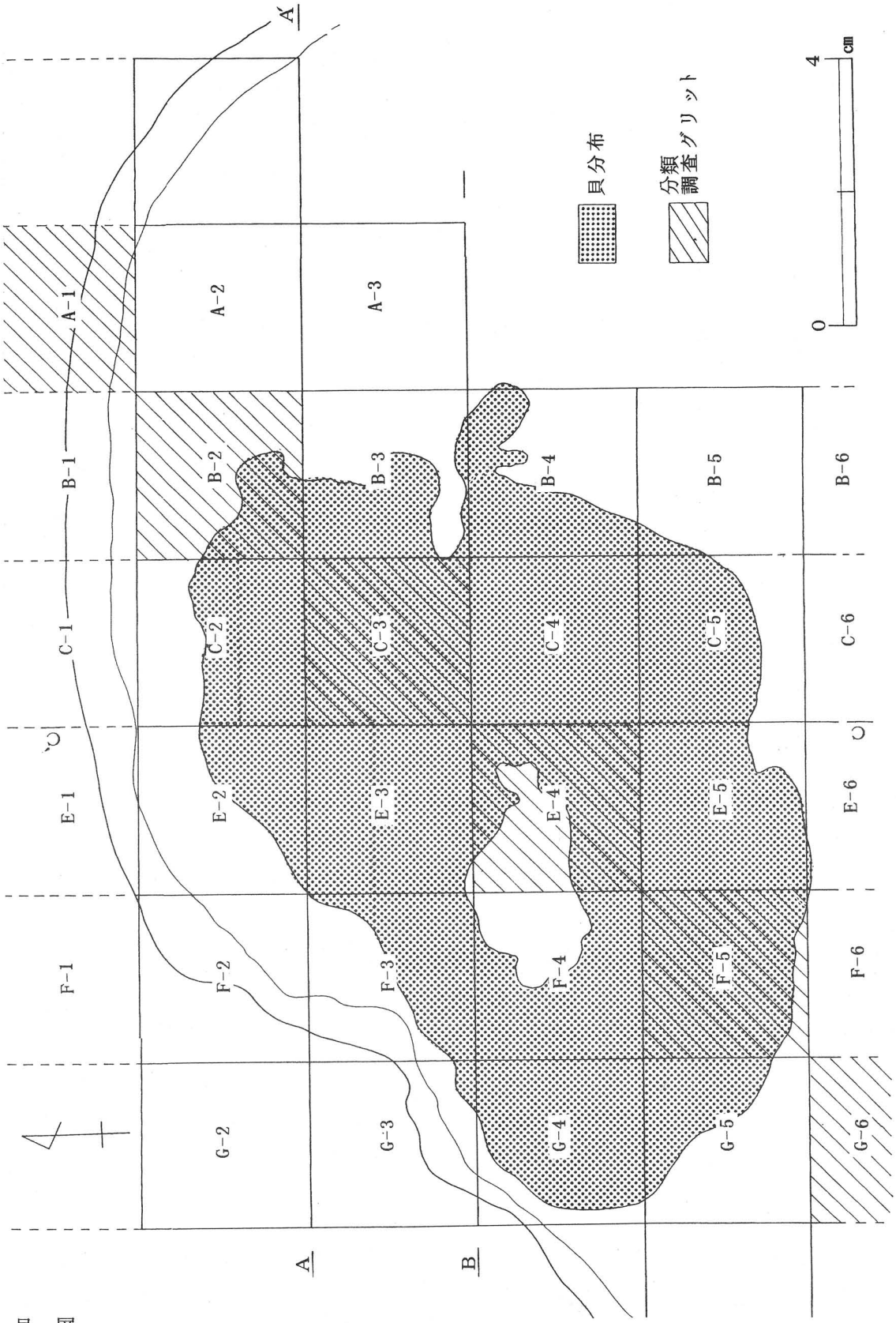
本溝は、東側の調査区、貝塚の東側に浅い溝が1条検出され、道路付近から南側に伸びるが途中で切れ、深さは、10～20㎝前後、幅は30～60㎝程で、以前の境の「よせ」の名残りか。特別な遺物はなく、長さも10ｍ程で切れ、性格、時期を特定すべき遺物もなく、縄文土器の出土も認められなかった。



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	褐色	ローム粒、粒子少量	弱い	やや有り
2	褐色	ローム小ブロック少量	やや有り	〃

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	白色粘土極少量	弱い	やや有り
2	暗褐色	白色粘土少量	〃	〃

第13図　**第1号溝実測図**

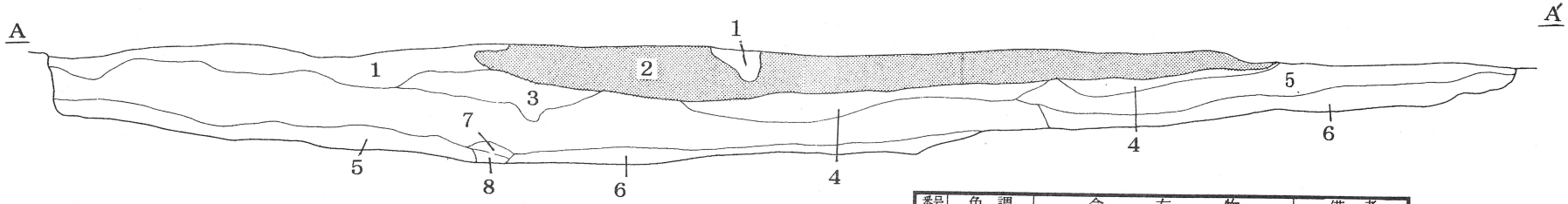


第14図　道城平貝塚グリット及び地形平面図

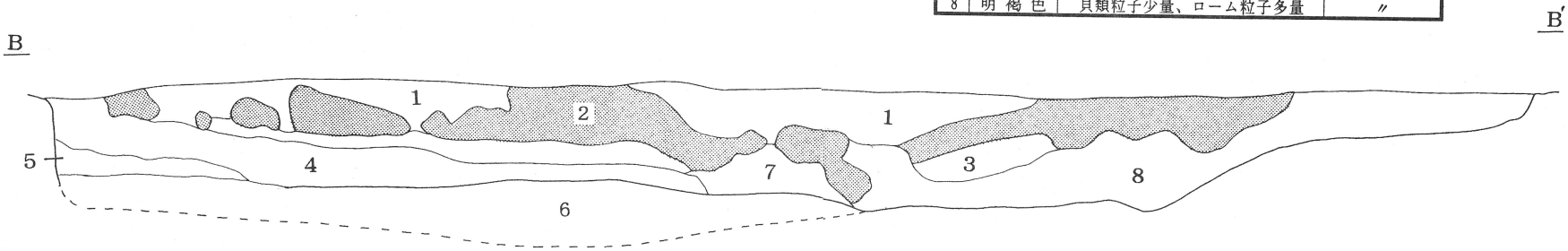
貝　層

貝層は、（第15図）のとおり台地南側の傾斜面の凹地に位置していた。状態からは、一時的に“投げ込まれた”感じの埋積状態であった。

耕作土を除去したところ部分的に純貝層に近い状態の貝層が出現した。調査は2m×2mのグリットを設定し調査を行った。１層は、純貝層出現10～50cmの埋積が認められた。部分的にはブロック状を呈し、下位の混貝層とは明確な差が認められ下層では土器のみの層が地山迄存在した。

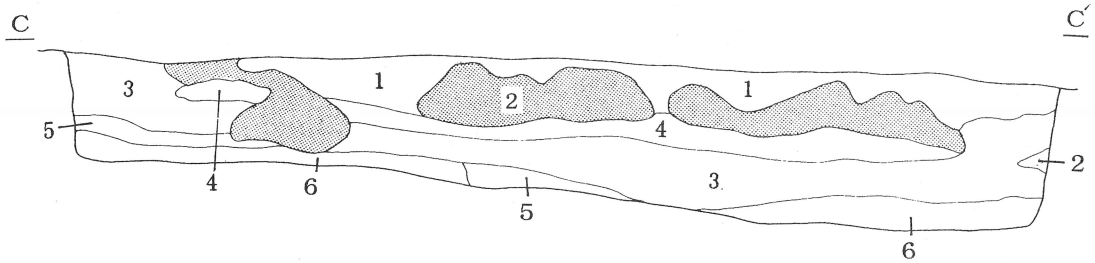


番号	色調	含有物	備考
1	暗褐色	土器極少量、焼土粒極少量	土層
2	純貝層	ほぼ全量	純貝層
3	混貝層	貝類少量	混貝層
4	黒褐色	貝類少量	混土貝層
5	暗褐色	遺物（土器）極少量	土層
6	褐色	ローム粒子やや多量	〃
7	黒褐色	貝類粒子少量	〃
8	明褐色	貝類粒子少量、ローム粒子多量	〃



番号	色調	含有物	備考
1	褐色	土器少量混入、焼土粒子極少量	土層
2	純貝層	貝類全量	〃
3	混貝層	貝類全量	〃
4	にぶい黒褐色	炭化粒子、貝極少量、焼土粒子、土器少量	〃
5	黒褐色	ローム粒、焼土粒子極少量	〃
6	黒色	ローム粒子極少量	〃
7	黒色	貝類極少量	混土貝層
8	混貝層	貝類やや多量	混貝層

純貝層



番号	色調	含有物	備考
1	暗褐色	貝類極少量	混土貝層
2	純貝層	貝類全量	純貝層
3	黒褐色	貝類極少量	混土貝層
4	黒色	貝類極少量	〃
5	にぶい黒褐色	ローム粒極少量	混土層
6	褐色	ローム粒、粒子やや多量	土層

第15図　貝塚土層実測図

0　2 m

Ⅳ 貝　塚

はじめに

本貝塚は、調査前まで確認されなかったもので、今回の調査で初めて発見された貝塚である。台地の凹み、支谷の最奥部、谷頭の部分の若干落ち込んだ部分に、長さ10ｍ、幅７ｍ程で貝層は10～30㎝・10㎝～1.5㎝程の厚さで堆積していた。調査は２ｍ方眼のグリッドを設定し、各区それぞれに貝層を観察しながら掘り下げて調査を進めた。

遺物は多量の貝類と魚骨、獣骨等が検出された。以下、各グリッドの層序、貝類、土器等について概要を記していく。貝類、魚骨、獣骨は表で部位、数量を表す。土器は実測図、拓本で図示し、そのグリッドごとの層序にしたがい、述べていきたい。

1. 土　器

土器は、各グリッドから相当数の土器が出土した。古(ふる)くは縄文時代早期の田戸下層式から始まり、後期加曽利Ｂ式で終了している。主体を示す時期は、中期前半の阿玉台式Ⅱ式から加曽利ＥⅠ式が本貝塚の主体、形成された時期と推定される。以下これらの遺物を説明したい。

土器は、各グリッド別に出土した層序を参考としその都度述べる。一応時期別に分類して述べる。なお各区１は存在しない。予定したが遺物、貝層は見られ無かった。

Ａ－２区　（第16図）

本Ｇは、貝塚の北東側に位置し貝層の存在は、認められなかった。したがって土層は貝層を含まない３層が観察された。土器の総数は200片前後と少ない。いずれも貝塚以前に堆積した遺物で１は早期の沈線文系の土器で数量的には少なく20片程で認められた。２層から出土している。棒状工具を利用したもので焼成は良い。２は器表裏に条痕をもつ土器で多量の繊維を含む。２層から10片程出土している。３は少量の繊維を含む土器で口縁部下端に小孔をもつ。地文に縄文をもつ。数量的には少ない。時期的には１は早期の田戸下層式。２は茅山式、３は黒浜式、４・５は浮島式に入るか。６・７は土器片錘、８は管状土錘。　全体的に１層下端から出土している。

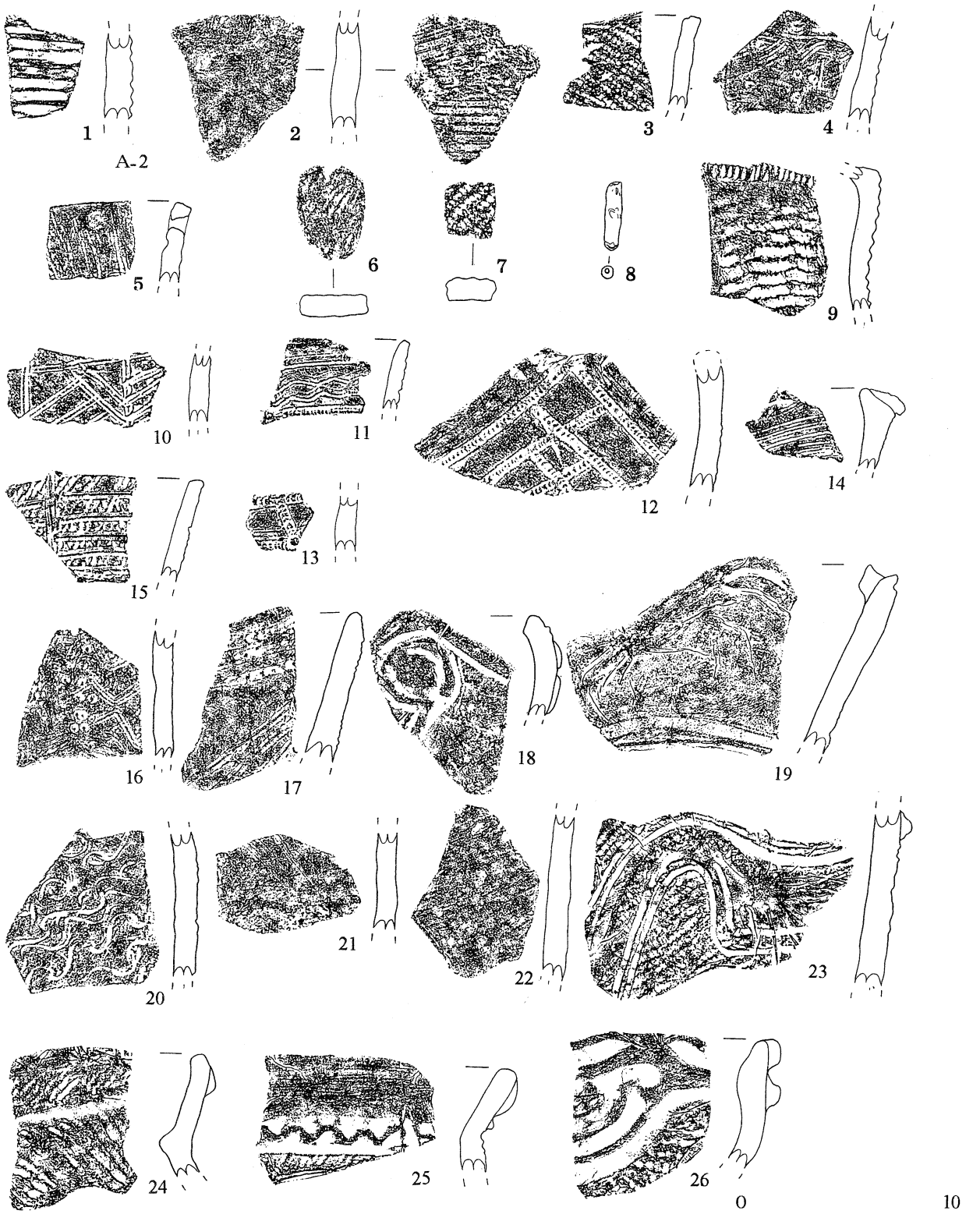
Ａ－３区　（第16図）

本Ｇでは、相対的に２区より遺物、土器は多く総数300片程出土している。量的には１層が多数を占める。２層からは９～17が出土している。半截竹管押し引き状で菱形を構成している。深鉢の山形部分の12・13。半截竹管の山形、鋸歯状の10。弱い波状を呈する11、平行沈線の間に沈線を充塡する15。口縁部に帽子状に貼付する14が有る。竹管刺突と半戴竹管による平行沈線の16、17は山形の口縁部をもち半截竹管による押し引きを三列配し、胴部は平行沈線のみである。いずれも縄文前期後半の土器群で諸磯式～浮島式に該当する。

18～22は阿玉台式Ⅳ式に該当する土器でキャリパー状の18、口縁部磨消する19、Ｓ状の結節回転文が見られ、20は大木２ｂ式で沈線文。いずれも沈線を用いて円形、平行沈線が見られる。23は、平行沈線による沈線で深鉢胴部。24・25は地文に縄文をもち内側に稜をもつ、24は口縁部に無節の縄文古式。26は弱いキャリパー状の口縁部をもち幅の広い沈線をもつ。１層の一部２区から出土している。

B－2区　（第17図、第18図）

本Gからは貝塚が一部かかる。貝は耕作土下から検出された。層位は純貝、混貝層、黒色層に分けられる。図示した1～12は3層出土の深鉢型の口縁部で半截竹管押し引き、平行沈線、アナダラ属の鋸歯状文の6、7、8、9、10。平行沈線の3、5、11、12が見られた。諸磯式から浮島式の一群である。13～15は半截竹管の押し引き沈線窓枠状区画をもつ金雲母を含む。13は逆U字状の沈線で口縁は平縁で沈線を3条巡らす。16～31は瘤状突起と押し引き沈線、刻み目、半截竹管刺突、波状沈線、耳状通孔、窓枠状の部分の通孔が見られ弱いキャリパー状を呈する。その

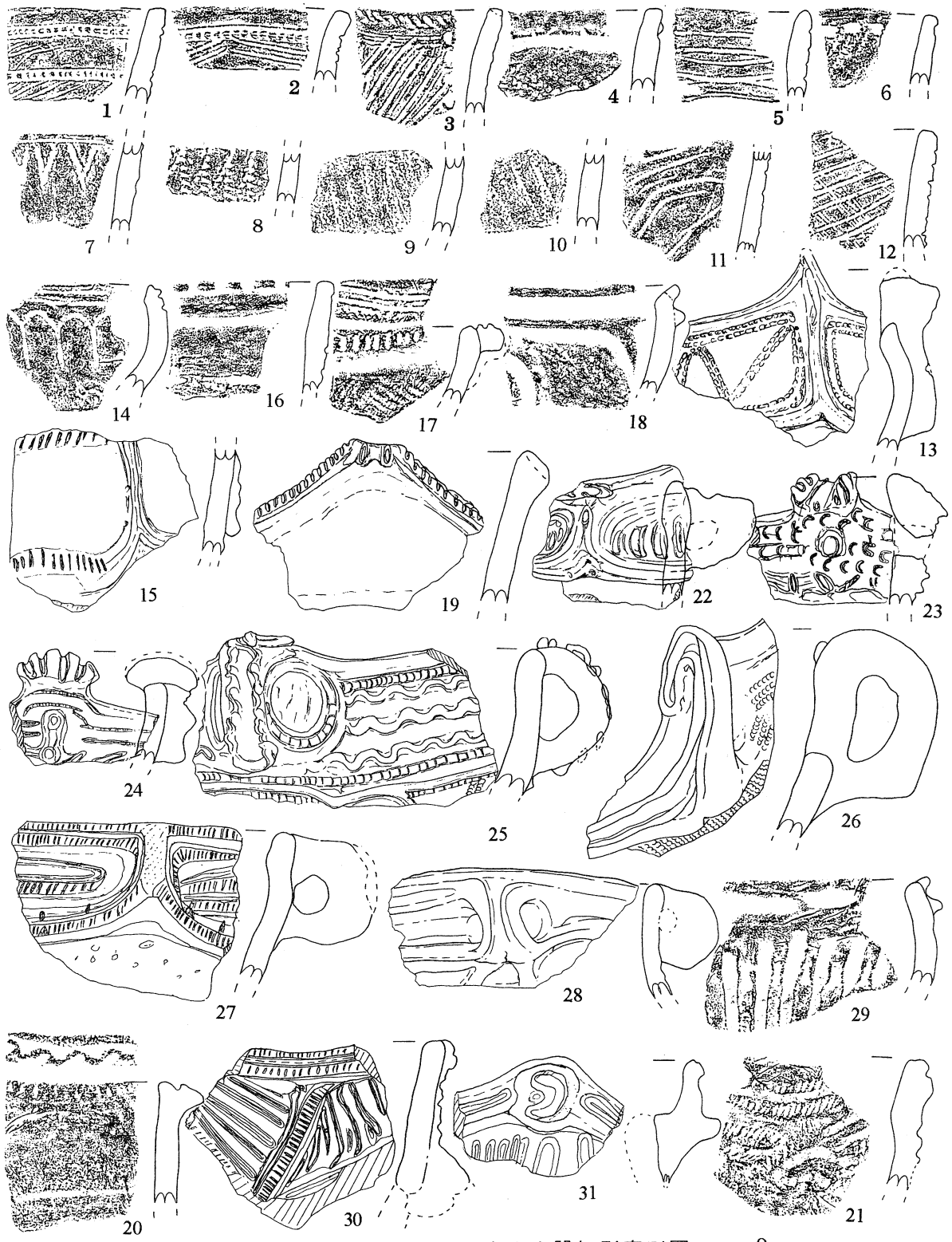


第16図　A－2・A－3区　出土土器拓影図

他幅の広い沈線をもつ29～31があり31は小波状部に渦巻状文をもつ。21は円形状の部分にヘラによる幅の狭い沈線を施す。内側に弱い稜をもつ中峠式土器に比定される(27)。他は加曽利ＥⅠ式古式で有る。32～40は加曽利Ｅ式の土器で口縁部は弱い波状を呈し渦巻き文を左右に反対に配するものも見られる。その他、隆帯を口縁部にそって３条施すものもある。１層出土。

Ｂ－３区　（第18図、第19図、第20図）

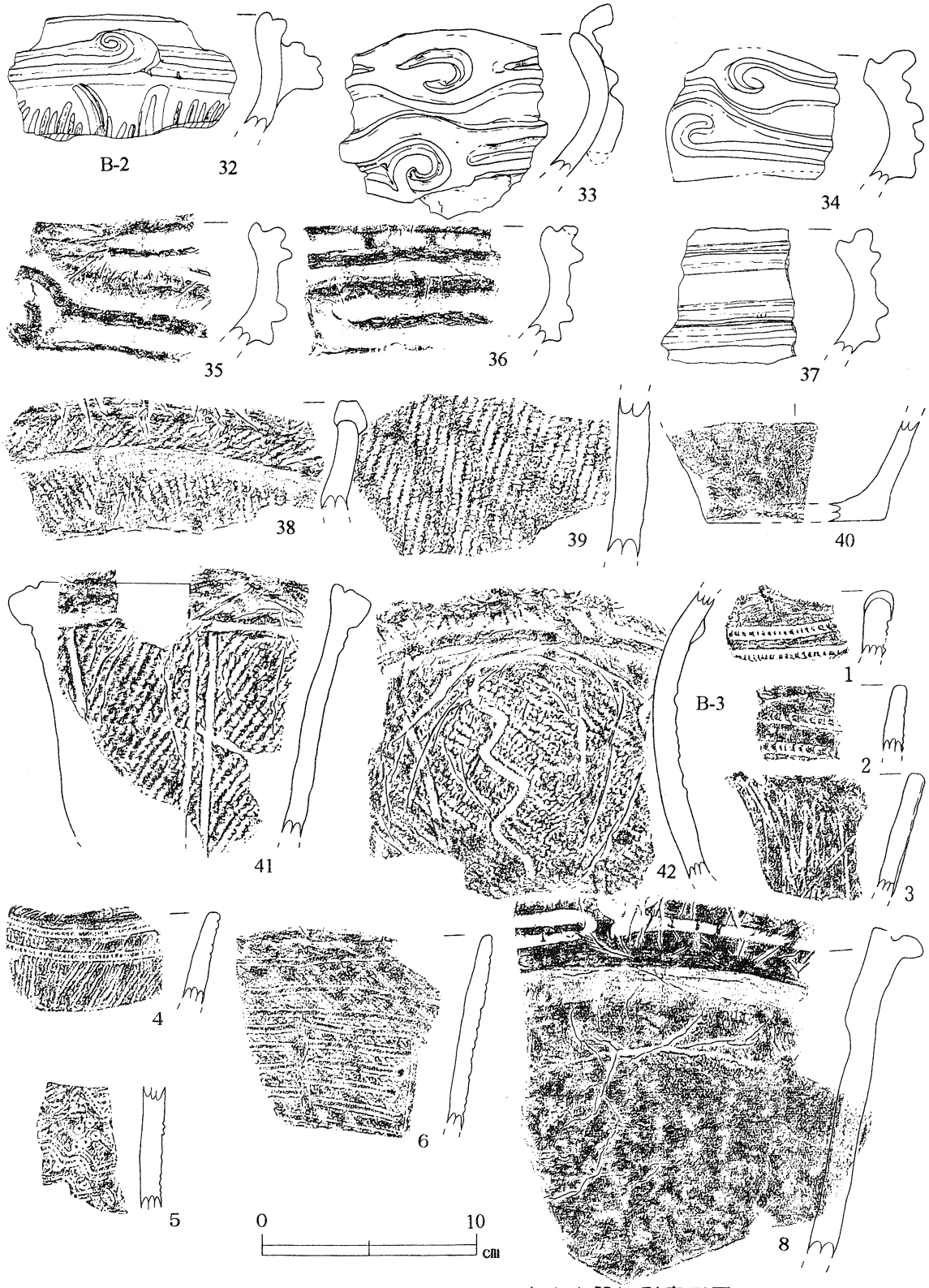
本Ｇからは20片程の前期後半の土器が出土した。１～６は半截竹管の押し引き沈線を２条口縁部に添って巡らす１、２、４とハマグリの雑な波状文をもつ３と竹管刺突の円形文と半截竹管に



第17図　Ｂ－２区　出土土器拓影実測図

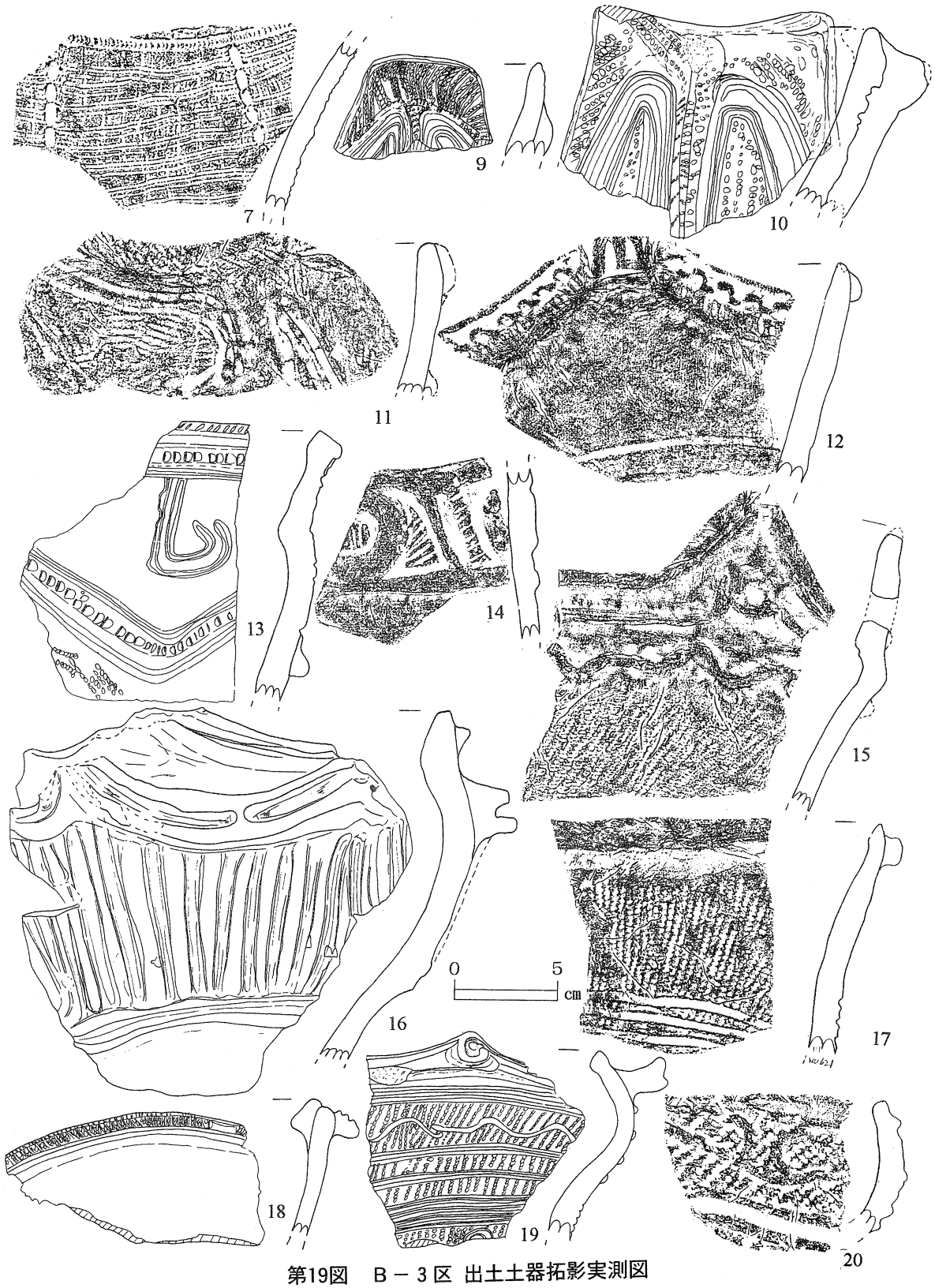
0　10 cm

よる波状沈線をもつ5がある。6は撚糸文の上に半截竹管の平行沈線が施されている。7は撚糸文の上に半截竹管による押し引き沈線、棒状刺突で分割される。8～10は扇状突起をもつ9、大型の10がありいずれも隆帯と沈線で囲い中にまばらな単節の縄が粗く充塡されている。阿玉台式のⅣ式の新しい時期である。11は隆帯に縄を施文、窓枠状区画には沈線が2条見られ内部には縄文が充塡される。12は波状口縁部頂部には刻み目、波状沈線を施す深鉢で口縁部が開く形態か。13は平縁の深鉢と推察され口縁部に狭く浅い刻み目で角押し状文が見られ沈線の縁に釣り針状懸垂が見られる。14は隆帯区画の中に三ケ月状、円形状区画が見られる。これらは中峠式に該当する。



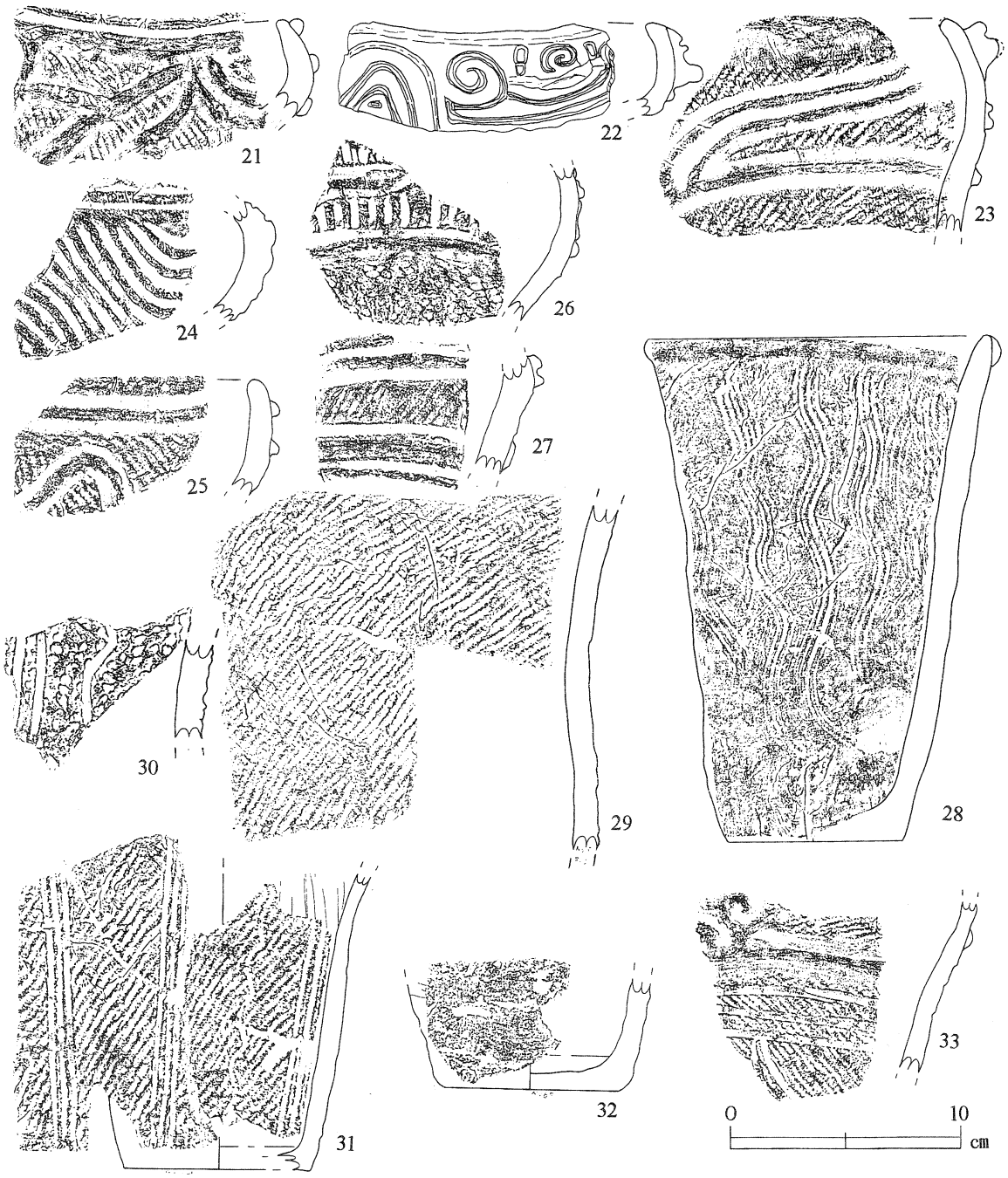
第18図　B－2、B－3区　出土土器拓影実測図

15、16は山形突起をもち隆帯区画、波状文と通孔をもつ15と口縁部に隆帯を貼付し沈線状刻みと口縁部がキャリパー状で隆帯を区画し２条の沈線に見せている16があり下位は太めの縦位の沈線が施され横位の沈線で区画する。 19は口縁部キャリパーで 頂部に渦文を配する。 下位は平行沈線、波状沈線で間は撚糸を粗く充塡する。加曽利ＥＩの古式で有る。21は平縁で円形状の隆帯で不規則な構成でそのあいだにはキャタピラ文が充塡する。加Ｅ式土器で22も渦文、Ｕ字状文をもち加Ｅ式の新しい段階で有る。これらはいずれも１層の貝層と伴出している。いずれも深鉢型形態で有る。23～33は隆帯区画の構成で口縁部はキャリパー形態。沈線の24、25が有る。30は米



第19図　Ｂ－３区 出土土器拓影実測図

粒状の縄をもつ。28は櫛描き文を口縁部から底部にむかって垂下する。４本単位。31の底部は平行沈線と波状沈線が見られる。33は波状部に渦文が見られ、下位は沈線。加曽利ＥⅠ式。

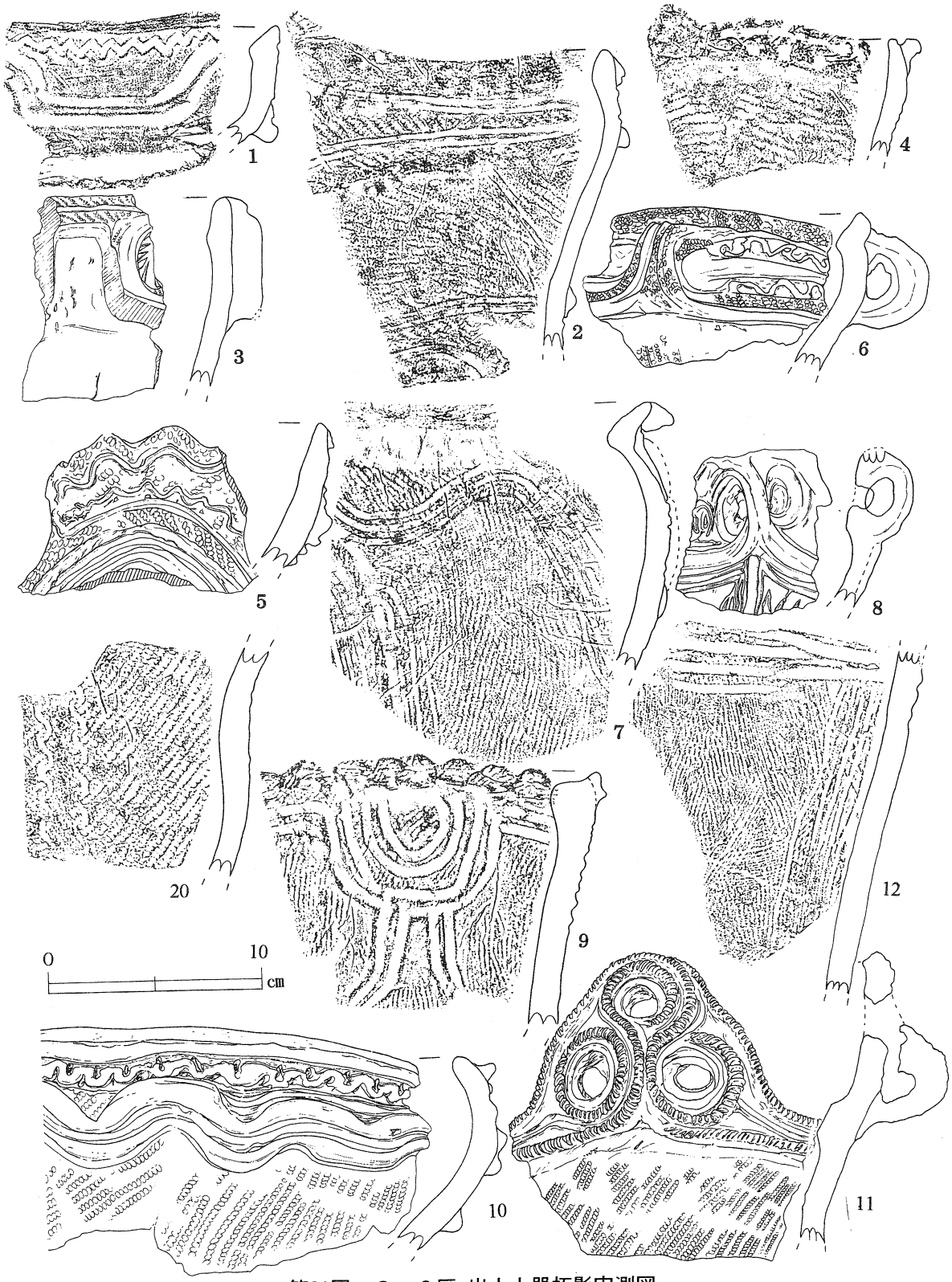


第20図　Ｂ－３区 出土土器拓影実測図

Ｃ－２区　（第21図、第22図）

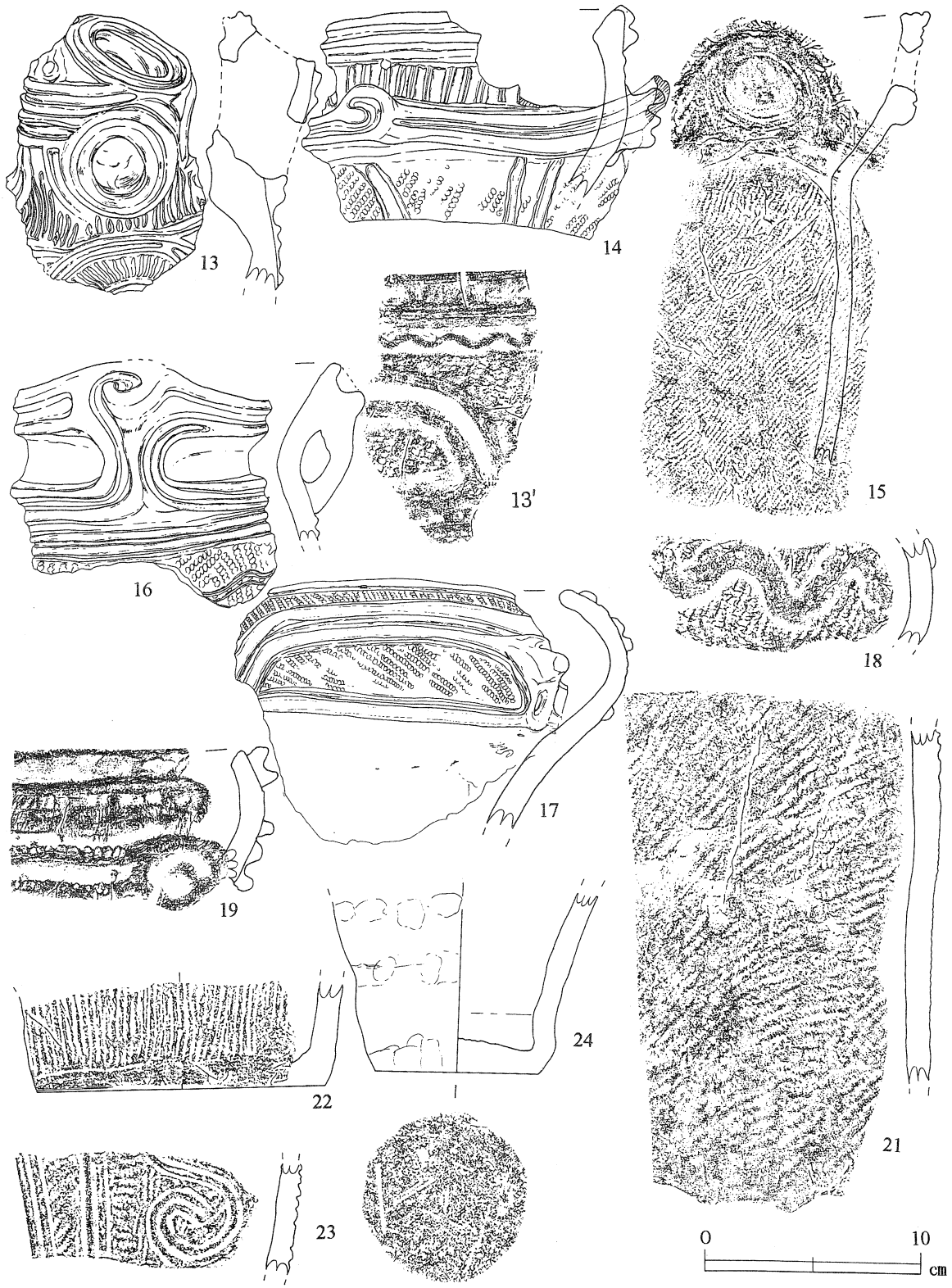
本Ｇでは貝塚の最も良好な状態で遺存していた地区で貝層も純貝層が70㎝程確認出来た。確認面からは中峠式、加曽利ＥⅠ古式が見られた。１～４は口縁部でキャリパー状を呈するもので１は隆帯による窓枠状区画で鋸歯状文を充塡し２は隆帯部分に縄文を施文、その間に平行沈線を上下に配する。波状口縁で阿玉台Ⅳ式の古式に近い。４も口縁部に隆帯を貼付し棒状工具による刺突が見られる。これらは中峠式の新しい時期に比定されるものである。３、５～11は加曽利ＥⅠ式の古式の部分で３は隆帯に縄をもつ窓枠状区画で刻み目が認められ中峠式に近い。５は阿玉台式の扇が退化、変化したものでかなり色を残している。頂部は波状を呈する。波状沈線、沈線

で内部を充塡している。6は、通孔をもつ深鉢で区画内部は波状沈線を充塡、隆帯には単節の縄を施文。口縁部内側に稜をもつ深鉢型土器で有る。7は、口縁部内側に稜をもち外側に隆帯を貼付する土器で胴部には幅の狭い隆帯にＬＲの縄を施文し沈線が隆帯を中心に4本単位で垂下する。地文はやや長目の縄でＲＬで、やや壷形に近い土器である。8は通孔をもつ土器で隆帯は無文、隆帯の両側に沈線をもつ。9は口縁部に指頭状押圧と4条の円形沈線。10は隆帯下部に唐草状文を配し下部に隆帯を二分する沈線がある。11は3つの通孔をもつ突起部で隆帯上には三ケ月状のヘラによる刻み目が施されている。刻み目の隆帯はＳ字状。円形状等を呈する。13～21はいずれも加



第21図　Ｃ－２区 出土土器拓影実測図

曽利ＥＩ式の古式に該当する土器群である。層位的にはほぼ１層の中に含まれ明確な差異は認めめられなかった。土器は眼鏡状の通孔をもち短い沈線を配する13。内側に稜をもち弱いキャリパー状口縁部をもつ14は隆帯による渦文をもつ。地文はＲＬの縄。15は、円形の小突起をもち中央に円形の孔をもつ。口縁部が外反する小型の深鉢で有る。中峠式に近い土器である。16は隆帯による窓枠状区画をもつその間には通孔をもつ。上部は小波状頂部を呈し渦文をもつ。口縁部は外反、加曽利ＥＩ式の古式に該当する。13′は口縁部に幅の狭い無文帯をもち下部に波状沈線を施し隆帯区画による窓枠状様相を示す。中峠式の新しい部分、加曽利ＥＩ式の古い時期が推察される。

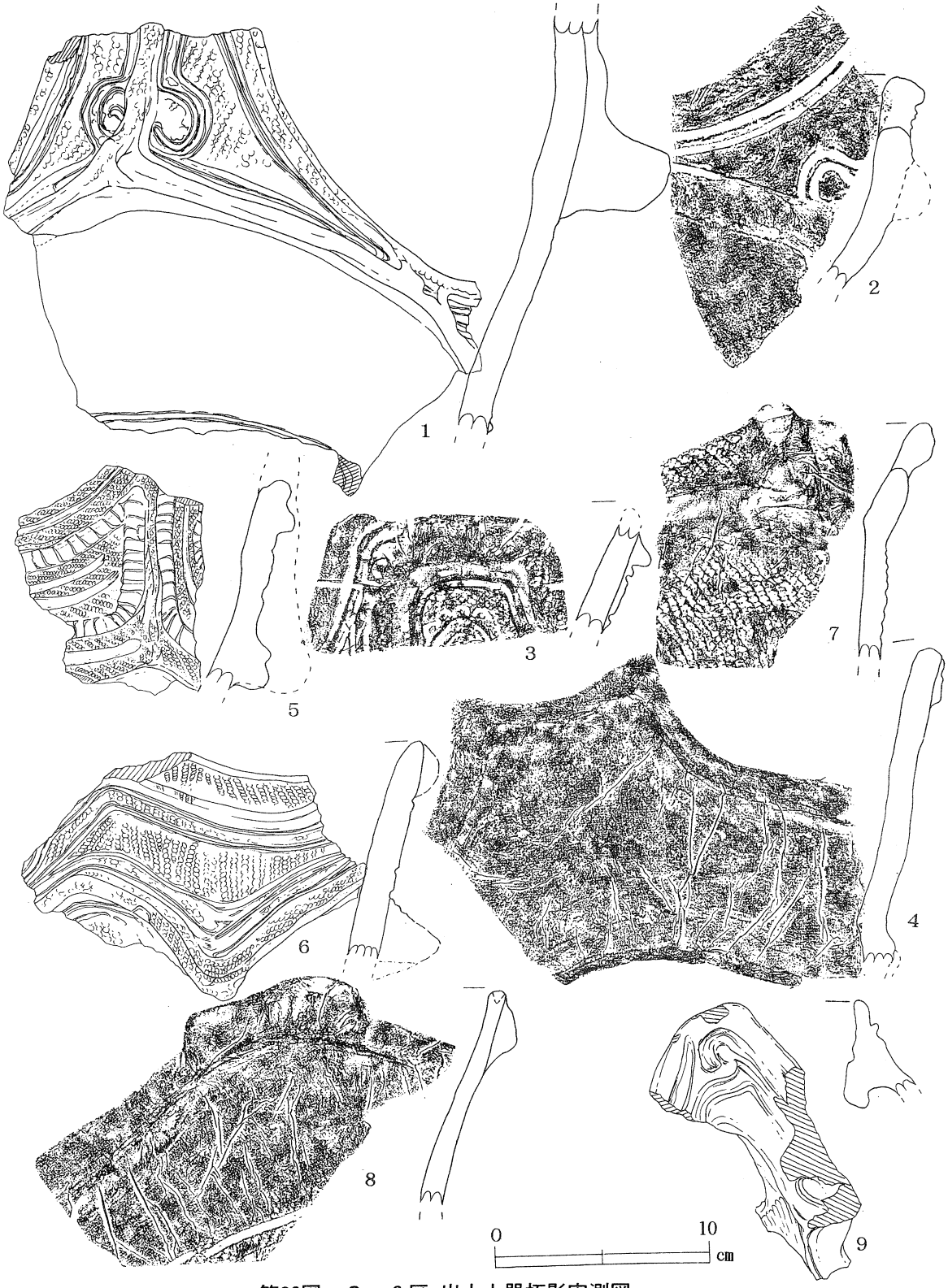


第22図　Ｃ－２区 出土土器拓影実測図

17は強いキャリパー状を呈し隆帯による窓枠状区画、渦文をもつ。18は、口縁部の一部で弱いキャリパー状を呈する。中央部に太めの隆帯を波状に貼付する。19は隆帯に棒状工具による押圧が加えられ渦文をもつ。口縁部はキャリパー状を呈する。加曽利ＥⅠ式の古式である。その他は底部、胴部が見られるがこれらの土器と伴出する事から同時期が推察される。23は、沈線による渦文を呈する胴部破片で縦位の沈線区画の中に描出される。本例は大木８ａである。

Ｃ－３区　（第23図、第24図、第25図、第26図、第27図、第28図）

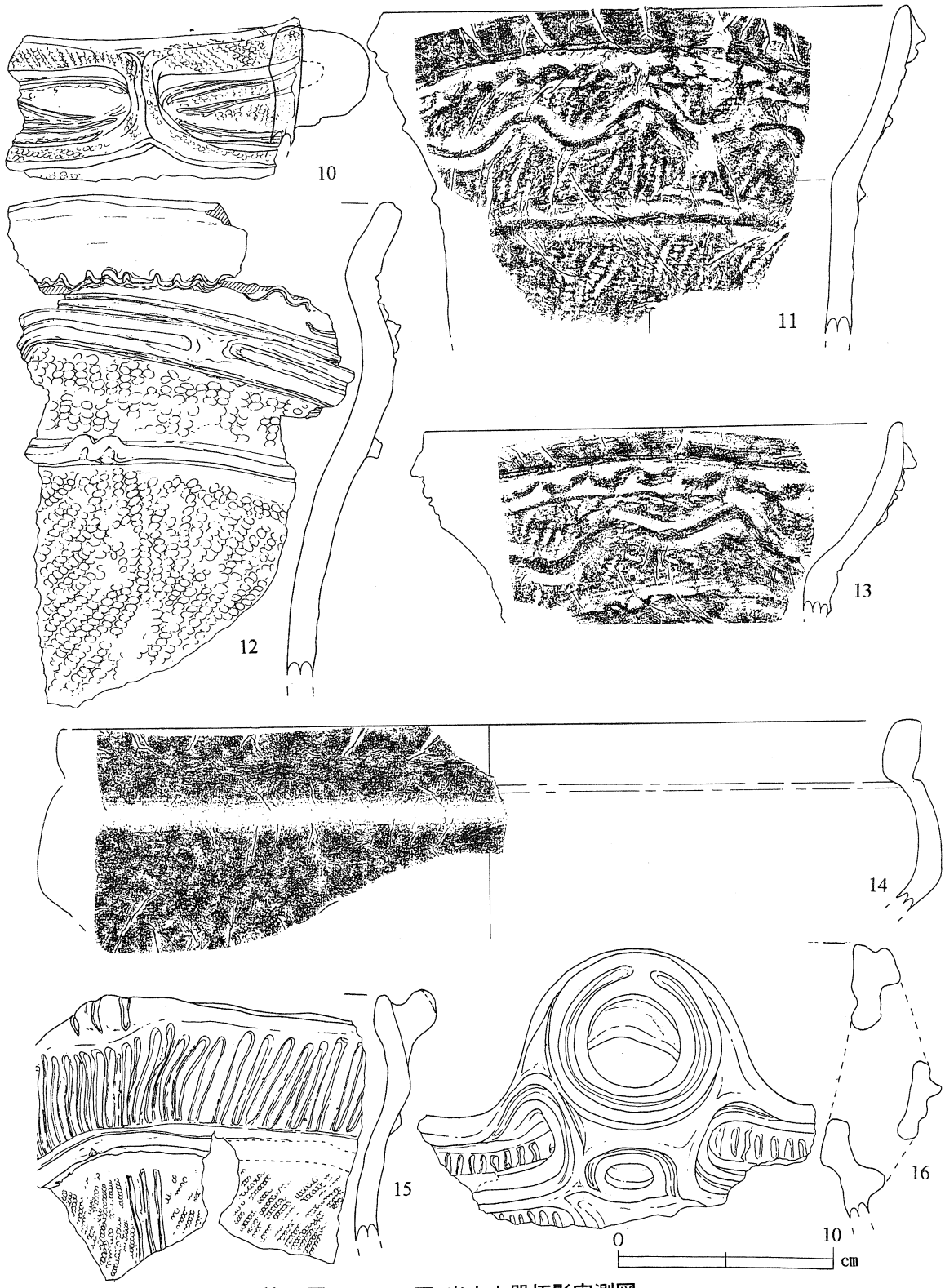
21図１～４は阿玉台式に該当する土器で１はかなり大型の山形突起をもつ。中央部に隆帯をも



第23図　Ｃ－３区 出土土器拓影実測図

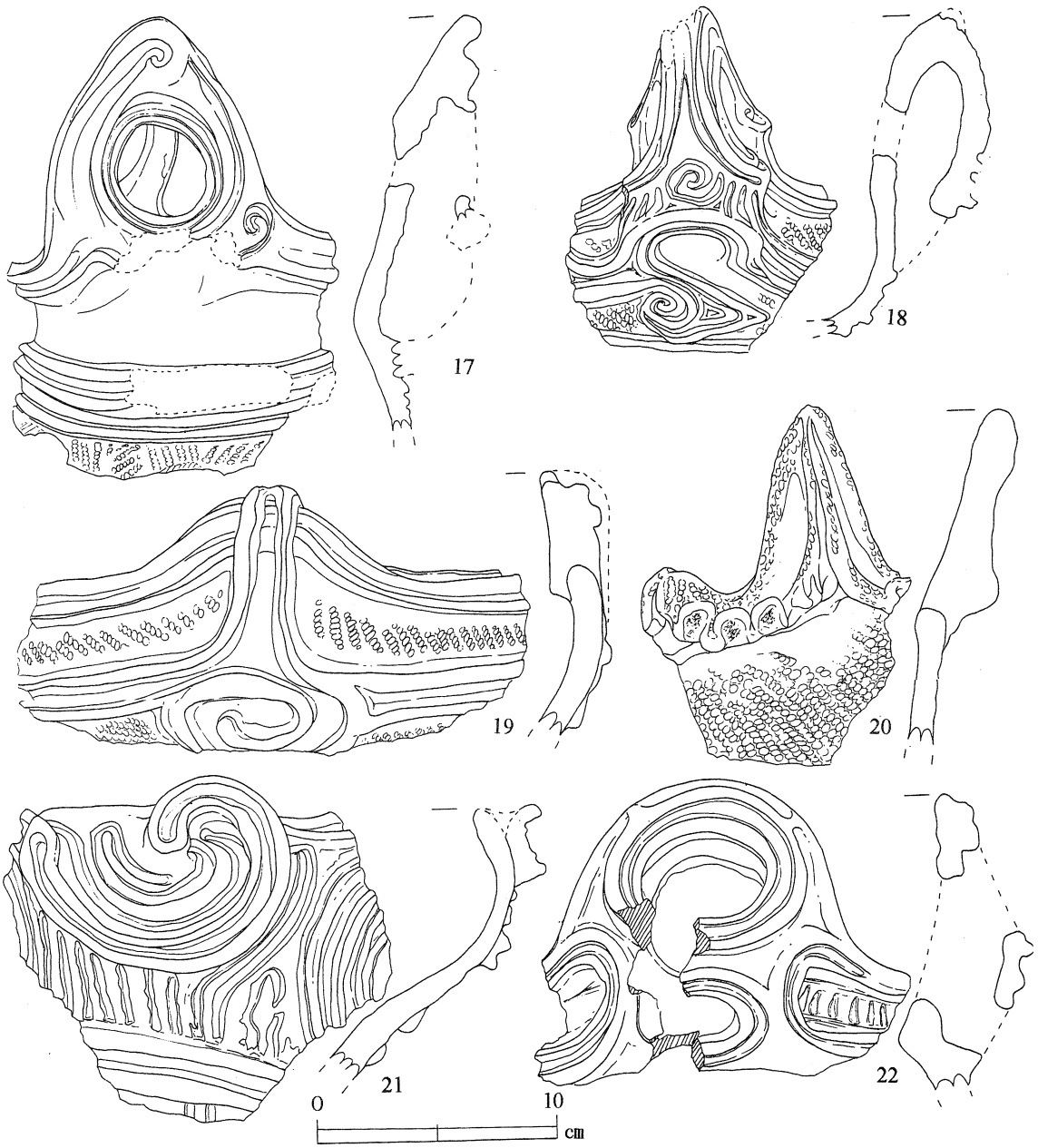
ち左右に釣り針状の沈線が施されている。その間にはＲＬの縄が充塡されている。２もほぼ同様の構成と思われるが口縁部はすべて無文化し２条一組みの沈線による文様が見られる。１より若干古手。３は扇状の突起部で押し引き沈線が見られる。地文にＲＬのまばらな縄が見られる。４は双頭状の突起をもつ無文の土器で口唇部に薄い隆帯を貼付している。口縁部が外反する大型の浅鉢と推察される。

５～８は加曽利ＥⅠ式の古手の一群でほぼ前者と同様の出土を示している。５の隆帯は阿玉台式そのままで押し引き状の沈線をもち、その間に縄文を密に充塡している。外反する口縁部は阿玉



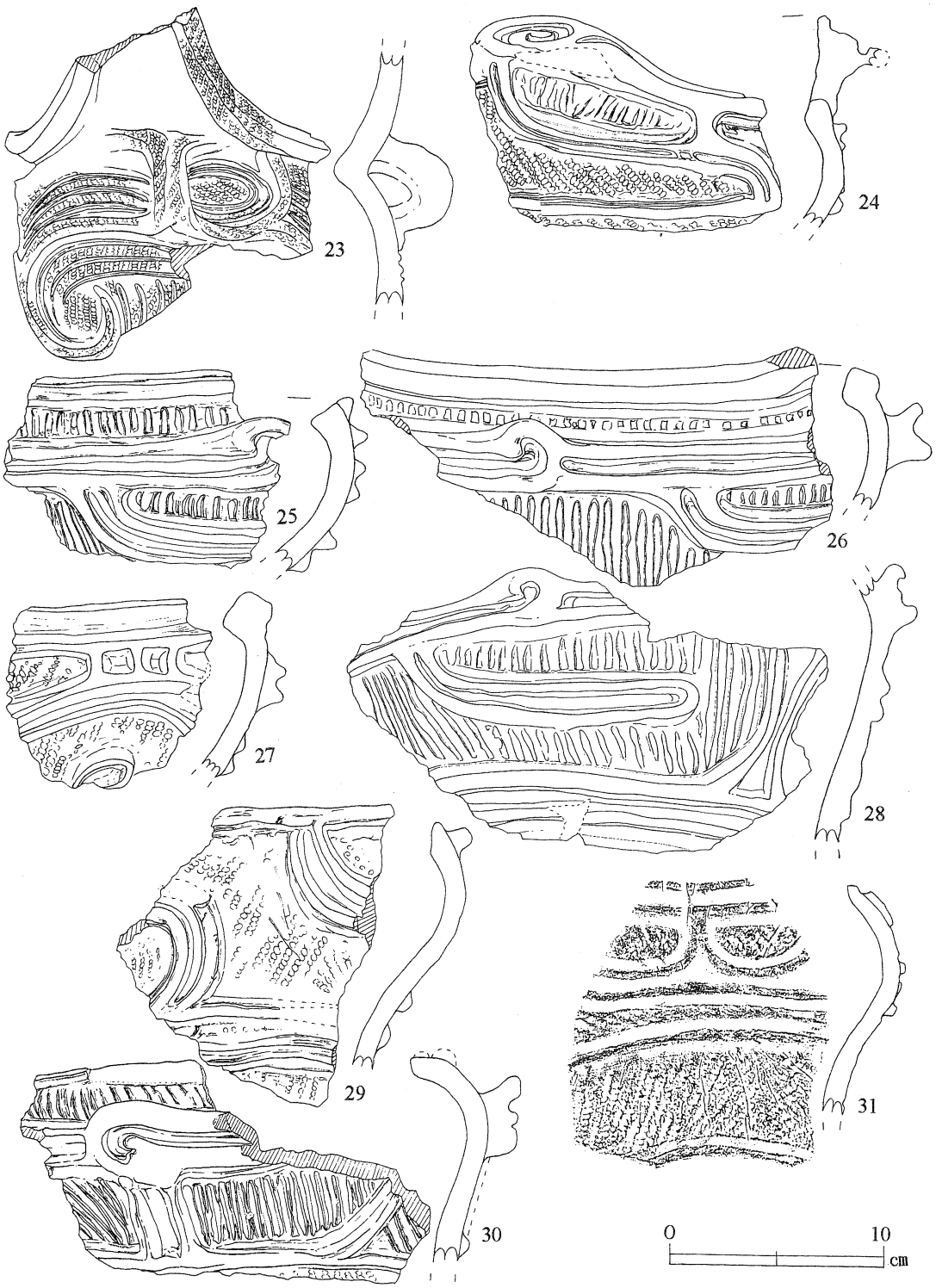
第24図　Ｃ－３区 出土土器拓影実測図

台式そのものである。6は、隆帯の間には縄文を充填しその間に沈線をもつ。阿玉台Ⅵ式である。8も前者の4が退化した感じの土器である。山形の口唇部に刻み目をもつ。9は、耳状の突起部分で沈線による渦文をもつ。加曽利ＥⅠ式の古手である。第24図 11～13は口縁部は外反直立的な無文帯をもつ一群で中峠式土器である。無文帯下部には波状文、隆帯による貼付が見られる。11、13は文様は相似するが別個体。14は浅鉢の磨消された土器で口縁部は肥厚し浅い沈線をもつ。一部赤彩が認められた。加ＥⅠ式範疇の土器である。15、16は加層利ＥⅠ式の古手の土器で小波状の15頂部には刻み目をもつ。16は3通孔をもつ円形の突起にも大型の孔をもつ。加層利ＥⅠ式古式である。第23図 17～22は加層利ＥⅠ式の古い時期で17、18は鶏頭状形態で3ヶ所の通孔をもつ。ともに釣り針状の渦文を施す。18は沈線と縄文を充填している。中峠式の色を残す。19は頂部に隆帯を貼付、窓枠状区画内には縄文を充填。20は三角型状突起が見られる。すべて縄文を充填し指頭状押圧が見られ口縁部は外反する。21は口縁部キャリパー状で隆帯、沈線で渦文で口縁部の文様帯を構成栃木県方面の浄法寺タイプ。22は16と同一個体の口縁部と推察されるもので3個の通孔をもついずれも加曽利ＥⅠ式の古手である。円形突起をもつ深鉢型土器で橋状の通孔をもつ。沈線で釣



第25図　Ｃ－３区　出土土器

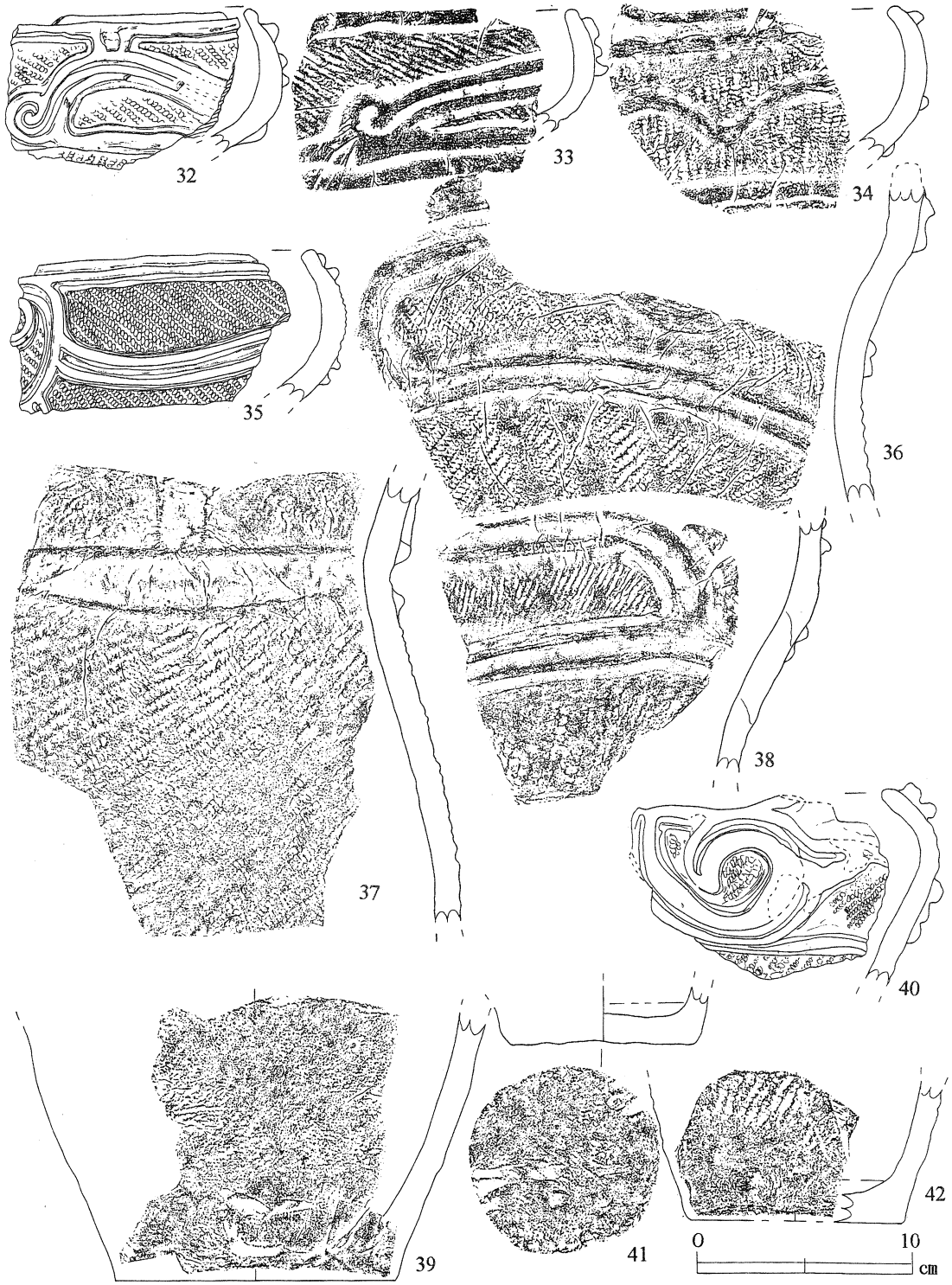
り針状モチーフをもつ。隆帯には縄文が施文されている。加層利ＥＩ式の古手。中峠式に近い。18 ～ 24 迄は円形渦文をもつ土器で口縁部はいずれもキャリパー状形態で隆帯区画のなかに縄文、沈線を充填している。口縁部内側にかなり顕著な稜をもつ。21 には稜はない。25 はキャリパー状口縁部で隆による眼鏡状区画をもち中には縄文を充填下位に隆帯が３本見られる。24 図 26 ～ 29 口縁部キャリパー状で隆帯による「の」の字渦文、波状文が見られ内部は縄文を充填する 31 がある。32 は隆帯に微隆起線文に近い形態で貼付。地文はすべて縄文。器形はやや口縁部が開く深鉢と推察され胴部は僅かに張ると推察される。33 は口縁部キャリパーで隆帯地画で渦文をもつＩ式の口縁部。



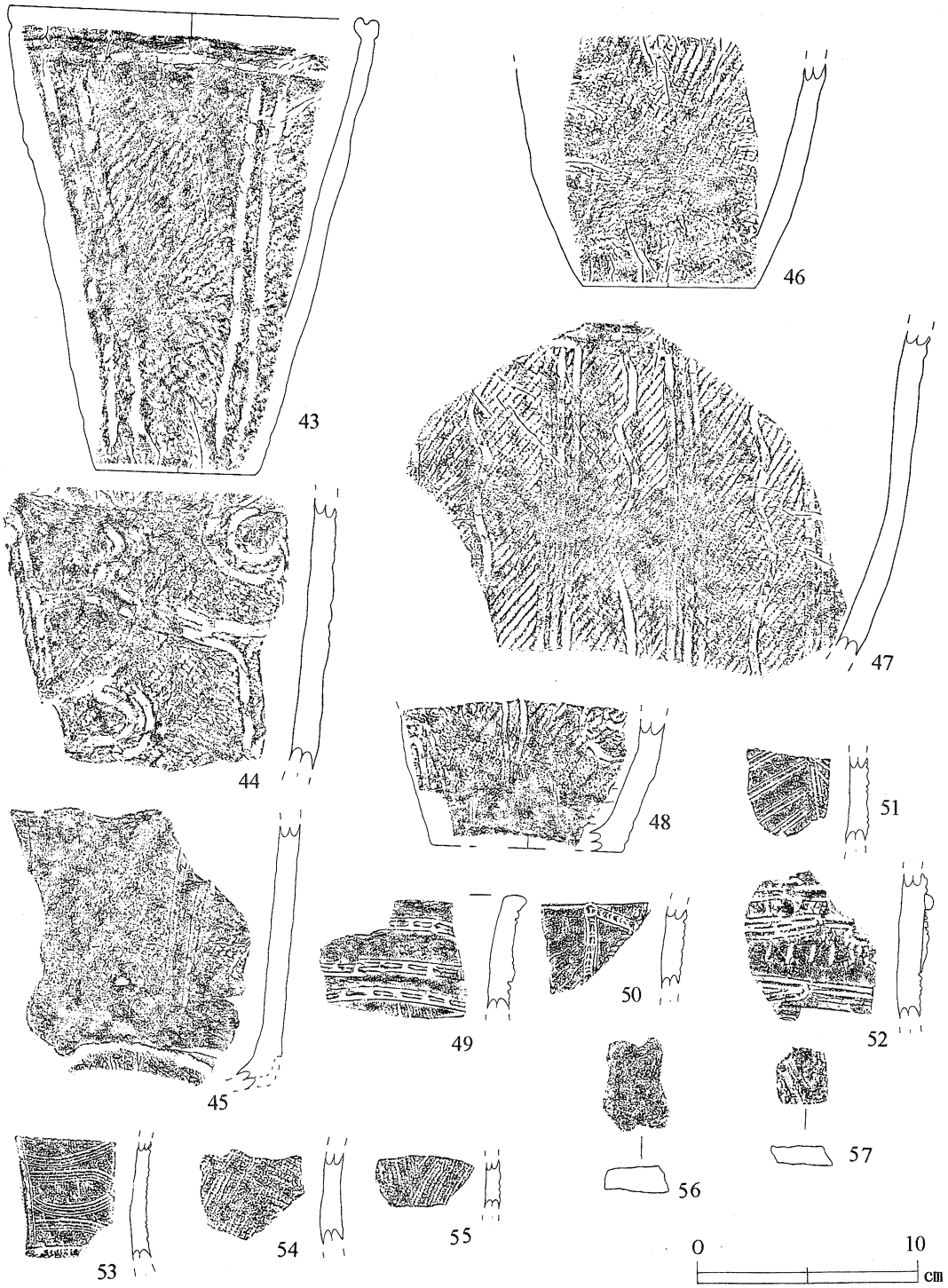
第26図　Ｃ－３区 出土土器拓影実測図

1層出土。39・41・42は底部で形態から阿玉台。

27図37は縦位の二本隆線の間に弱い波状の沈線を施文する大木系土器の胴部破片で有る。39・42の底部は同様な時期が推察される。36は加ＥＩ式の胴部破片。44は２本単位の沈線で釣り針状文様を描出している。43は加曽利Ｅ式で直線的に立ち上がる小型の深鉢で２本単位の沈線を縦位に垂下する。口縁部に一条の沈線をもち口縁部に幅の狭い無文帯が巡り平縁である。49～52は前期後半浮島式の破片で３層から出土している。竹管押し引き。53～55は弥生式土器で弥生時代後期の土器群である。56～57は土器片錘で長軸方向に切り目を施す。



第27図　Ｃ－３区 出土土器拓影実測図

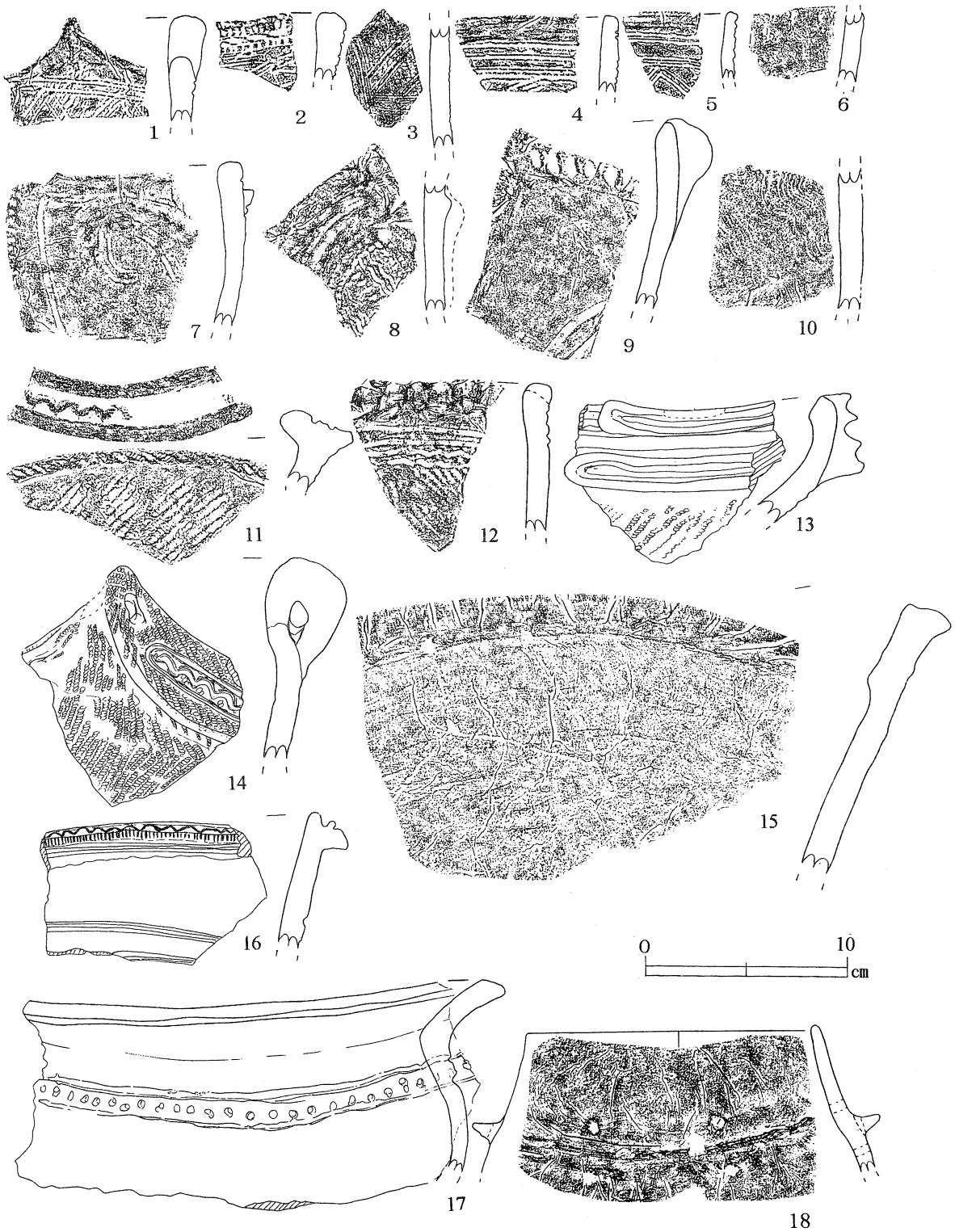


第28図　　C－3区 出土土器拓影実測図

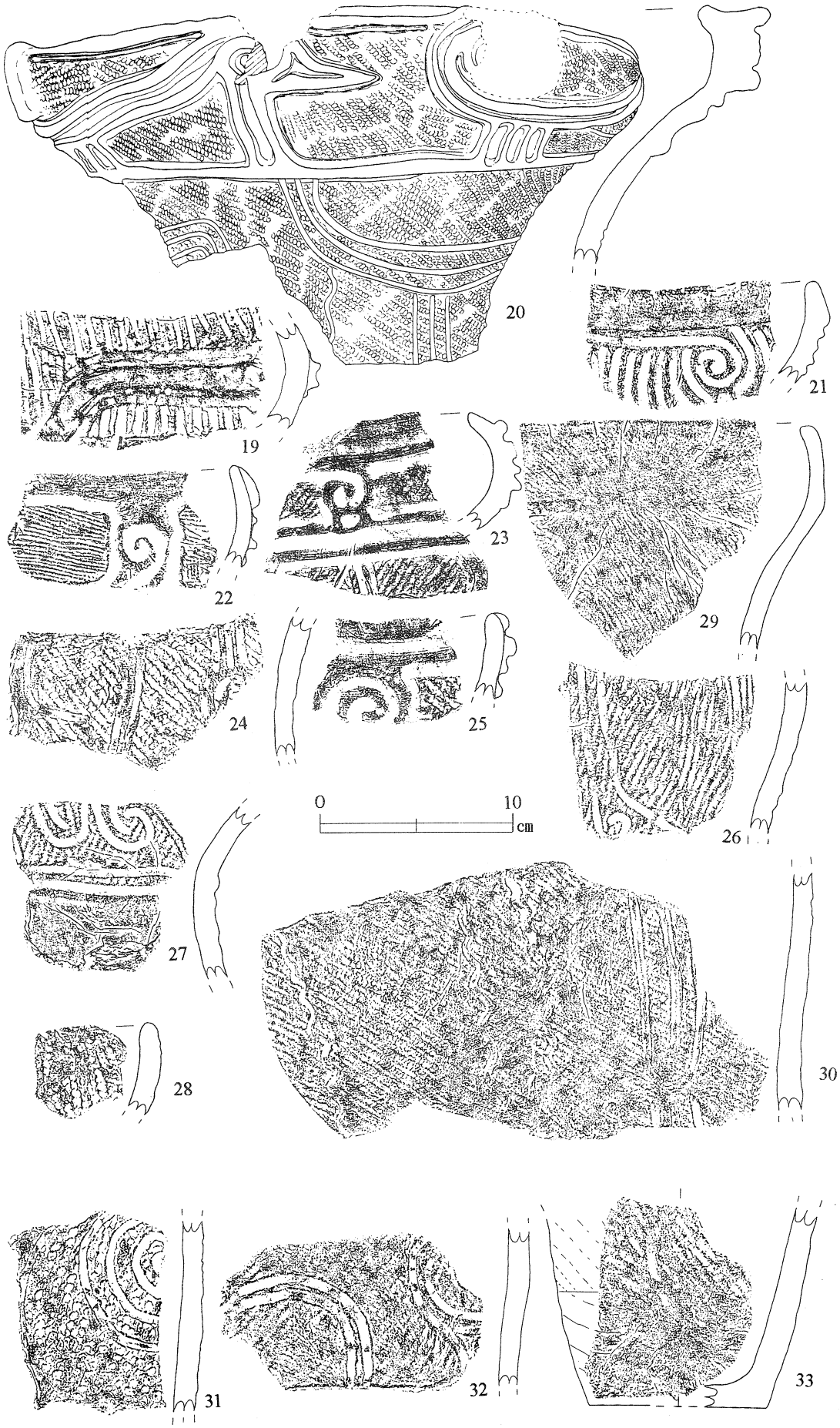
C－4区　（第30図、29図）

本Gからはかなりの遺物が貝層に混入して出土している。貝層は3層に分類され最下層から出土した。1～6は諸磯式から浮島式で山形突起、平行沈線、押引沈線、アナダラ属の貝殻文等が見られる。7～9、12、15は阿玉台Ⅲ式のあたらしい時期で混貝層から出土し11、13～25は1層の純貝層から検出され、ほぼ加曽利E式の古手の土器で11、12は中峠式に比定される土器で口縁部に波状文、12は指頭押圧等が見られる。14は山形突起に円形の穿孔をもち沈線区画の中に波状沈

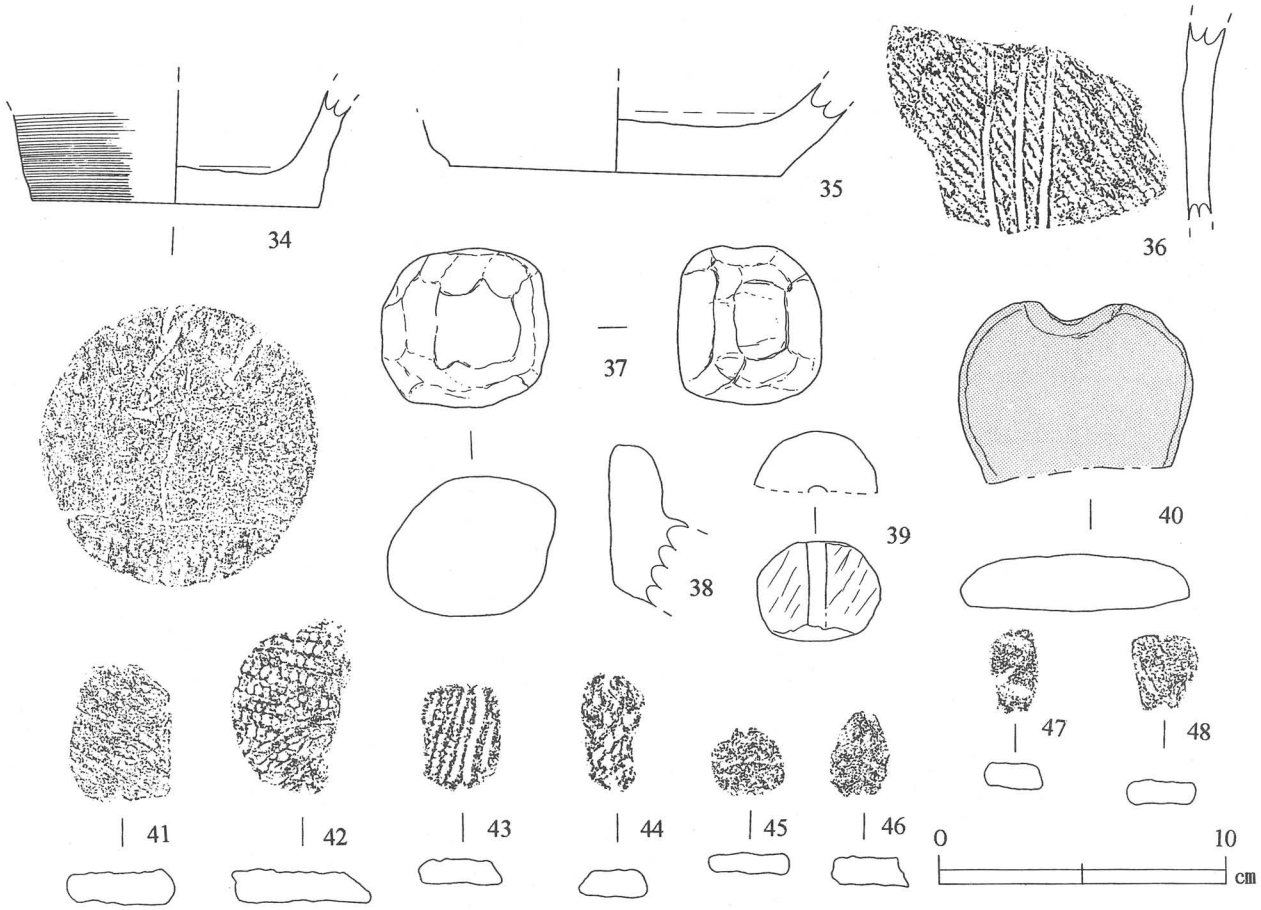
線を施す。17は口唇部外反する。20は窓枠状区画内に渦巻文、３本単位の沈線で三角形モチーフ。単節を全面に施文、19、21は隆帯区画に沈線を施し21は渦文を中心に文様を構成、口縁部無文帯、キャリパーは弱い。加曽利ＥＩ式の古手。22、23、25、は口縁部無文帯で窓枠状に区画し渦文、縄文、沈線を充眞している。その他沈線を施す胴部破片が見られ渦文をモチーフをもつ24、26、27、が有る。縦位の波状沈線と沈線の組合せ30が見られる。31、32、33も同様である。（第30図）その他すり石、石製品37？が有る。40から48迄はすべて土器片錘で多様な形態と重さが見られる。18は有孔鍔付土器である。（第29図）



第29図　Ｃ－４区 出土土器拓影実測図



第30図　C－4区　出土土器拓影実測図



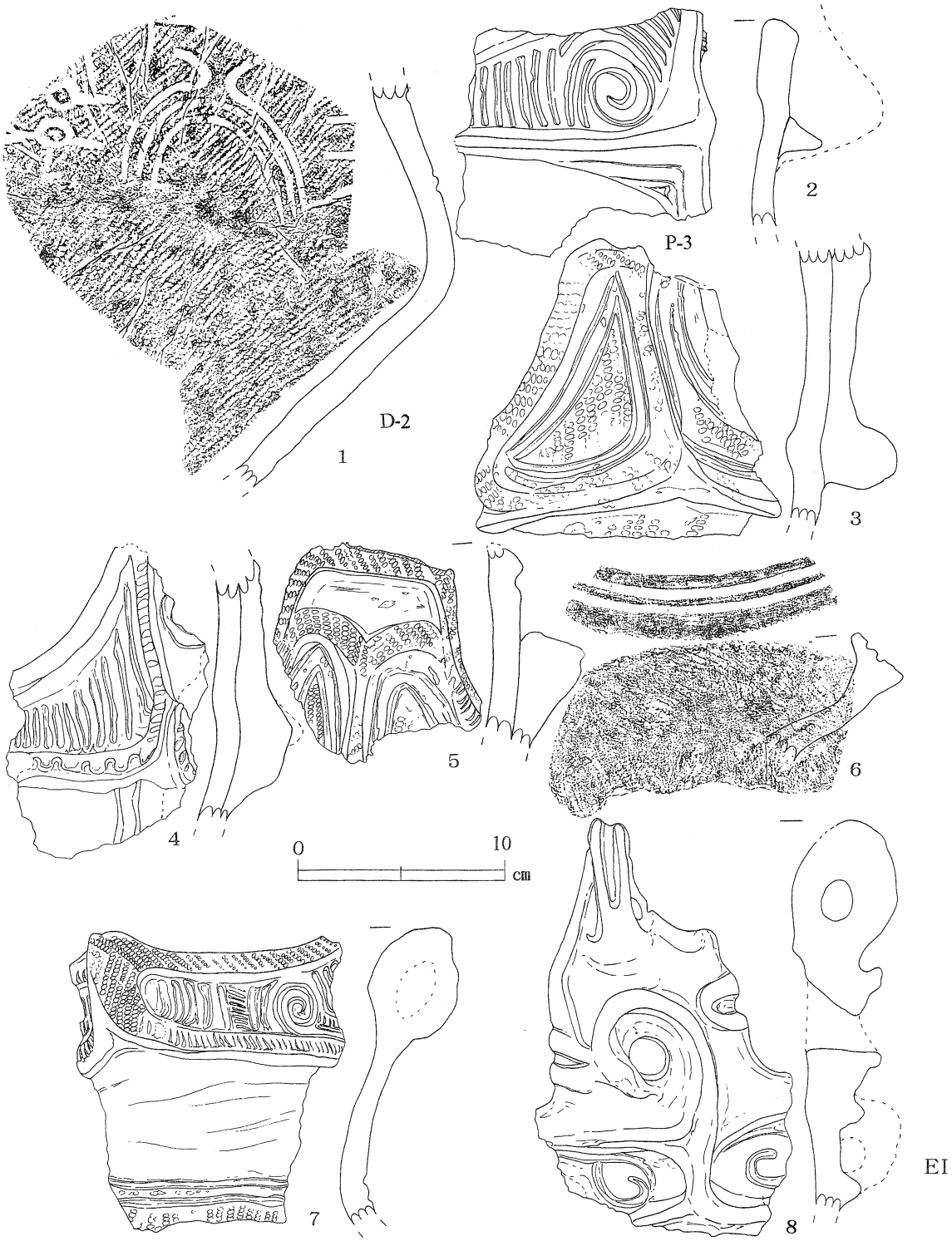
第31図　C－4区 出土土器拓影実測図

D－2区　（第32図）

1のみがD－2区出土の土器で胴部は「く」の字状に屈曲し3本単位の沈線で半円形渦文と円形文、剣先文状モチーフをもつ甕型土器で東北地域の大木8a式系の文様をもつ。

D－3区　（第32図、第33図）

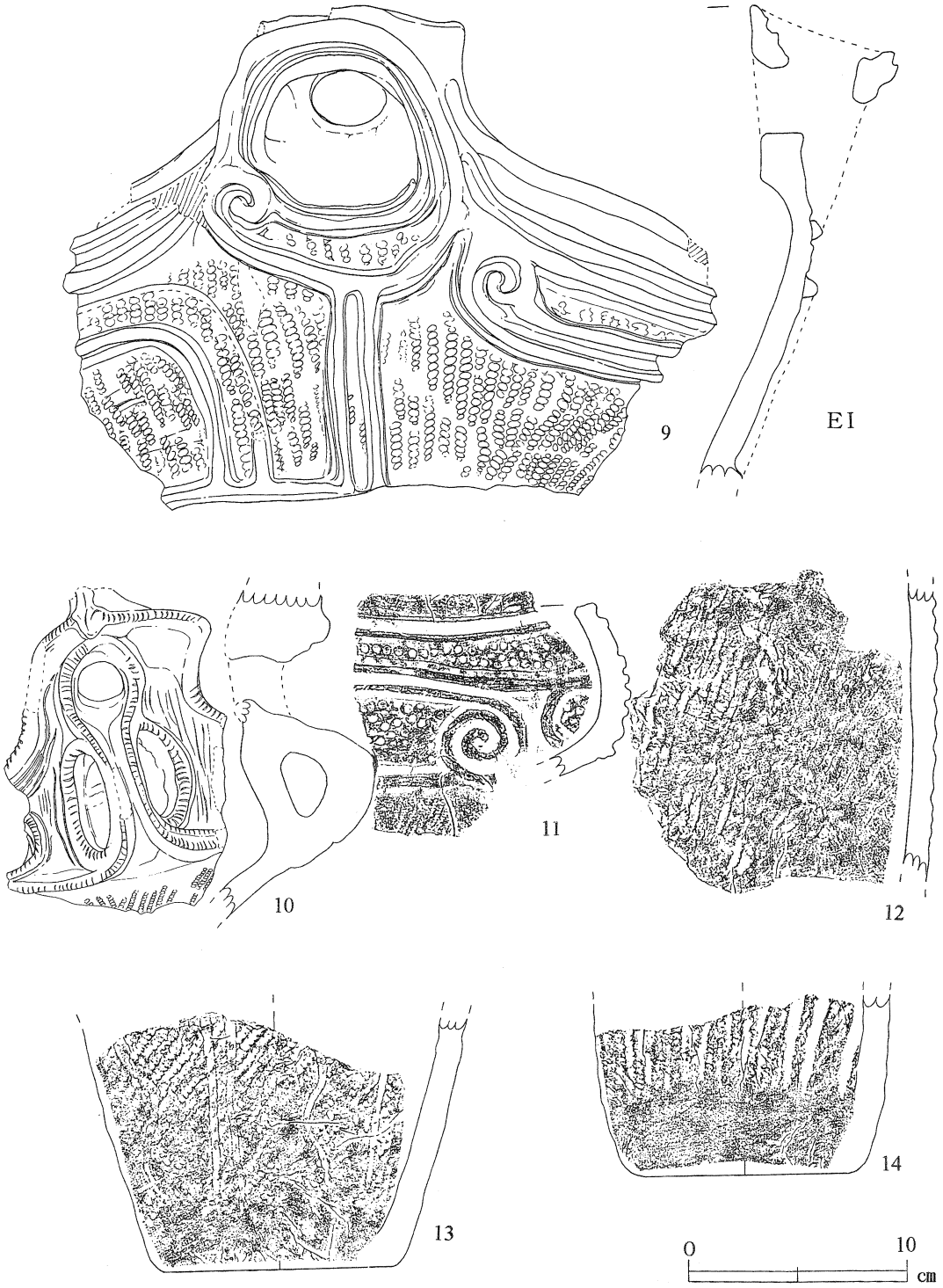
本Gからはかなり多量な遺物が出土した。32図2～6は阿玉台式の終末加曽利EⅠ式の古式で口縁部に山形をもつもの。扇状、浅鉢で口唇部に沈線をもつものが見られる。いずれも口縁部が外反する大型の深鉢形土器で隆帯には単節の縄を施す。内側には沈線が施されている。7は隆帯で窓枠状区画をもち渦文、縦位、横位の沈線を施す。口縁部は小波状を呈し頂部に通孔をもつ。隆帯は縄と爪形状沈線をもつ。8は、鶏冠状の把手を持ち頂部には沈線と通孔をもつ。頂下部には円形の孔を穿つ。口縁部には釣り針状モチーフの沈線が施されている。中央部は無文の隆帯が「の」の字に貼付され下端は口縁部にそって巡る。33図9は扇状形態の把手で中央部に大型の円形の孔をもつ無文の隆帯で渦文を左右に配している。隆帯の間には縄が施文されている。把手下端は2本の隆帯が垂下し頸部の横位の隆帯と連結する。頸部はすべて単節の縄が施文される。10は鶏冠状把手で通孔をもつ。隆帯上には細かな刻みがすべて施されている。8、9、10は中峠式に比定される。11は強いキャリパー状形態で沈線と隆帯で区画下位は渦文を配する。その間は棒状刺突が細かく施されている。12～14は胴部及び底部で縦位の沈線が見られる。13は外反気味の深鉢の底部。14は円筒形の深鉢底部である。



第32図　D－2・D－3区 出土土器拓影実測図

D－4区　（第34図、35図、36図）

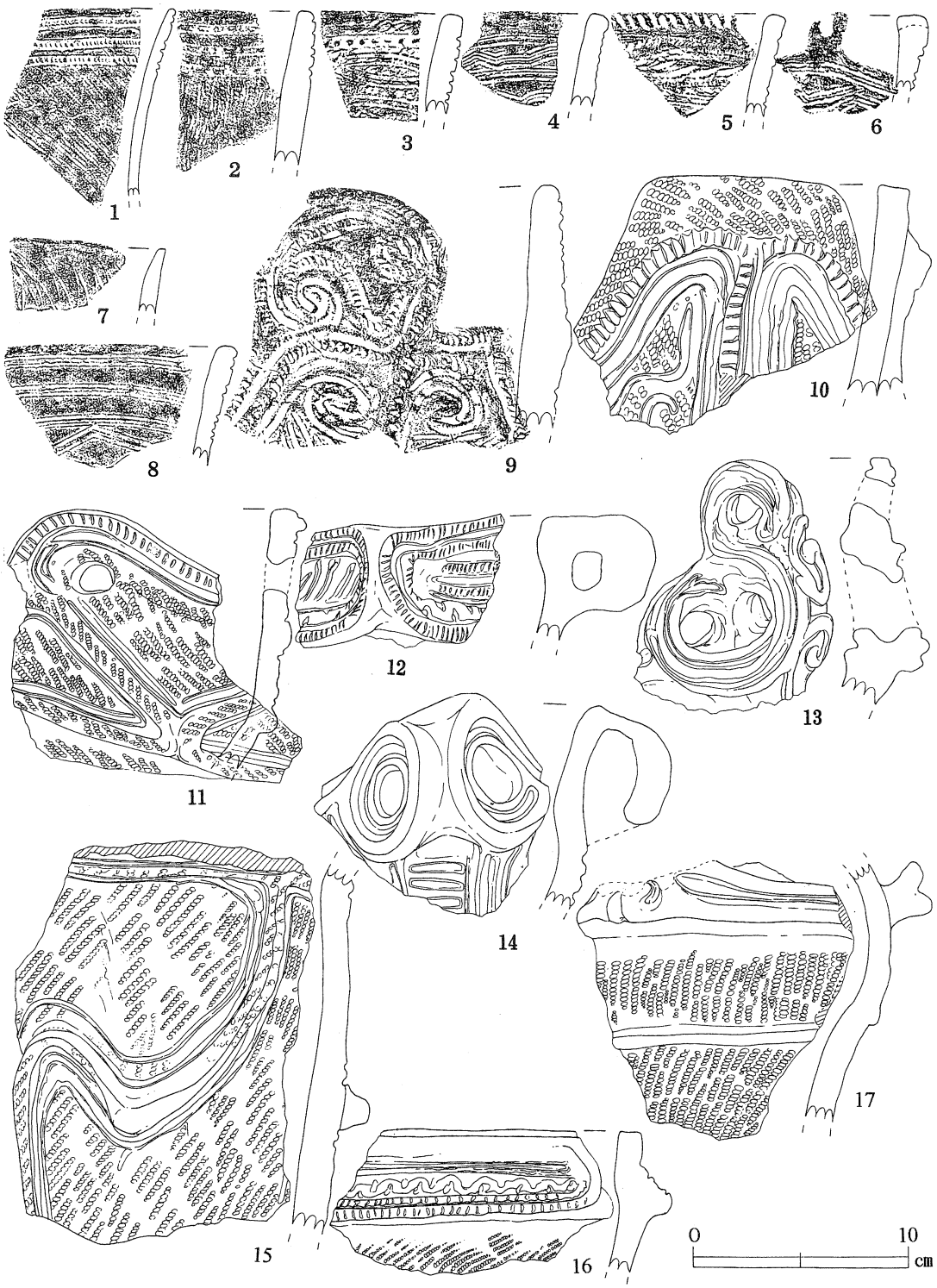
本区からは相当数350片程の土器が見られたほぼ貝塚の末端部近くに該当する。2層の下部から出土している1～8がある。6はイボ状の円形突起をもつ浮島式の土器で口縁部は平行沈線が不規則に施文されている。その他の土器は円形刺突、平行沈線、ハマグリ腹縁による波状沈線等が見られる浮島式土器群である。9は深鉢の把手で隆帯に刻み目を施し内側に沈線を施す。「の」の字状の沈線によるモチーフを施す。阿玉台式末中峠式との間の土器で阿玉台式の色を残す土器である。10は扇状モチーフの把手をもつ深鉢で隆帯部分は縄文と刻み目の二通りに分かれ阿玉台VI式である。



第33図　D－3区 出土土器拓影実測図

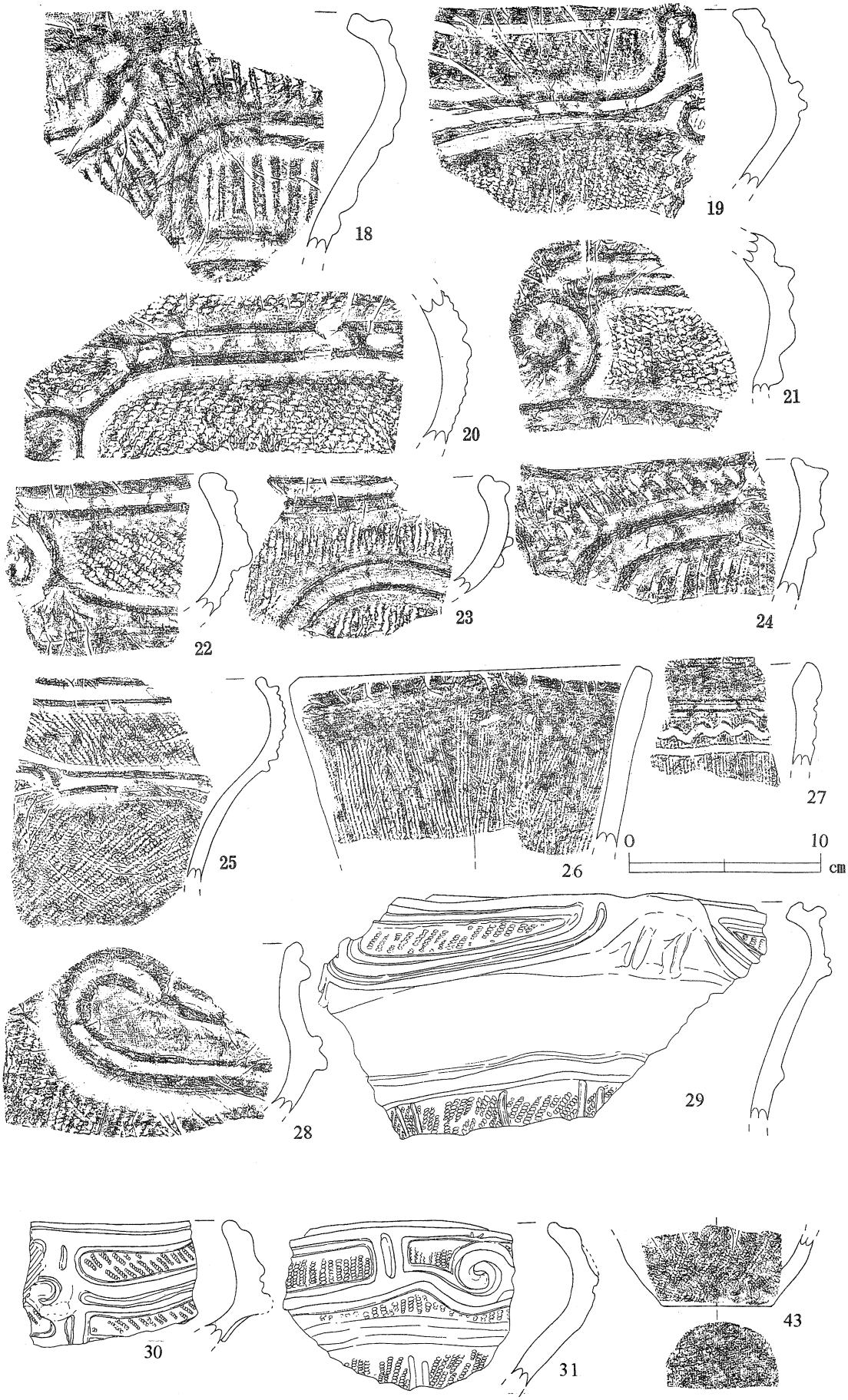
内側には沈線が巡り縄文を充塡している。11は波状口縁部をもつ土器で口唇部には刻み目を施す。隆帯は三角形区画で内側に沈線を巡らし、内部には粗い単節の縄文が充塡されている。12は平縁の深鉢と推察される土器で隆帯で窓枠状区画をもつ。内部は沈線で充塡、通孔をもつ。13は鶏冠状モチーフをもつ把手3孔をもつ。隆帯による渦文をもつ中峠式土器より加曽利E式の古式である。14は山形状突起で通孔をもつ下位に横位の沈線をもつ。本土器も加曽利E古式で中峠式の色をもつ。16は内面に弱い稜をもつ土器で口縁部に狭い無文帯が巡る。隆帯に刻み目、波状文をもつ。前類と同様の時期で中峠式の色が強い。17、18も同様な時期と推察され口縁部は若干キャリ

パー状隆帯区画。19も同様。20～22、25、27の口縁部はキャリパー形態で、いずれも大型の深鉢である。隆帯で窓枠状区画、内部は縄文、沈線を充塡、隆帯は渦文を構成する。加曽利ＥⅠ式である。23、24は微隆起をもつ土器で沈線による施文がみられる。26、27は系統の違う土器群で加曽利Ｅ式に伴う櫛描文をもつ一群で本類の出土は少ない。28は弱いキャリパー状を呈する加曽利ＥⅠ式の古い部分に該当する土器である。35図29～31は口縁部キャリパー状形態で窓枠状区画で縄文を充塡している。加曽利ＥⅡ式該当の遺物である。グリッドの下層は浮島式１層下位は中峠式から加曽利Ｅ式の古式、上層は加曽利ＥⅡ式から堀ノ内式、土師器が混入する。その他35～40は

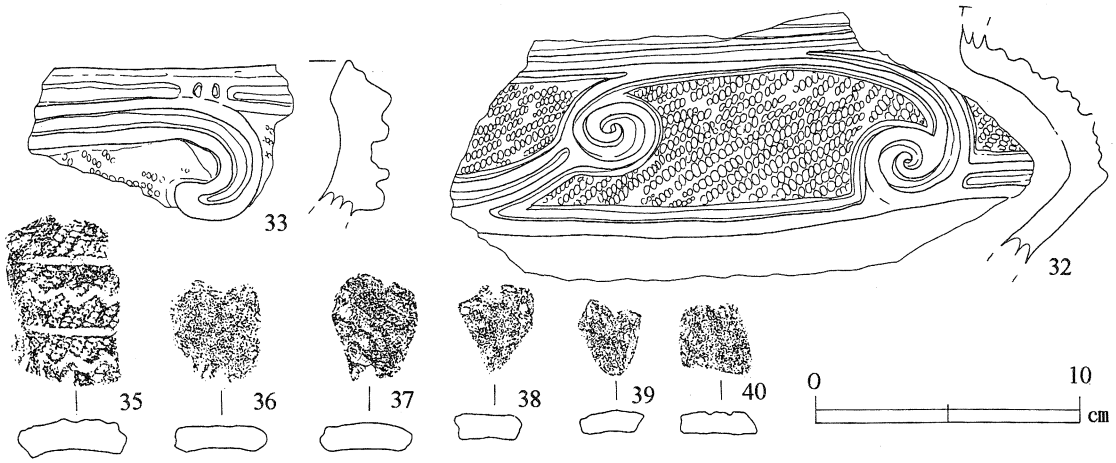


第34図　Ｄ－４区　出土土器拓影実測図

土器片錘でいずれもかなり軽い重量である。



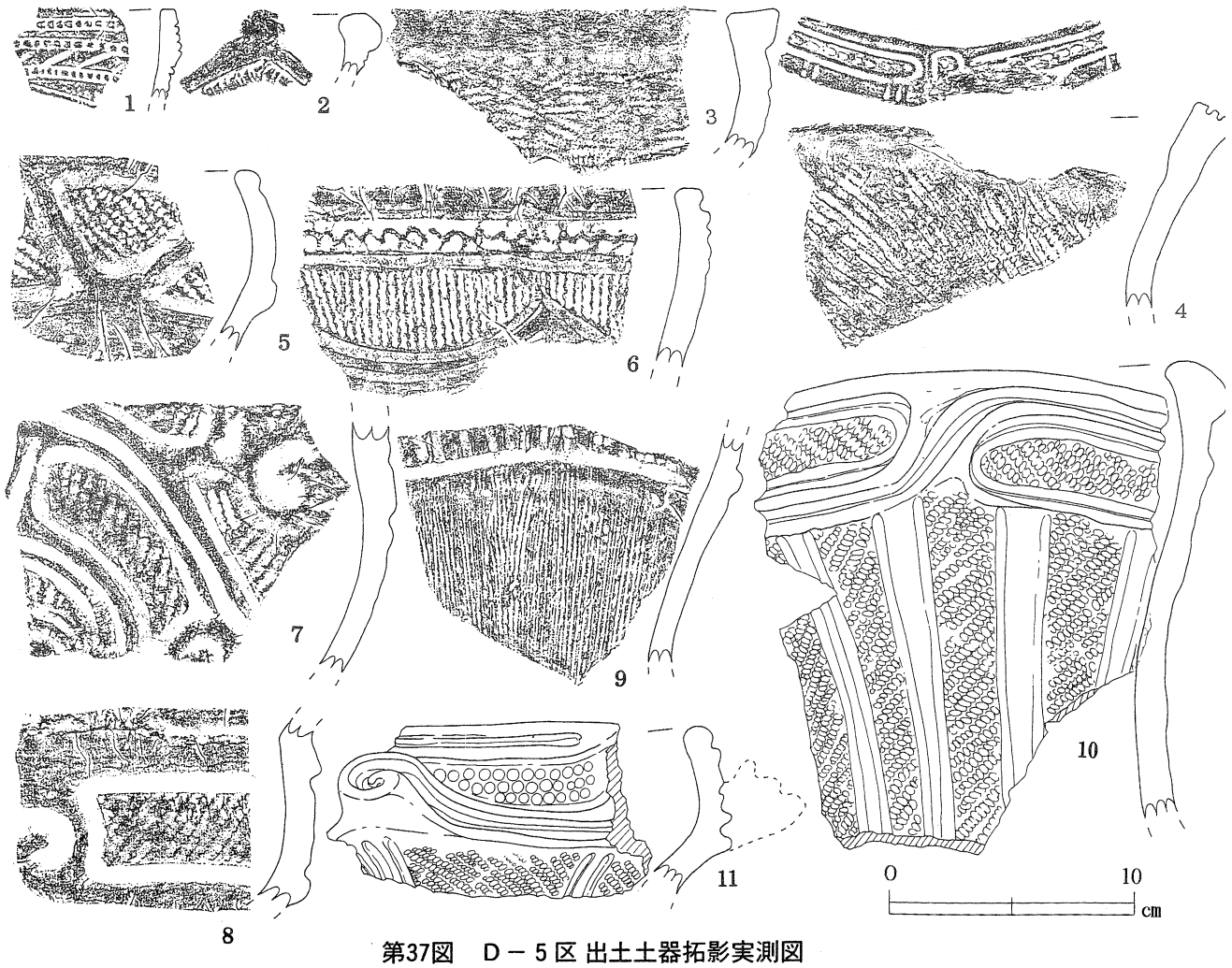
第35図　　D－4区　出土土器拓影実測図



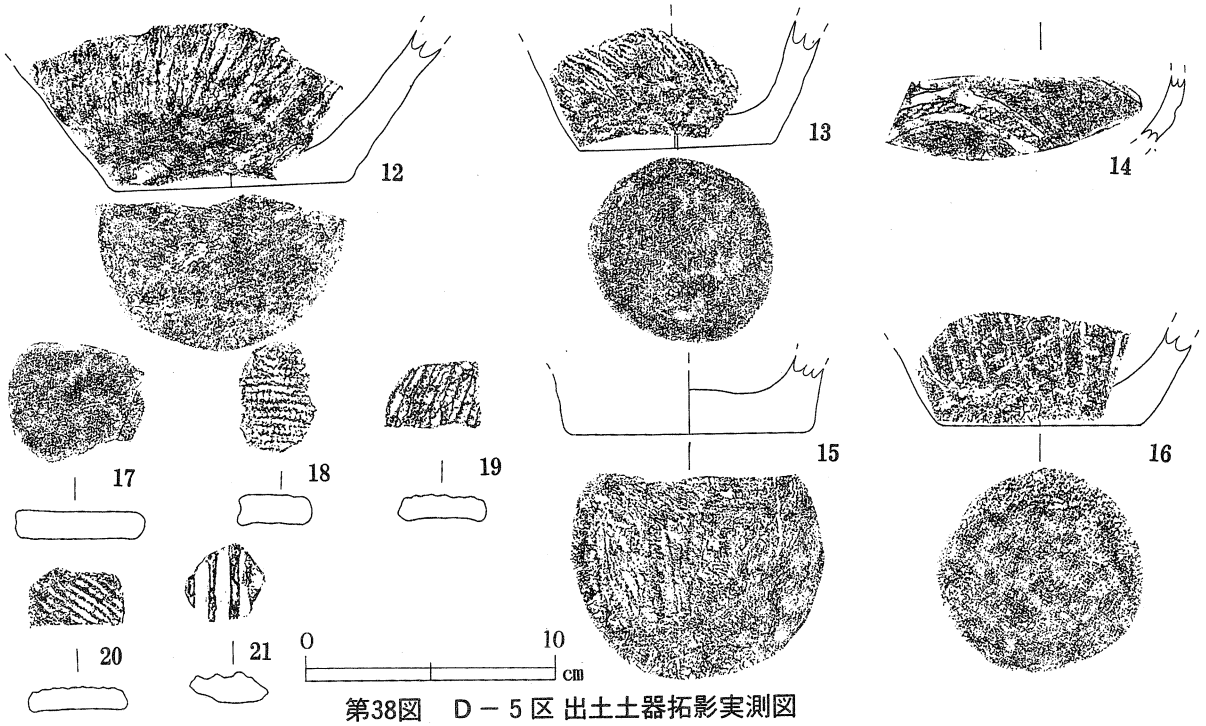
第36図　D－4区 出土土器拓影実測図

D－5区　（第37図、38図）

本区は貝層、遺物の終わりの区域で遺物、貝類も少ない。遺物は諸磯式が数点見られたにすぎない。1、2は浮島式3、4は中峠式の新しい部分に入る口縁部で弱いキャリパー状を呈する3、4は口唇部上部の沈線文区画内に米粒状の刺突文を施す。5～14は加曽利E式の土器群で出土関係は前グリッド同様である。口縁部はキャリパー状形態で隆帯区画、縄文を充填している。10はⅡ式、11はⅠ式で12、13は底部で大型の深鉢の底部と推察される。14は縄文後期加曽利B式の精製土器胴部15は円筒形状の底部、16はやや開く、17からは土器片錘いずれも小型でグラム単位。



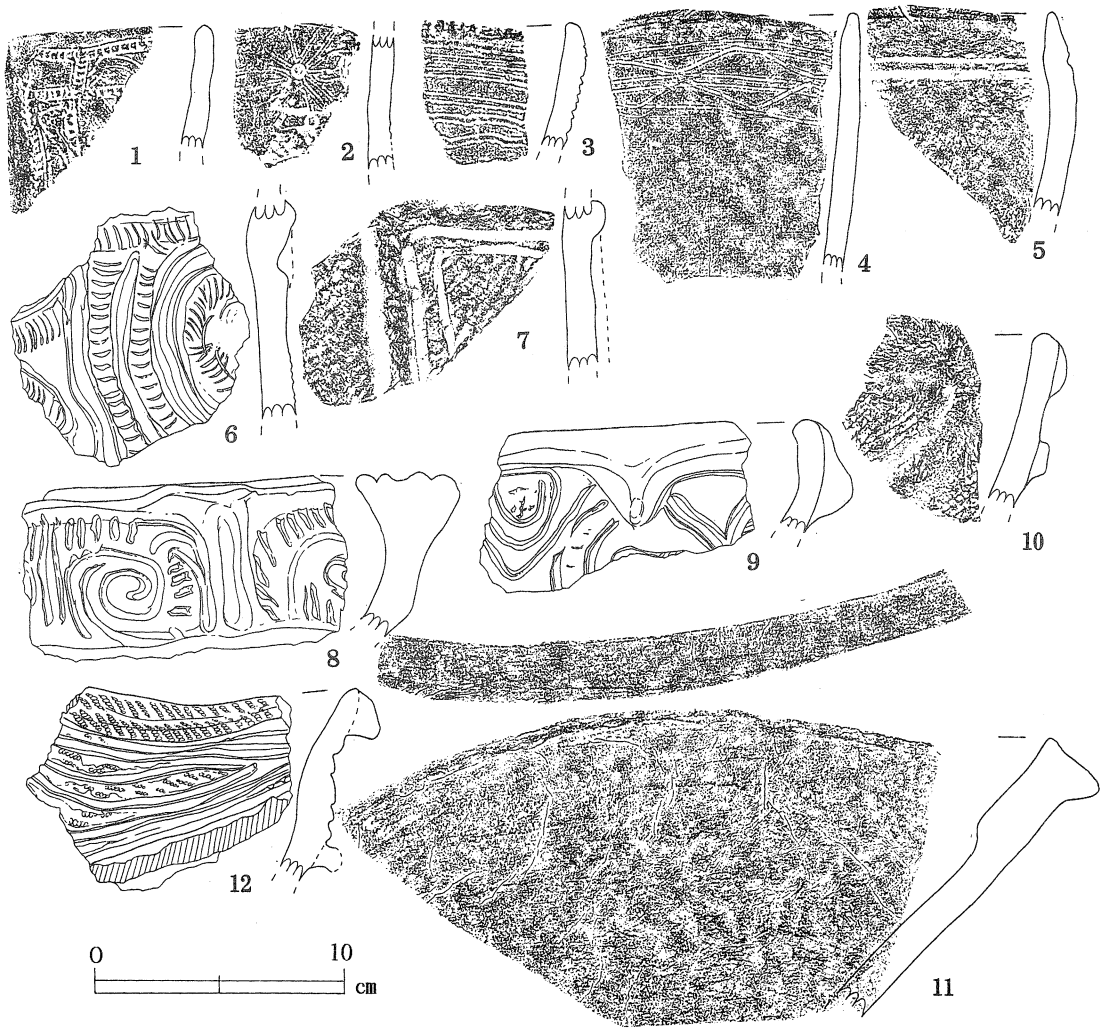
第37図　D－5区 出土土器拓影実測図



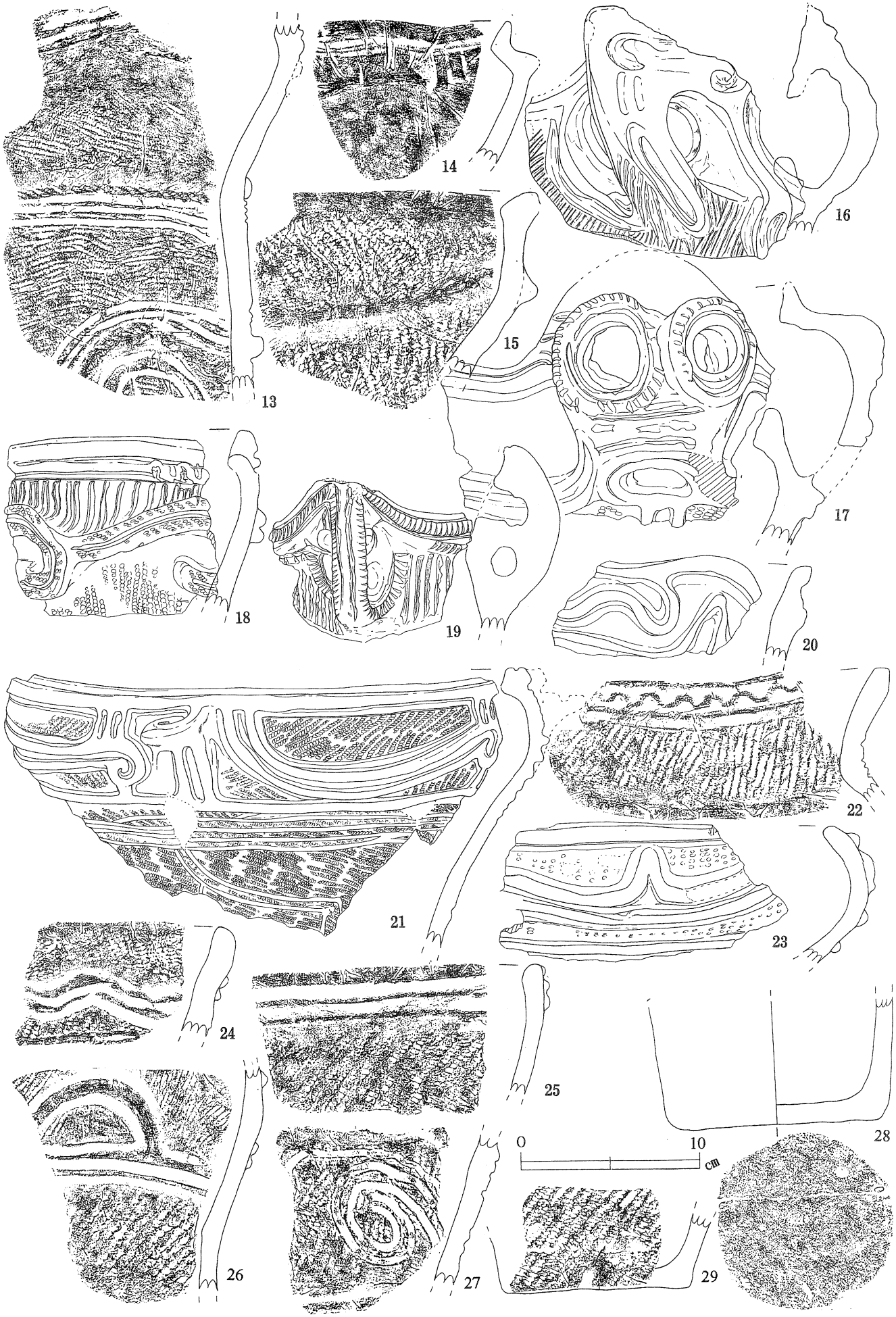
第38図　D－5区 出土土器拓影実測図

E－3区　（第39図、40図）

本区は貝塚の始まる部分上部にあたる部分で貝層は薄く土器がかなり出土した。約400片程で下層からは前グリッド同様で、1～4は浮島式。5は沈線が巡り中期か。



第39図　E－3区 出土土器拓影実測図

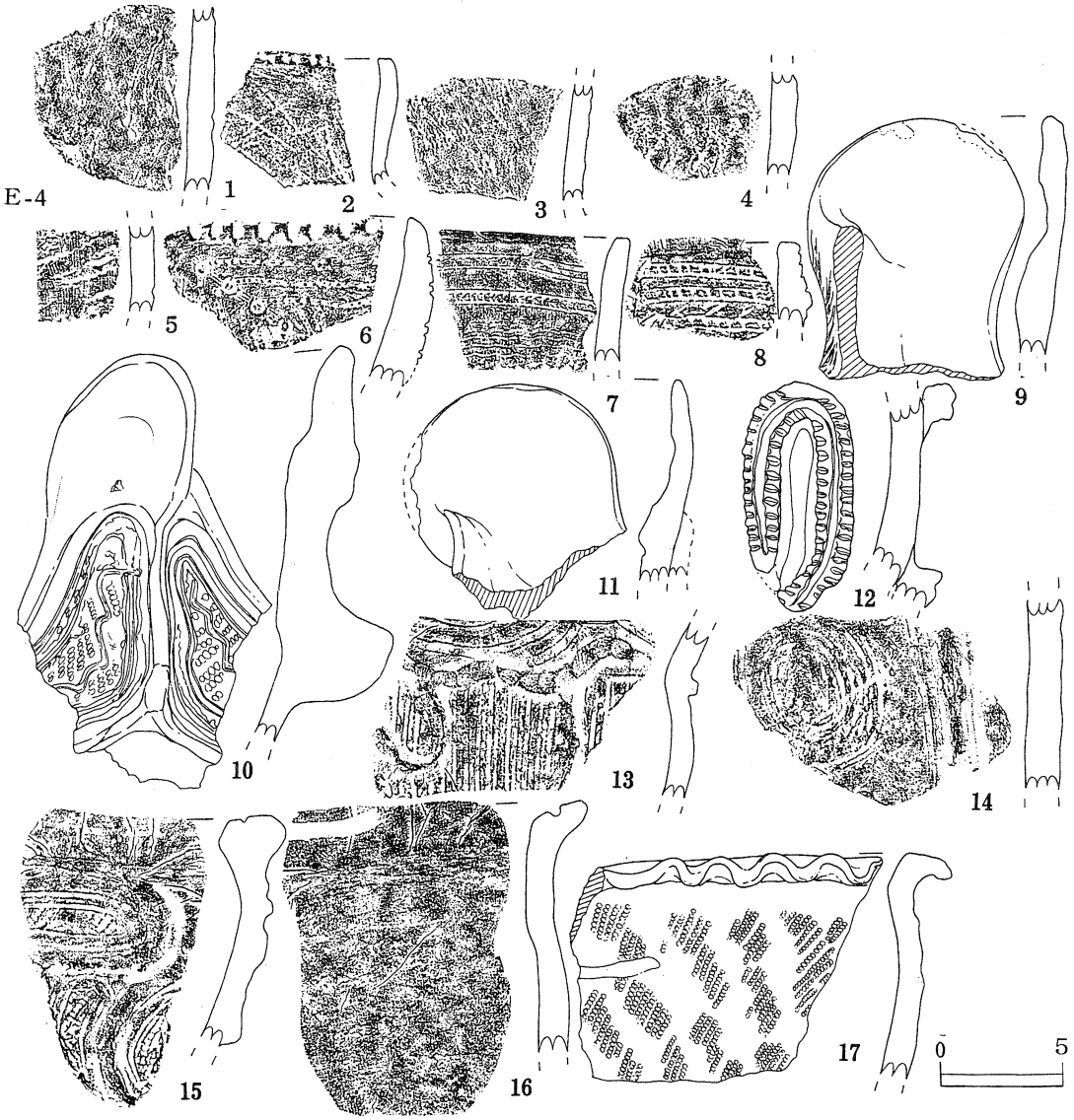


第40図　E－3区　出土土器拓影実測図

平行沈線等の文様が施文される。6は勝坂式7、11は阿玉台式の終末土器で沈線主体の文様構成で11は浅鉢であり器面は磨消さている。8～10は中峠式の特徴をもつ土器で沈線を主体に刻み目、渦文が見られ10は縄文の上に隆帯を貼付し外反気味の器形。15も口縁部弱いキャリパー状で隆帯を横位に貼付。14も内側に稜をもつ土器で隆帯の上に疎らな刻み目が見られる。12、13は隆帯部分に縄文が施文され、沈線が2条乃至3条の平行、円形の構成をもつ。16は鶏冠状で外側から内部に通孔があり橋状把手に近い。下位は沈線を施す。17は眼鏡状の双孔をモチ隆帯部分は刻み目を粗く施す。18は隆帯は縄文を施文、内側は沈線、19は小突起部で隆帯に刻み目、円形の通孔をもつ。20は隆帯のみ。これらは加曽利E式の古手。21～25は口縁部キャリパー状形態と直線的に開くものが見られる。いずれも隆帯区画で内部は縄文を充塡また波状、口縁部平行等が見られる。加曽利EⅠ式。26～29は隆帯、沈線による円形及び渦文が見られる。

E－4区　（第41、42図、43図、44図）

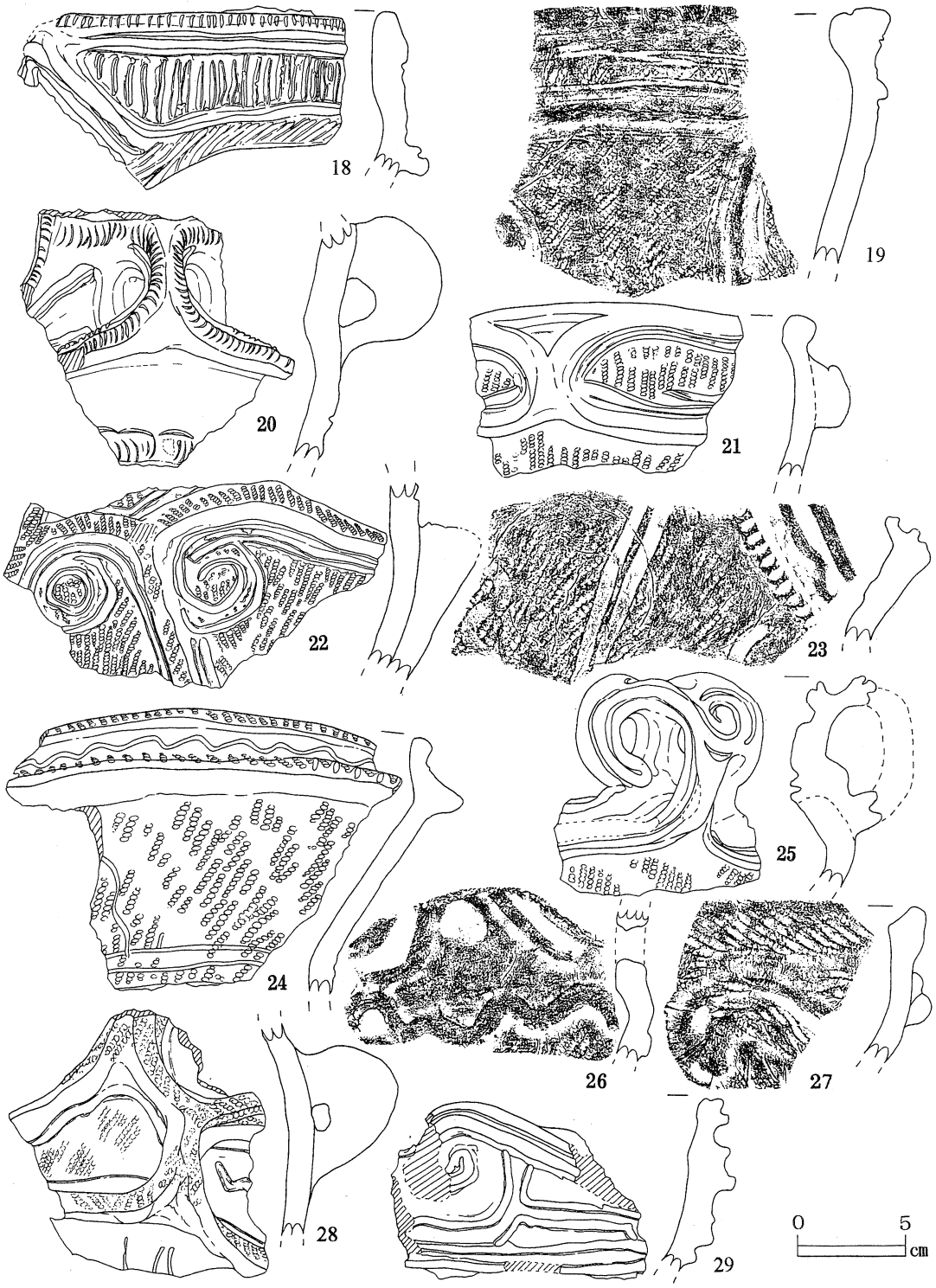
本Gは貝層のかけた部分が見られこの部分ではかなり多量の土器が出土した。本Gでも下層からは図示した1～8が見られた。いずれも浮島式にあたるもので貝殻波状文、平行沈線文が施文



第41図　E－4区　出土土器拓影実測図

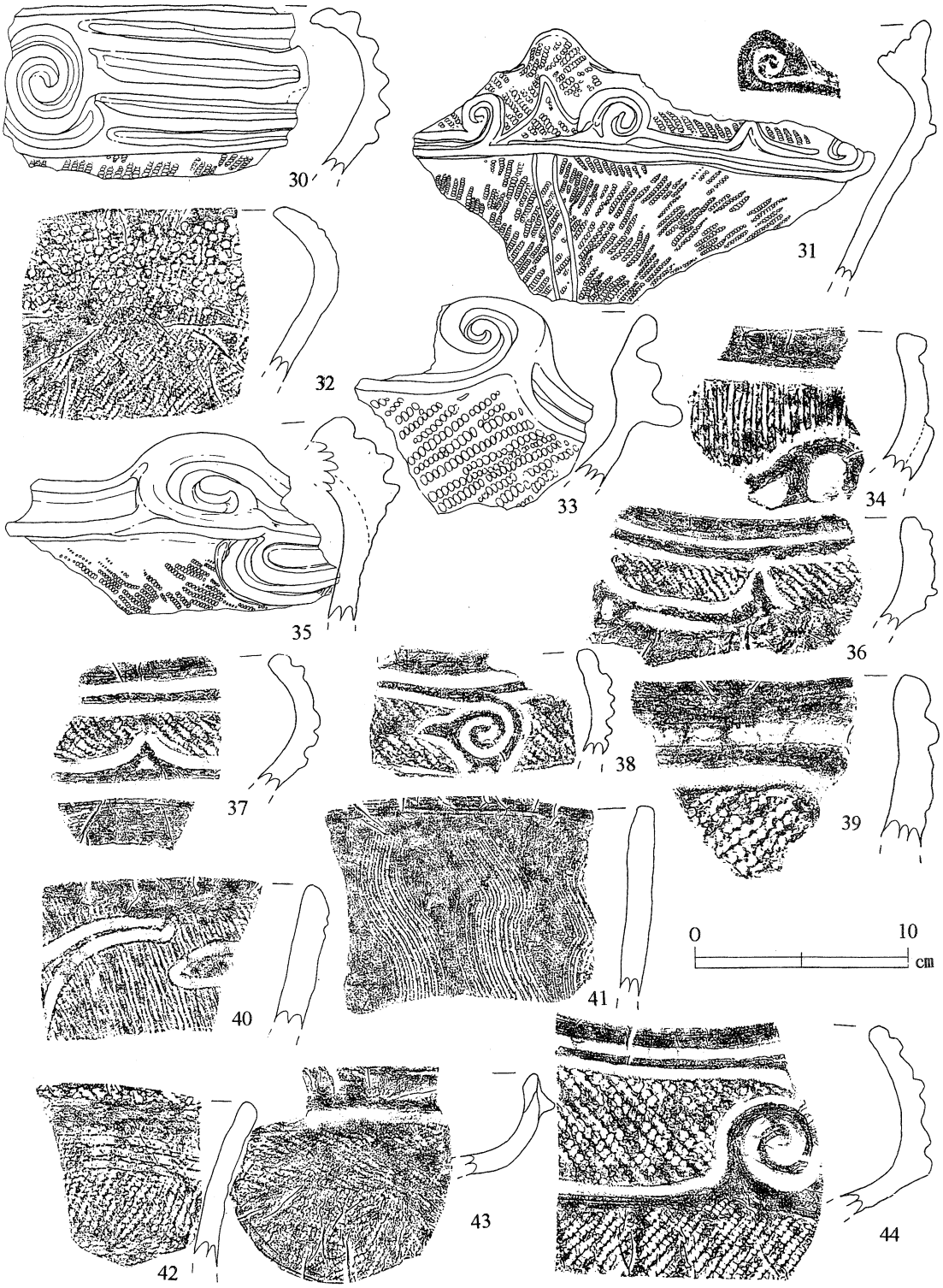
されている。

9～11は円形状の突起をもつ土器で加曽利E式の古手である。孔はなく前述迄の通孔をもつ一群とは系統的に違いが見られる。いずれも無文で10は隆帯内に沈線、縄文が施文されている。12は、マンボウガイ状で長円状の隆帯上に短く刻み目を入れている。13は波状隆帯と沈線の組合せで地文に細かい沈線を施す。隆帯上に押圧を加えている。14は沈線による円形文が見られ他は磨消している。15は長円状の平行沈線、と隆帯を垂下させる。いずれも口縁部内側に弱い稜をもち口唇部に沈線をもつ。15は弱いキャリパー状形態。17は、内側に弱い稜をもち口唇部に波状沈線



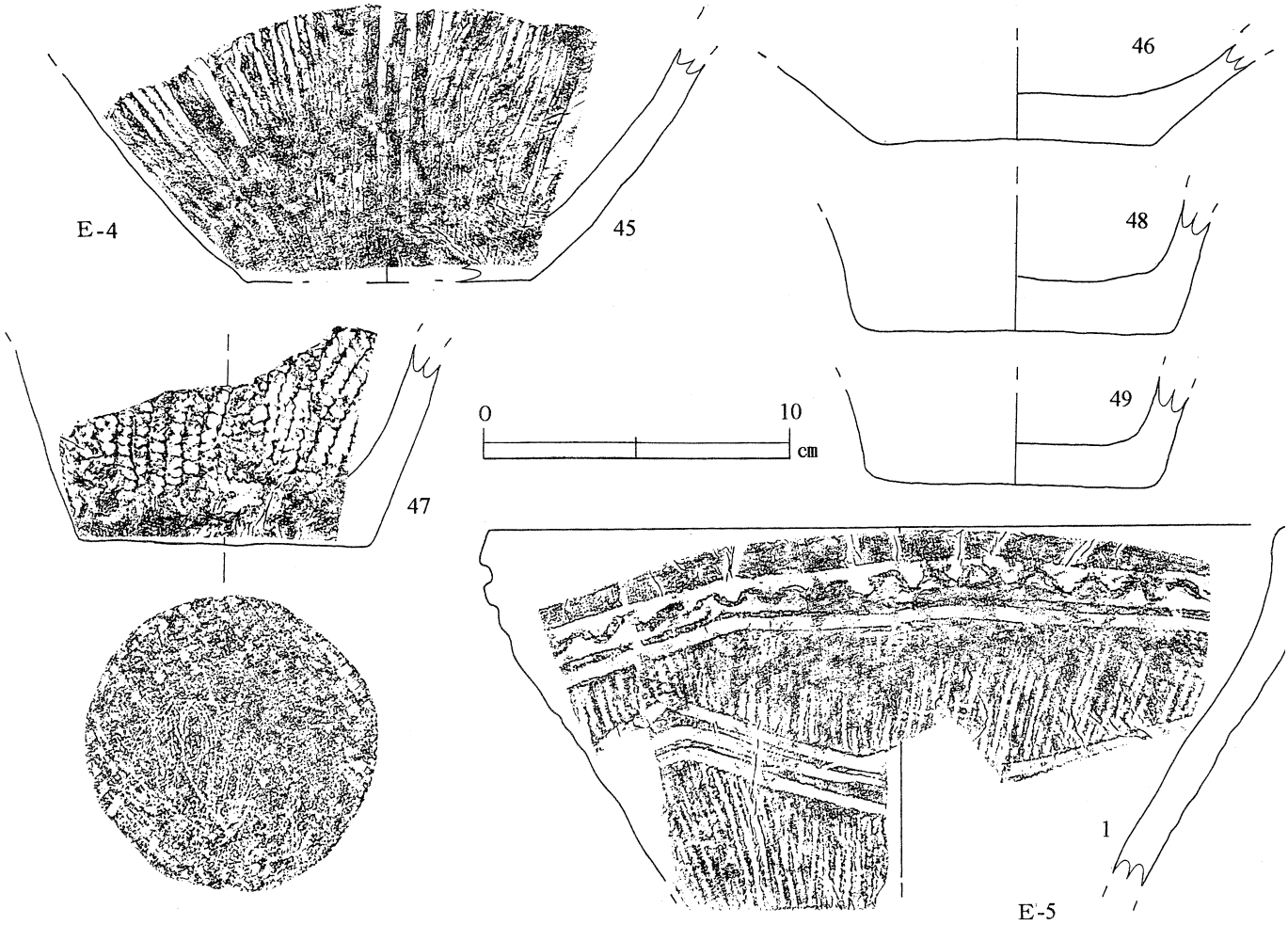
第42図　E－4区　出土土器拓影実測図

を貼付している。地文単節の縄文を疎らに施す。（第40図）18～25、28、29は加曽利ＥⅠ式の古手で19は前述の形態である。26、27も内面に弱い稜をもち口縁部はキャリパー形態で文様構成から中峠式に近い土器である。隆帯貼付で隆帯上に施文する28は通孔をもつ、22、24は波状沈線、渦文をもつ。地文には縄文を施文している。19、20は隆帯に爪形の刻み目を施す。21は窓枠状区画の内部に縄文を充塡する。29も同様、25は３孔をもつ突起部分である。本遺物の大部分は２層から出土している。（第41図）30～41は隆帯貼付による渦文及び隆帯区画の窓枠状、剣先状、三角形状モチーフの30～38、44がある。本類は口縁部幅の狭い磨消部、キャリパー形態をもつ。39



第43図　Ｅ－４区 出土土器拓影実測図

はⅡの新しい部分、43は小型の鉢状形態か？。40～42は口縁部に幅の狭い無文部が巡り40は沈線、41は櫛描き、42は平行沈線、地文は縄、沈線との差が認められる。本類は1層中から出土している。42図45～49はすべて底部で45は沈線、47は縄文が施文されている。円筒形、浅鉢状形態。46も同様で、48、49は円筒形深鉢で磨消している。



第44図　E－4・E－5区 出土土器拓影実測図

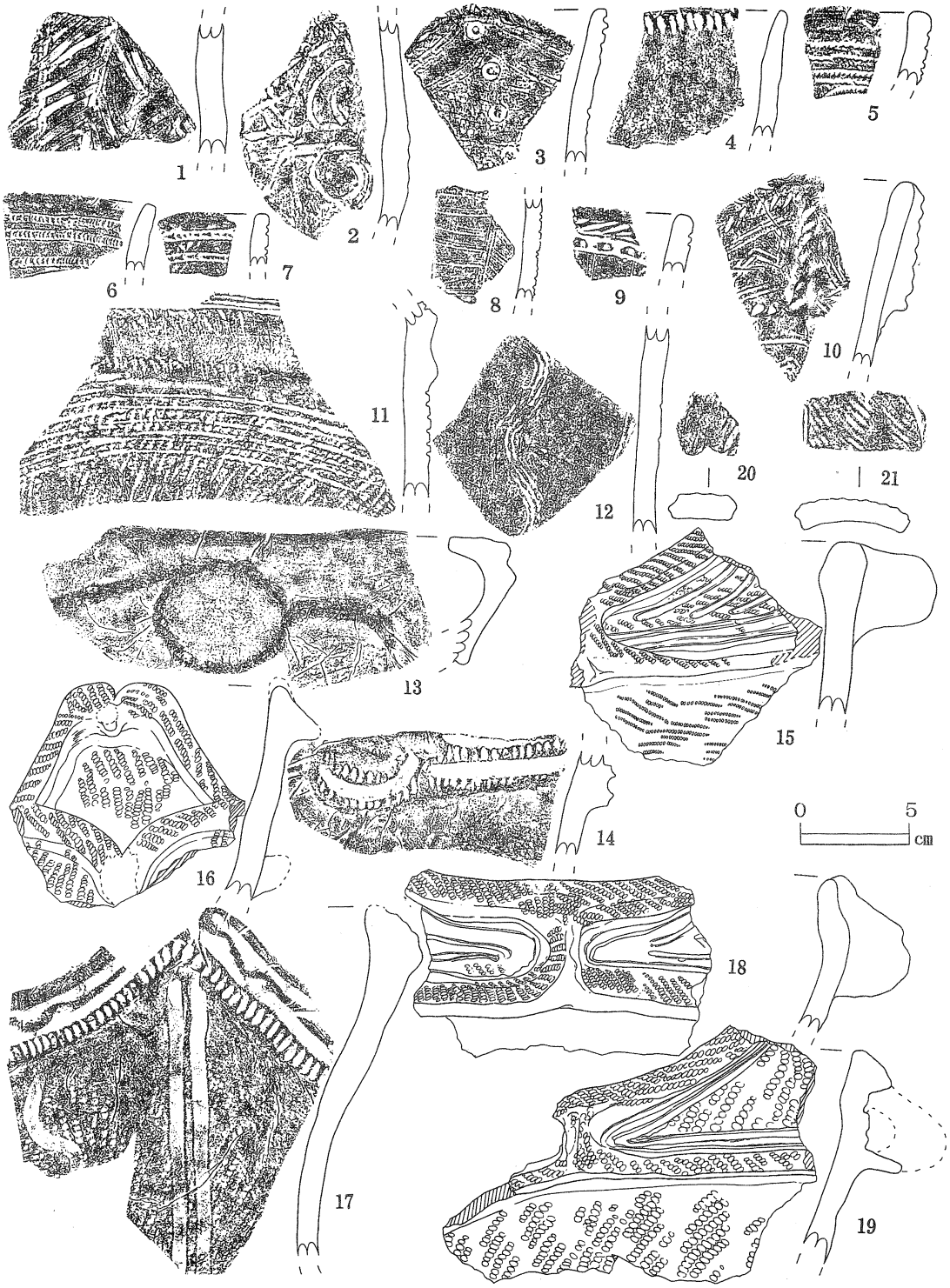
E－5区　(第44図)

本Gからは貝層も少なく遺物も皆無に近い。図示した1は口縁部に幅の狭い磨消部が見られ波状文をもち、胴部には山形状の3本単位の沈線が見られる。地文は撚糸文である。深鉢の小型の土器である。加曽利E式の新しい時期の連孤文土器。

F－4区　(第45図、46図)

本Gは貝層の末端部に位置する。貝層はかなり深い部分に検出された。43図1～3は黒浜式の波状部分で竹管刺突の円形文がみられる。繊維を多量に含む。1、2、8は諸磯a式の土器で繊維を含む。1は肋骨文、2は沈線による不規則な文様を施文する。4～7、9は浮島式の土器で竹管による平行沈線、押し引き文が施文される。10は浮島式、11～14は阿玉台式の土器で11は口縁部に沈線、胴部は地文の上に横位に5本の沈線が施文、中期か。13は隆帯により眼鏡状の文様構成で地文はすべて磨消し口唇部は内側に庇状に突出する。

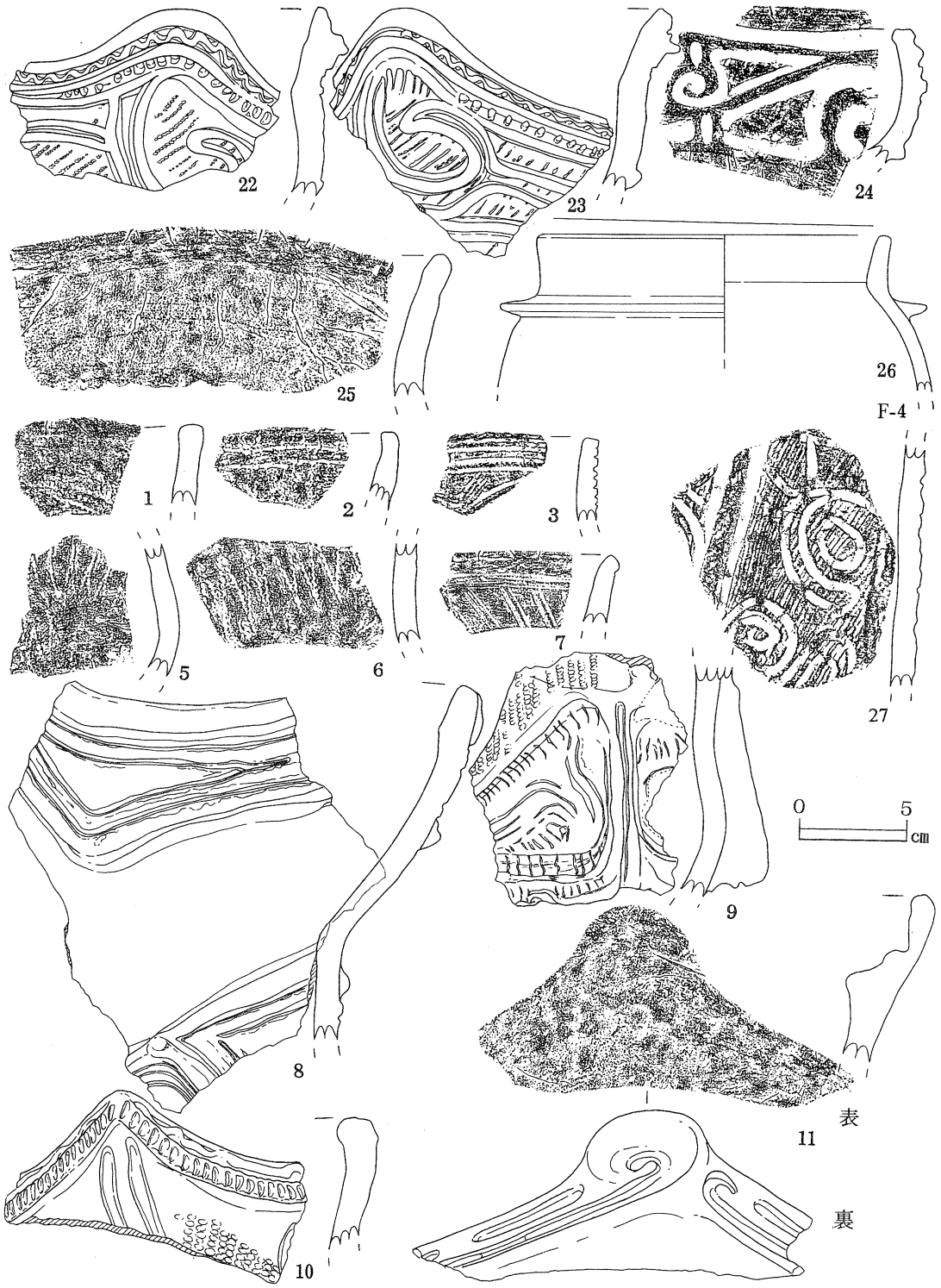
15も部分乍ら阿玉台Ⅳ式の土器である。16～19は隆帯区画の突起部であり、19区画内部は沈線、縄文が充塡されている。16は扇状把手部、17は山形状、19は通孔をそれぞれもつ。加曽利ＥⅠ式の古い様相を残す。20、21は土器片錘。重さは５～９gである。44図22～26は加曽利ＥⅠ式で波状口縁部をもつ。22、23突出部下には円形状モチーフをもつ。口縁部は外反、区画内部は縄文、沈線状刻み目が充塡されている。24隆帯区画で剣先状が見られ口唇部に磨消部が狭く存在する。キャリパー状形態。25は磨消された土器で口縁部は外反し口唇部は丸みをもつ。26は鍔をもつ無文の土器で間隔を於いて穿孔が鍔の上に位置し、口縁部は短く直立する。



第45図　　Ｆ－４区 出土土器拓影実測図

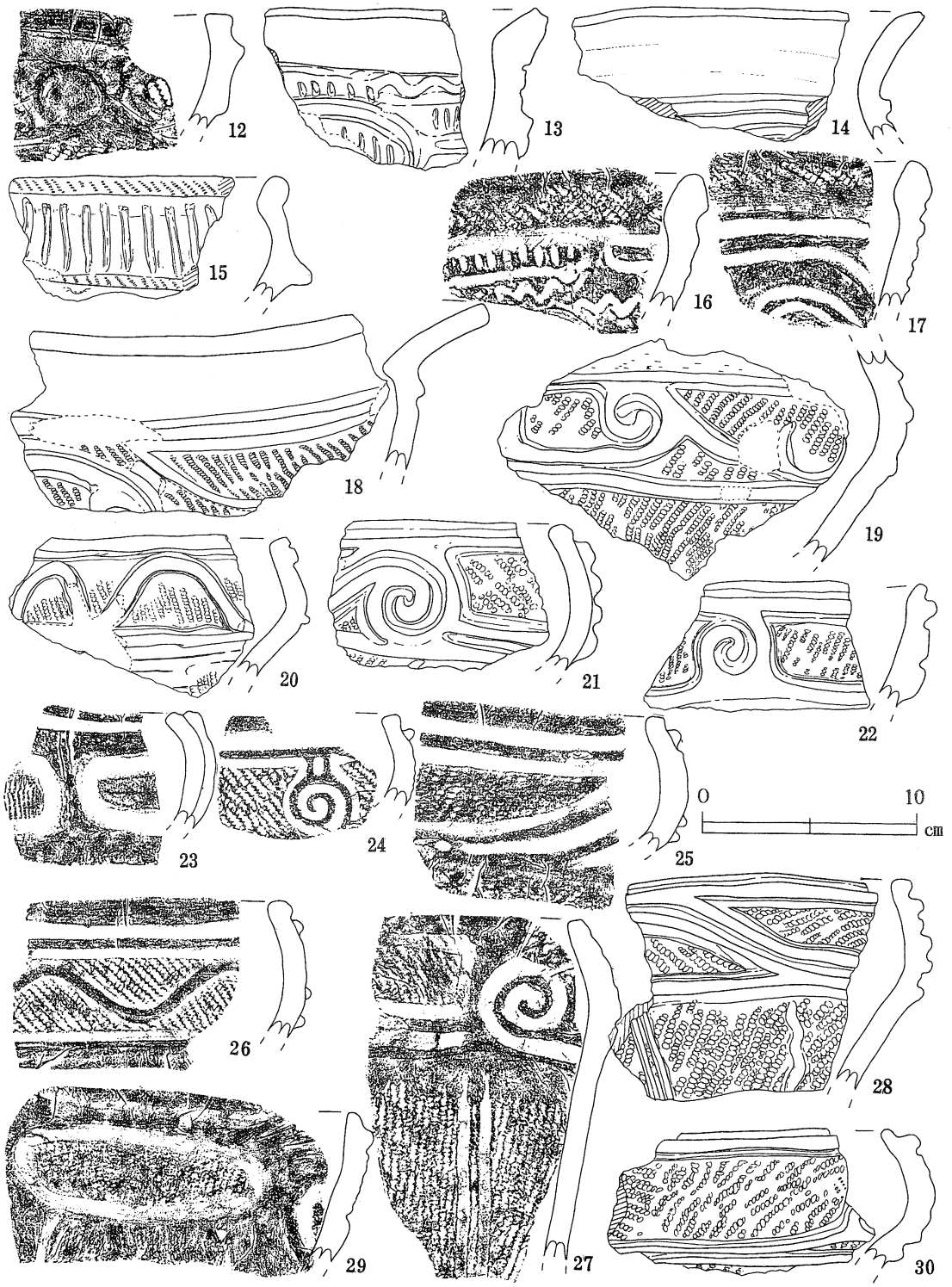
F－5区（第46図、47図、48図）

本区は貝塚終末部分で層位的に乱れが見られた。1～7は2層出土の浮島式土器で平行沈線、アナダラ層の貝殻波状文等が見られる。8～11は加曽利ＥⅠ式の古い部分の土器群で口縁部は外反気味。9は阿玉台式に近いモチーフ。11は内側突起部に渦文が施文されている。12～30は加曽



第46図　F－4・F－5区 出土土器拓影実測図

利E式の土器群で口縁部は平縁外反する14、18と開き気味の13、16、17がある。口縁部に磨消部をもつ。隆帯区画で窓枠状、渦文状、波状がみられ内部は縄文が充塡されている。23～30は加曽利Ⅰ、Ⅱ式の土器群で口縁部に幅の狭い磨消部をもちキャリパーは弱い。窓枠状部分では長円形状区画で沈線が主体的文様構成の手段として利用されている。28、30は隆帯区画である。31～39は口縁部のキャリパーは弱く沈線で長円形区画が口縁部文様帯を構成している。31、32は加曽利EⅢ、33はⅡ、Ⅲ式の胴部下半、33～38は口縁部に磨消部をもつ土器群でⅢ式前後に伴う粗製の小型の鉢形土器。地文は縄文のみ。40は須恵器で安定した底部で口縁部は直線的に外反して立ち上がり口唇

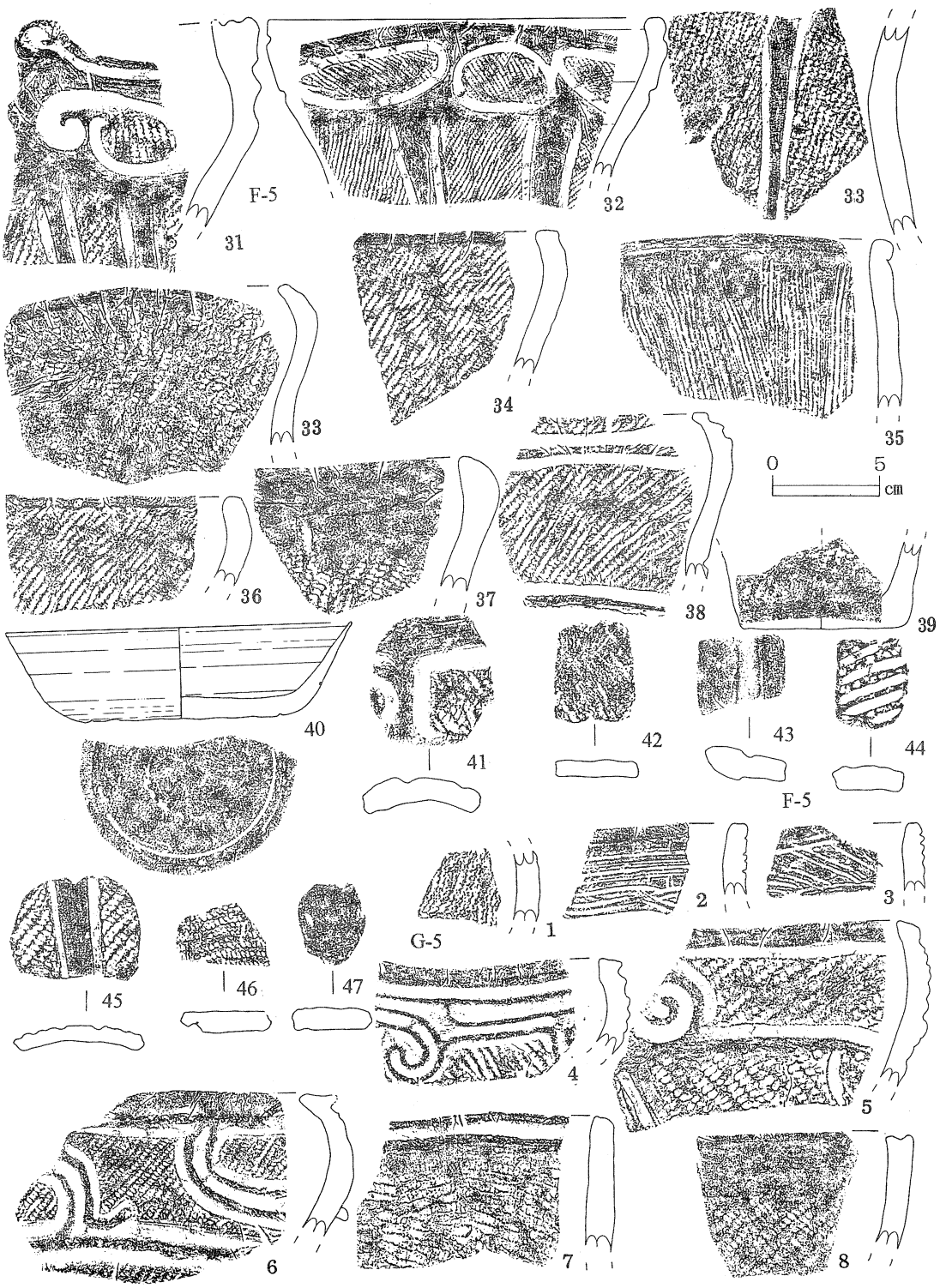


第47図　　F－5区　出土土器拓影実測図

部は尖る。奈良時代前半真間期Ⅰ式前後の土器である。41～47は土器片錘で比較的小型。

G－5区（第48図）

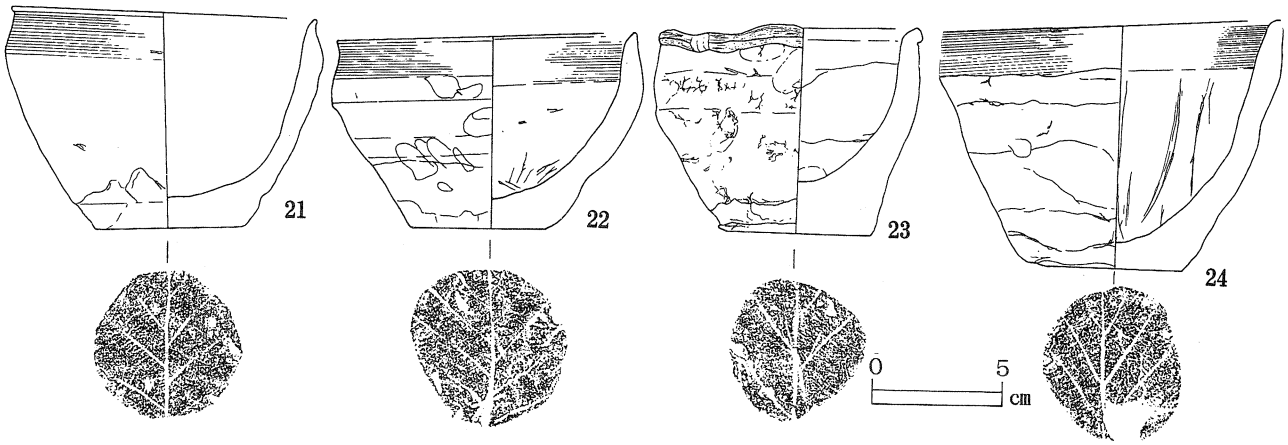
本区は貝層の存在しない部分で出土は土器のみである。1～3は浮島式で1はアナダラ属の貝殻を利用した土器で2、3は平行沈線を横位に施文している。4～8は口縁部に無文帯をもつ一群で口縁部キャリパーの4～6で隆帯貼付の渦文を配している。7、8は粗製土器でⅠ式に伴うか。



第48図　F－5・G－5区 出土土器拓影実測図

以上が各グリッド出土の土器群の様相である。これらは東北系の色をもつ土器が少量認められまた中峠式の土器も少量見られるが主体を占める土器は加曽利ＥⅠ式に先行する一群の土器である。

第49図　道城平表採土器拓影実測図



第50図　道城平区外出土拓影実測図

グリッド外出遺物（第49図、50図）

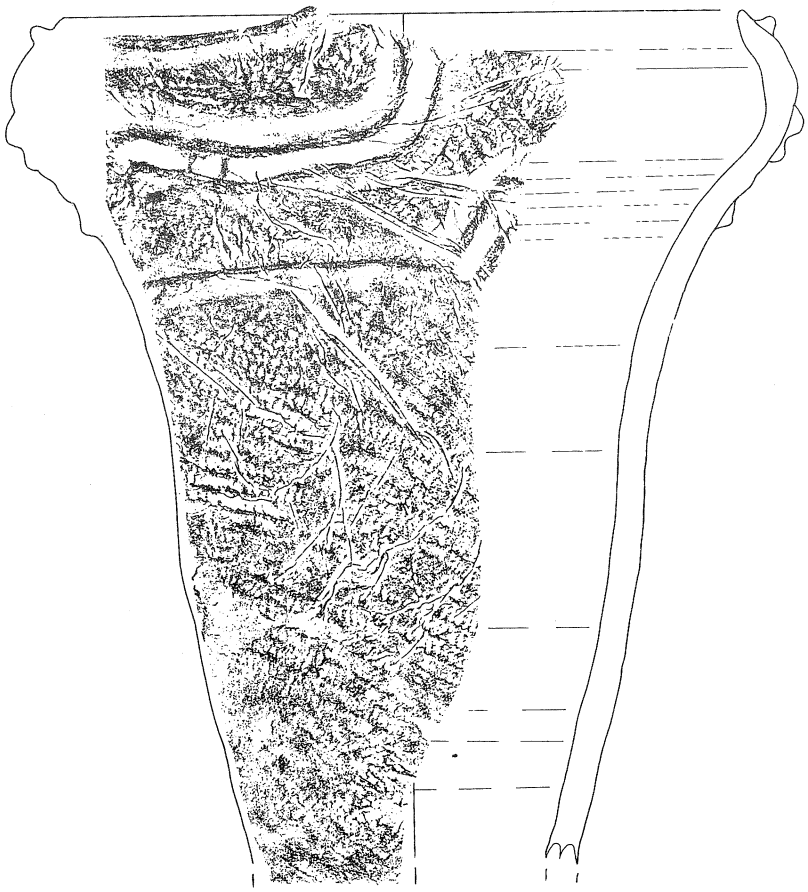
本貝塚確認時に出土した遺物で各グリットにまたがり出土している。1、2は隆帯に刻みを口縁部と胴部に巡らし間には、平行沈線が横走する。2は竹管による平行沈線文が幾何学状に施されている。口縁部は、ともに角張る。浮島式初頭の土器である。

3、4、5、7は阿玉台Ⅳ式に比定される一群の土器群で器形は口縁部に山形の大型の突起が見られ隆帯には単節の細い縄を施す。内部には粗雑な沈線が三重に見られる4と弱いU字状の刻みが連続する3や縦位に施す5が見られる。口縁部は外反し直線的で頸部は弱く内湾する器形でいずれも大型の深鉢型土器である。6は、浅鉢状器形で外面は磨消、口唇部に太い沈線が二本巡り弱い波状部にの字状のモチーフを施す。9は、口縁部が外反する器形で突起状の隆帯を巡し上下に沈線、隆帯に刻みをもつ。8は、三角形状の口唇部は磨消、頸部、胴部は縄文を粗雑に羽状施文する。器形は、口縁が弱く内湾的な粗製土器である。中峠式の一群。

11、12は平縁状の口縁部をもつ。窓状区画をもつ土器で沈線、単節の縄が充塡されている。加曽利E式1式初頭か。13は、沈線を波状に施し上下は磨消している。半円状に内傾する。14は、口縁部が弱く内傾する器形で沈線で(の)の字状のモチーフが見られる。16は加EⅠ式か、口縁部は波状口唇部は三角形状、波頂部から(の)の字状のモチーフの磨消部が見られる。17も同様の胴部か。

15、18、19、20は土器片錘でやや大型である。

50図21～24は貝塚端部を確認中やや離れた位置から検出された土器でほぼ定形で一列に整列し立った状態で出土した。器形はいずれも鉢型

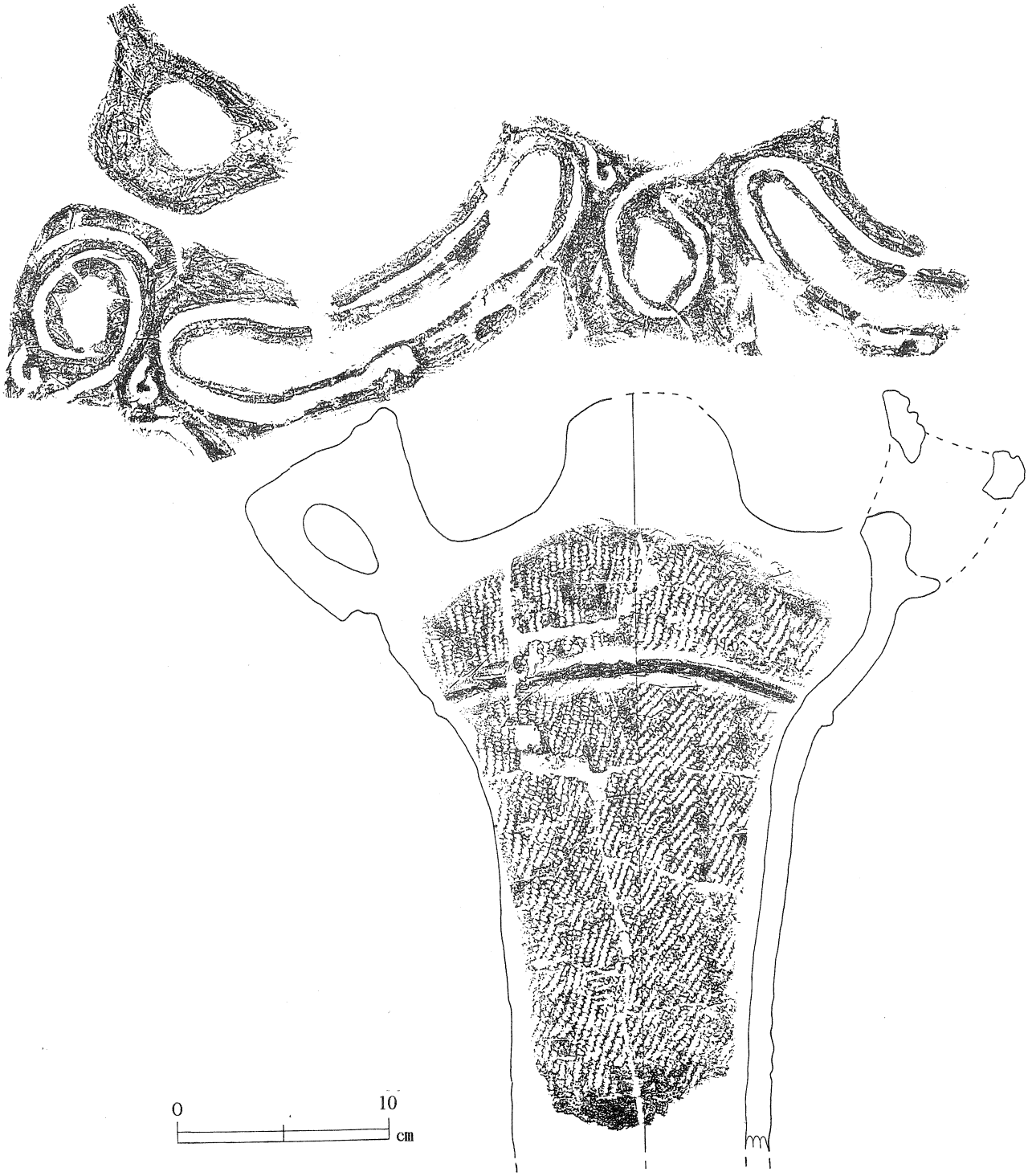


第51図　B－3区 出土土器拓影実測図

で完形、手捏状の粗製土器で、底部にはいずれも木の葉痕をもつ土師器。

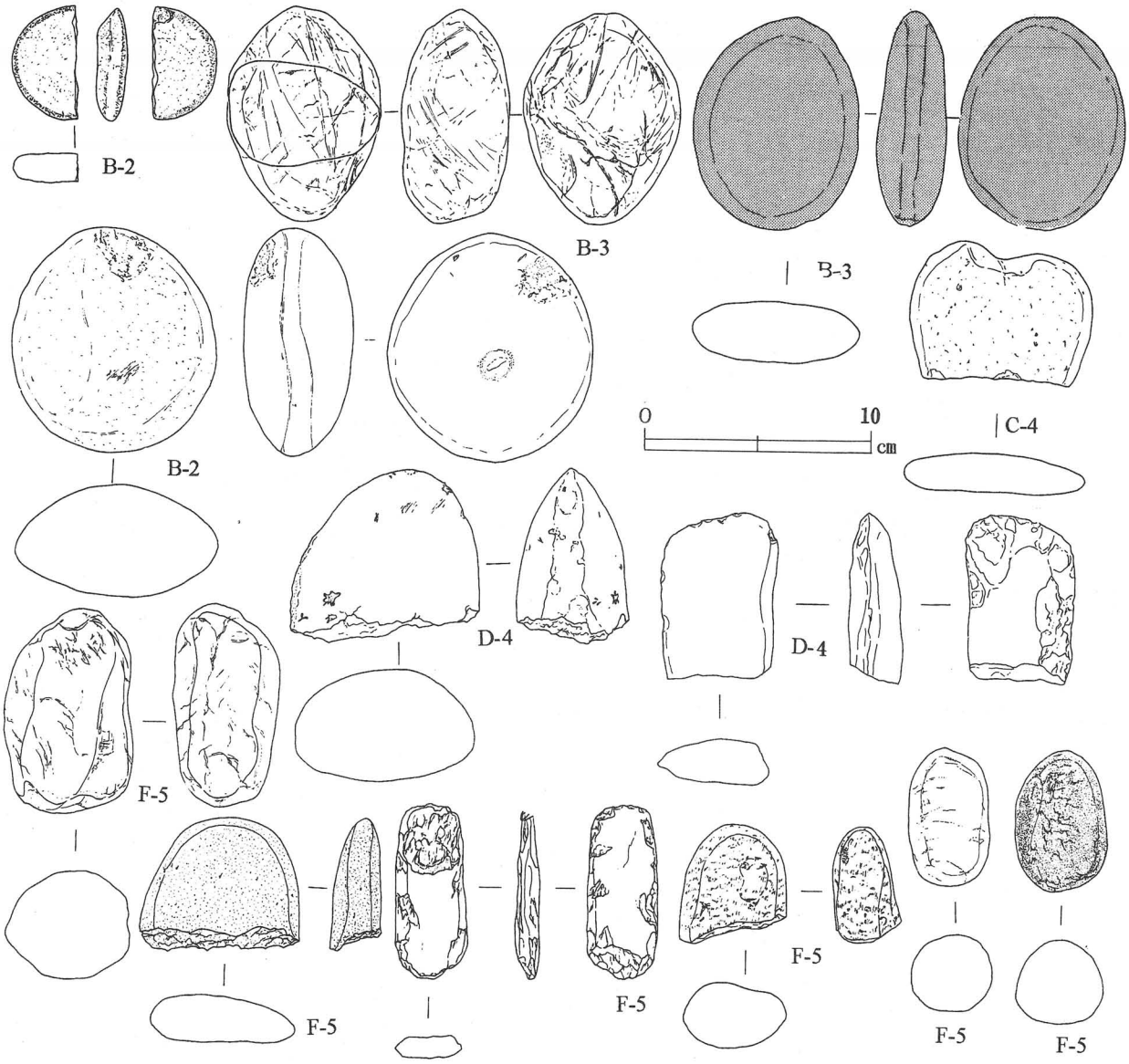
51図、52図はグリッドから出土した土器で大型、器形は深鉢型土器で口縁部はキャリパー、隆帯区画が頸部に見られ縄文を充塡する。胴部は弱く張る。52図はＣ－３出土の大型の深鉢型土器で胴部は円筒状、口縁部は４対の波状部に大型の釣手があり４孔が見られ円形状を呈し、頂部の間には沈線が二重に連続し頂部の間をつなぐ、これによってより立体的な装飾をなす。胴部は細かな単節の縄が施されている。胴部と頸部の間は円形状の隆帯によって区画されている。加曽利ＥＩ式。

石器は、53図に見られるとおり非常に少ない。石材の供給地が遠方であり、「石材」は貴重品である



第52図　Ｃ－３区 出土土器拓影実測図

と理解される。しかしいずれも打製石器が主体を占め、石錘は１点のみという少なさであった。加工されたものも粗雑で片刃状、磨り石は３点のみで少ない。



第53図　各区出土土器拓影実測図

Ⅴ　貝類遺体

はじめに

本遺跡は、古墳時代後半の遺跡として捉えられていた。したがって貝塚は確認調査時点でも、「貝塚」の存在は不明であった。貝塚の部分はやや凹地気味で多量の牛糞が廃棄されていた。よって確認調査時点では、この部分は避け確認調査を実施した。

本調査に入り、遺構の存在が推定される部分の表土を除去し貝塚の存在が認められた。したがって予算的に不足を招き整理も大幅に遅れた。整理は、すべてのグリッドを行なえずＢ－２、Ｃ－３、Ｄ－４、Ｅ－５等を中心に貝類の分類を進めた。以下その概要を述べる。

種名の同定

本貝塚からは出土した貝種は、腹足類網15種、掘足類網３種、斧足類網15で合計33種が同定出た。さらに同定の出来ないのも１～２種存在する。また３個体と推察されるタカラガイが出土ている。

腹足類網はアカニシ、斧足類網はサルボウ、ハマグリ、オキシジミ、アサリ、シオフキ、カカガイ、シラトリガイはグラフに個体数等を提示し以下は表にし、個体数と表示した。

貝　種

本貝塚の主体を占めるものは、各層、グリッドにおいてアサリが圧倒的数量を占めた。次にサボウが続きシオフキ、ヒメシラトリガイと続く。腹足網ではアラムシロ、アカニシ、ウミニナ、ミニナ科がみられる。これらから本貝塚周辺の内湾は砂質の内湾的海底が推察され砂泥質の海も存在したと考えられる。相対的にみれば内湾的な泥底、湾奥部の砂泥質の干潟が想定される。ラムシロ、アサリ、ヘナタリガイ等の数量がそれを想定される。ハマグリは少ない。

河口砂泥質のヤマトシジミは、各層において少なく生育環境が適していないことがうかがわれ、口状の水域の存在が皆無に近い事が考えられる。

貝の生育は、斧足網は全体的に中期後半～後期にかけての本域のものに比べてやや小型であっ。これは腹足網にも言えることである。

貝製品

貝製品は、ハマグリの貝刃が相当数出土している。左右の特別な偏在は特にみられ無いが、総てＬがやや多い。ハマグリそのものの生育が悪い為殻長は 7.5 ㎝を最高とし４㎝前後まで使用ている。確認した範囲では貝刃はハマグリ以外には検出出来なかった。検出された刃の制作技はほぼ腹縁の全体に及ぶものが多数を占め、片側のみのものは一割に満たなかった。加工は内、外面から不規則な押圧剥離を加えている。

その他の貝種にも存在したかも知れないが確認出来る範囲ではハマグリのみであった。

貝輪は、完存品は無くアカニシの加工半ばのものが出土している。殻口と殻底部側からカットれ軸、殻頂もカットし内径49㎝×40㎝の楕円気味Ｃ−４区から出土している。 その他Ｂ−４区か小型の貝輪状のものも見られたが断定は出来ない。

ツノガイの中にもカットされたものが見られる。（第56図） 10、11、12、13が見られた。長さ一様ではないが 2.5 ～４㎝前後でカット面は加工されている。カットは腹面前後で切断し角をと丸みをもつ。ツノガイ、マルツノガイが出土している。

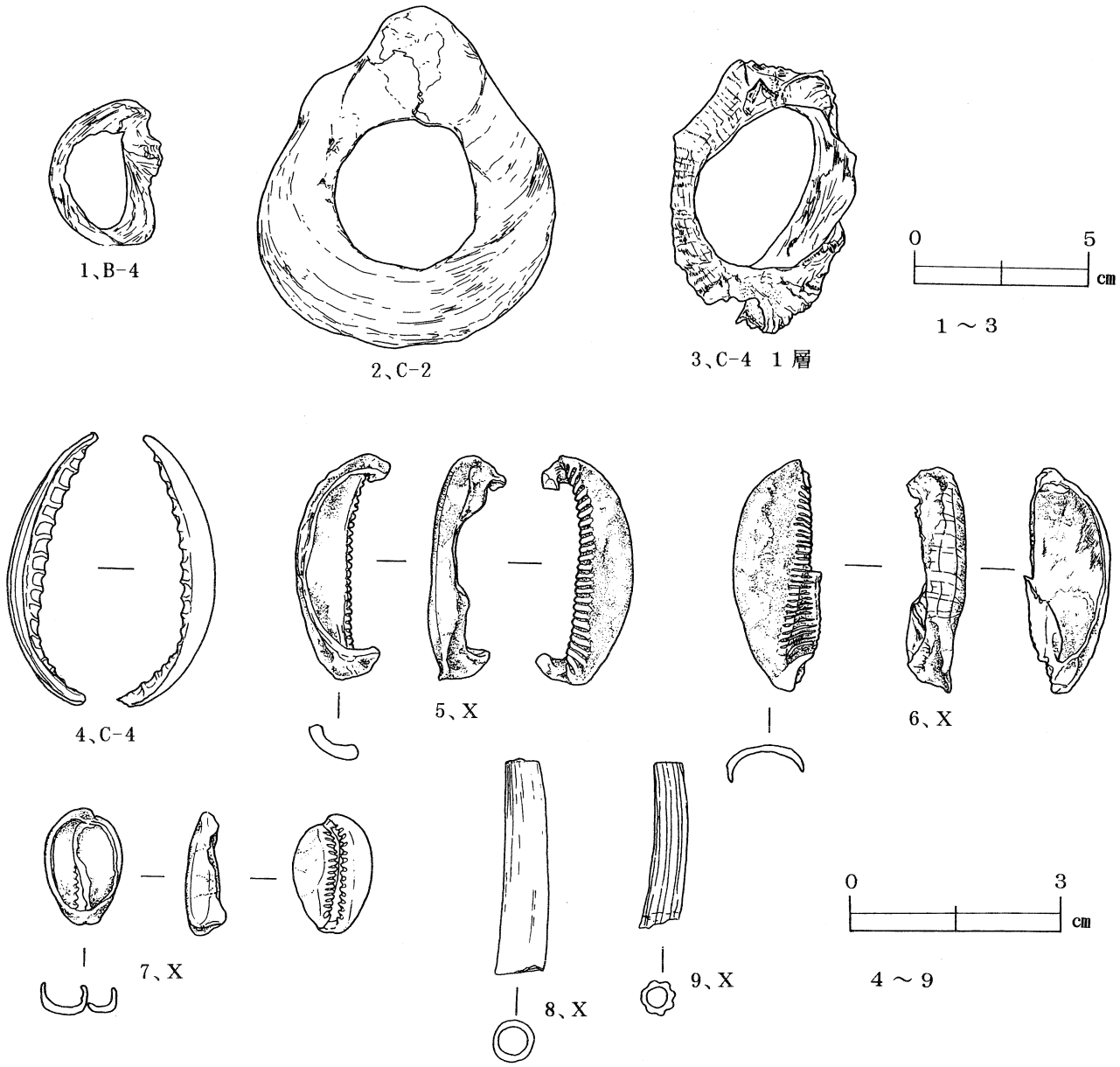
イタボガキの大型の貝輪がＣ－２区から出土している。中央部に円形に3.5 ㎝の孔を穿つ２と破品と思われる４が見られた。Ｃ－４区出土。

ハチジョウタカラガイ、ホシキヌタガイは背面が除去された状態で外唇１、内唇１と背面が除された１個体が出土。（第56図） ５、６、７。 分類からは１／２タイプと１／４のタイプに別る。 『忍澤　成視　縄文時代におけるタカラガイ加工品の素材同定のための基礎研究　古代109号』

● タカラガイ　（第56図）

軟体動物門、前　亜綱、中腹足目タカラガイ科に属する。大小、都合３個体と推察した。分布は、熱帯、亜熱帯のサンゴ礁の海域に棲息する。大部分の種は太平洋、インド洋に見られ大西洋、地中海には少ない。『タカラガイの道Ⅱ』佐藤一夫著より。４はカズラガイか。

本貝塚からは、大型の外唇、内唇と小型の７が出土した。外唇は殻高 6.3 ㎝、内唇も 6.3



第54図　B－4、C－2、C－4、X、貝製品、実測図

㎝で同値を示し背腹は、背面が加工され計測は不能である。遺存部で 1.1 、 1.4 ㎝を測る。小型の３は殻高 3.4 ㎝で、背面は加工され現存７㎜を測る。本貝塚出土のタカラガイは、装飾品として加工され未製品と推察される。

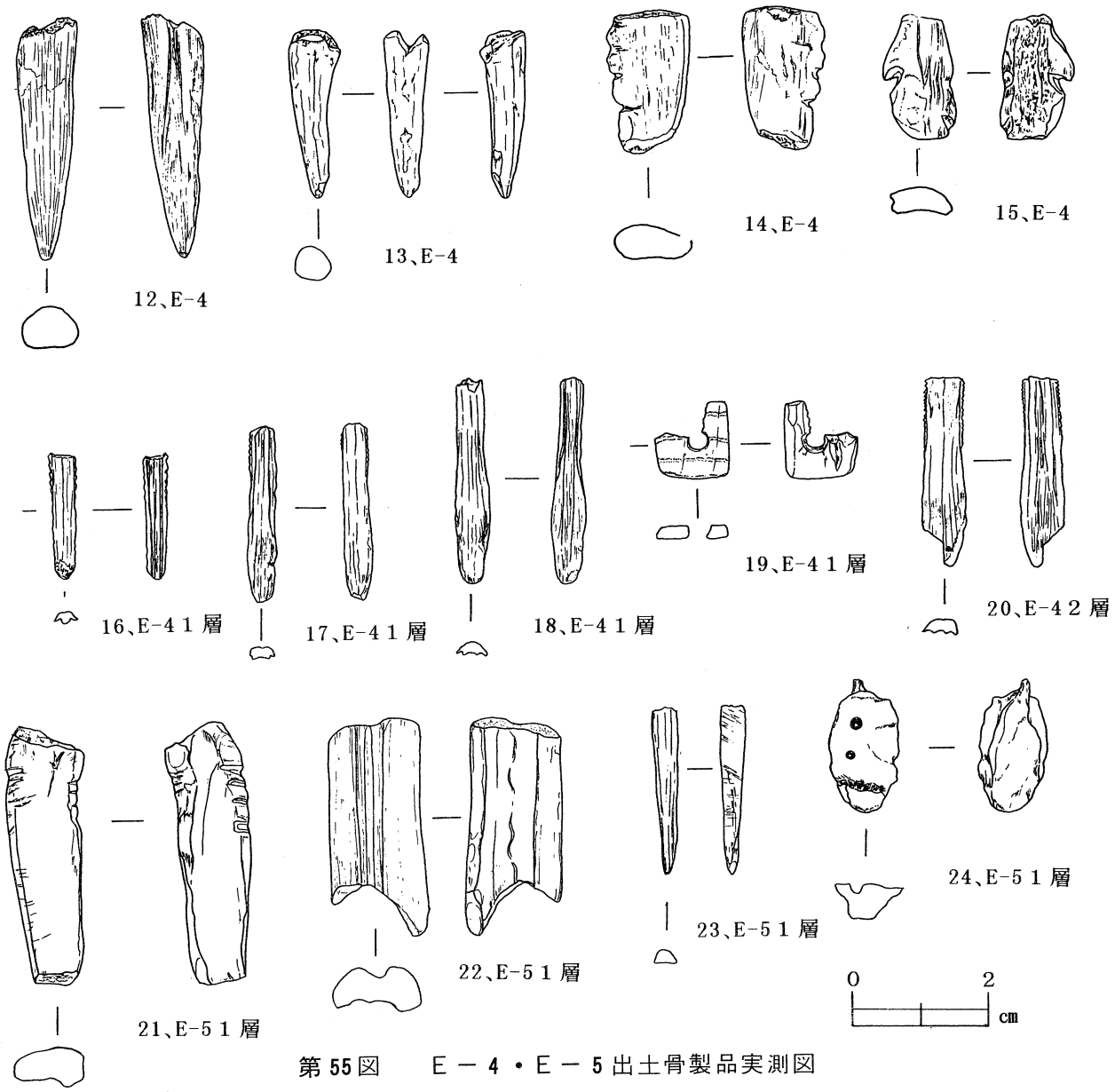
４は、タカラガイ形加工品と推察されるカズラガイであり、北海道亀田郡戸井町の戸井貝塚出土のものと類似する。いずれも貝層中の出土である。

注１：佐藤一夫　1999　タカラガイの道（Ⅱ）　苫小牧市埋蔵文化財センター所報１

4. 脊椎動物遺体

● 魚種の構成

同定された魚種は、種、数量から近海のものが卓越し鹹水性のものに比べ、淡水性のものは極少量である。主要な魚種は、クロダイ、ウナギ、スズキ、ハゼ科、コチ等でマイワシ、アジ、フグ、カレイ科、ヒラメ科、エイ目等が観察された。その他ウニの殻板が1点見られた。



第55図　E－4・E－5出土骨製品実測図

淡水産では、コイ・フナが代表的であるが数量的には非常に少ない。これらの遺体数量から主体的に捕獲、食用に供したものはクロダイ、ウナギ、スズキ属と推察される。季節的には、アジ、コチ、フグ、ニシン科等も捕獲され食用に供されていた。

本貝塚からは、魚類、爬虫類、鳥類、獣類等が観察され、以下出土遺体について概要を述べる。

● 魚　類

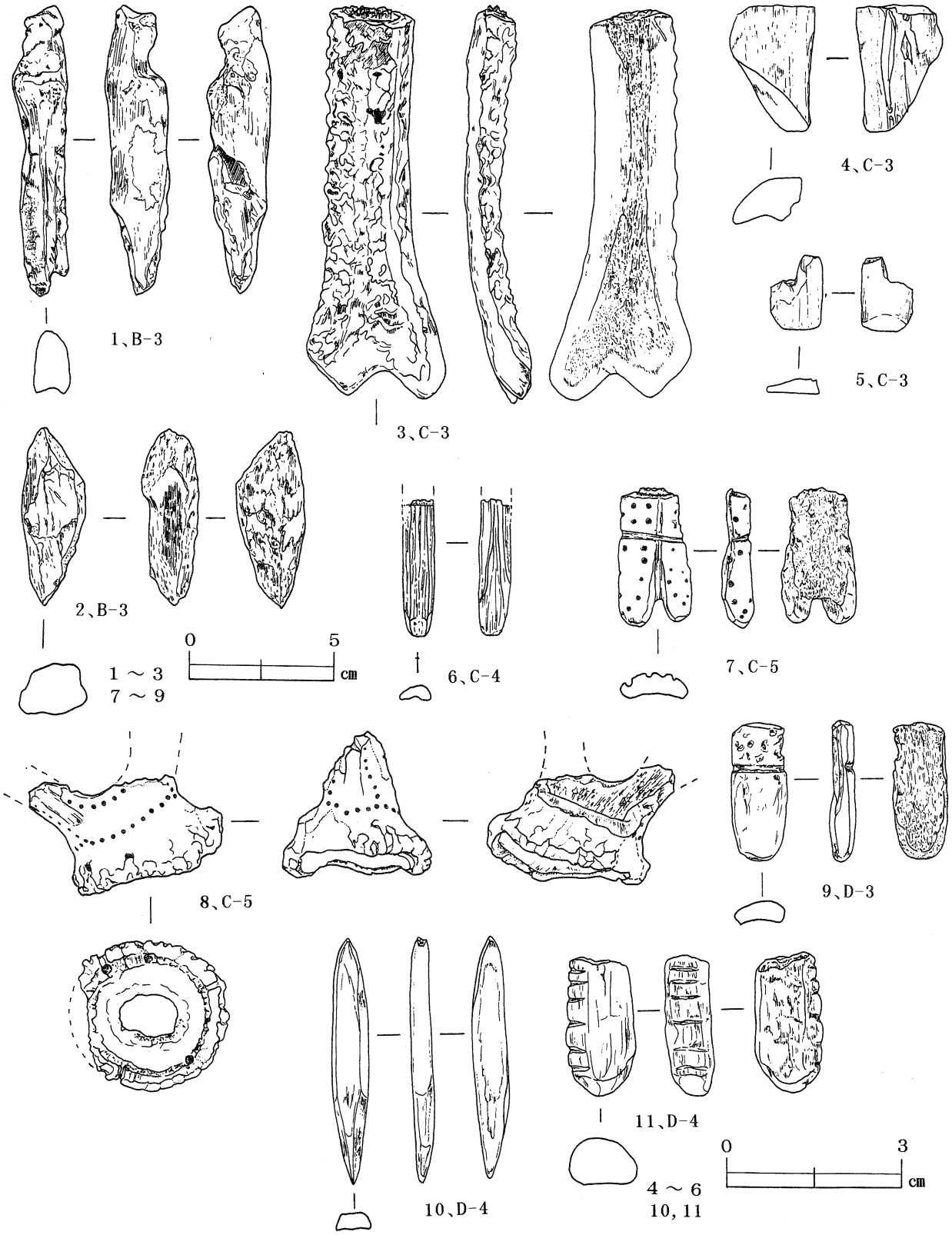
本類が出土量では、さも多く20種程が同定された。表を参考されたい。

a　サメ類

いずれも推骨のみで各グリッド、各層から出土している。相対的には、それ程の出土量ではない。出土魚種の主体を占めるものではない。

b　エイ目

本類は、推骨、鱗板、歯板等が同定されている。量的には少ない。各グリッド、各層から出土



第56図　B－3・C－3・C－4・C－5・D－3・D・4出土遺物実測図

している。

c　コチ類

本類は、相対的には出土数はやや多い。中型魚種として食生活の主要な魚種と推察される。クロダイ、スズキ類に次ぐ。歯骨、主鰓蓋骨、腹推体、尾推骨等が出土している。

d　スズキ

本類は、内湾域の生活には欠くことの出来ない重要な魚種で本貝塚では、クロダイについで多く同定されている。前上顎骨、歯骨、方骨、主鰓蓋骨、腹推体等が相当数同定された。やや大型のものが多い。

e　クロダイ

本類は、出土魚類の中では安定した捕獲が見られたと思われ各層の中で卓越していた。前上顎骨、歯骨、角骨、腹推体、尾鰭、口蓋骨等が同定され魚類もやや大型のものが多い。主体的な魚種と理解される。

f　マダイ

本類は、各区、各層から僅かづつ検出されている。口蓋骨、推骨、歯骨、背鰭棘等が見られたが数量的にはクロダイには及ばなく付属的感じである。

g　ボラ

本類は、主鰓蓋骨、腹推体等が極少量同定された。量的に主体になる魚種ではない。各グリッド、各層から見られた。

h　ヒラメ

本類は、部分的に検出された。関節骨、推骨等が同定されている。海底の環境や鹹水性が馴染まないと推察される。

i　サヨリ属

本類は、腹推体のみ同定された。検出状態から主体的な魚種ではない。

j　アジ

本類は、極一部のグリッドから腹推体が出土している。

k　マイワシ

本類は、腹推体が各層、グリッドから検出されている。

o　フグ

本類は、前上顎骨、歯板等が各層、各グリッドから極少量同定されている。主体的魚種ではない。

p　ウナギ

本類は、腹推体、篩骨、基後頭骨等が同定されている。数量的にはやや多いが遺存率の関係で他の骨類は検出されなかった。

5. 小　結

各層出土の魚類は、クロダイ、スズキ、ウナギが卓越しコチがこれに次ぐ出土を示している。相対的に見れば本類が、主体的な捕獲魚類と思われ、季節的な関係でマイワシ、アジ、サバ、ボラ、ニシン等が加わると推察される。層位的には１、２層のみで３層の混土貝層からは皆無であった。

コイ、フナの淡水産の魚種は少なく、当時本類の生育環境が周辺にさほど存在しないと推察される。中期中葉以降の貝塚の特性か、貝層の遺存状態かは判断に迷う所である。類例の増加を待って検討を加えるべきと私考する。

6. 哺乳類

本類の組成は、イノシシ、シカやタヌキ、ネズミ等が見られたが極少量であった。出土量は、総体的に非常に少ない。D－4区1層からまとまって出土しているのみで各区では非常に少ない。明確に特定出来る状態のものは皆無に近い。ネズミ、リス科が僅かに見られた。遺存状態が悪いのか、環境のせいか。

人骨は、頭蓋冠の一部が出土している。縫合からは壮年期の人か。その他は、歯骨のみで9本が認められ、三種類に分けられる。乳歯が4本、他にエナメル質の欠失したものが3本、歯根の欠失したものが5本で（歯冠の半截され歯根の無いもの1、歯根欠失4）、幼年期、壮年期、やや熟年期に近い3人の歯骨と推察される。

いずれの歯にも人工的な加工は存在しない。

7. 両棲類、爬虫類

本類は、C－3区1層からアカガエルの脛骨が1片が検出されたに過ぎない。ヘビもB－2、C－3区から僅かに認められたに過ぎない。総じて遺存率、個体数の少なさが目につく。本時期の貝塚の特性か。

Ⅵ 骨・角・歯牙製品（第54図、55図）

本貝塚からは、近隣から比較的類例の少ない縄文時代中期中葉から後葉の骨、角製品が出土している。以下、これらの特徴について述べる。

8は、C－5区から出土した鹿角の角座と分岐部を利用した製品で角座と第一枝の分岐部を利用し器面に二列の円形の穿孔が巡る。欠失するが長方形の窓状の刳り貫きが見られ円筒形。3保C－3区から出土した匙状の角製品で上部はカット面がそのまま残る。長さ13㎝で弱く内傾する。先端部は、U字状に別れなめらかに加工されている。

7、9はカット面を残すが円形の穿孔が線状に左右に施され上部に沈線が入り、下端で二股に別れる。背面はカットされ扁平。9は棒状で沈線が巡りなめらかに研磨加工されている。背面は、8同様である。11は、片面のみに刻みを細かく入れる。上部は欠失し不明。6、10は、シカの骨を利用した刺突具で中央部は台形状。

1、2は、未製品か。4、5は欠失した製品の可能性が高い。

鹿座を利用した本製品は、時期を問わず類例的には皆無でより近いものに千葉県の向油田（半截品）宮城県南境は装飾的に類似するが形態、角座利用に差がみられる。

本製品は完成品の欠失と推察され縄文時代中期中葉から後葉の本例は、西浦、北浦周辺の貝塚からは類例を見ないものであった。また沈線をもつ半截品の5、9、10も同様の性格を有すると推察するが類例はすくない。

第１表　貝類遺体表

Ｂ－２区（１層）

地区名		Ｂ　１　区					
種名		左	右	個体総数	殻長（㎜）	重さ（ｇ）	その他・備考
腹足綱	ダンベイキサゴ			2			
	イボキサゴ			1			
	カワニナ						
	フトヘナトリガイ			200	1～3.1㎝	0.1～0.5ｇ	
	ヘナタリガイ			16	1～3.5㎝		
	カワアイイガイ			43	1～3.5㎝	0.5～1.0ｇ	
	イボウミニナ			69			
	ウミニナ			270			
	ホソウミニナ			96			
	ウミニカ科			1,003			
	ホシキヌタ			70			
	ツメタガイ			74			
	アカニシ			195		15～220ｇ	
	アラムシロ			12			
	スガイ			11			
掘足綱	ツノガイ			4			
	マテガイ			30			
斧足綱	アカガイ		1	1			
	サルボウ	521	540	061		1～16ｇ	欠け　132
	ハイガイ		1	1			
	イタヤガイ						
	ナミマシワガイ	24	32	56			
	マガキ	300	300	600		1～2ｇ	
	ヤマトシジミ	27	36	63			欠け　13
	ハマグリ					2～8ｇ	
	カガミガイ	296	301	597			欠け　465
	アサリ	2,167	2,194	4,361		1～7ｇ	欠け　3,945
	バカガイ						
	シオフキガイ	97	96	193		2～6ｇ	欠け　168
	ミルクイガイ						
	ヒメシラトリガイ	87	101	188	1.5～2.2㎝	0～1ｇ	欠け　133
	オオノガイ	47	36	83			すべて欠け
	オキシジミ						

第 2 表　C－3区（2層）

地区名		B 1 区					
種名		左	右	個体総数	殻長（mm）	重さ（g）	その他・備考
腹足綱	ダンベイキサゴ			108			少量
	イボキサゴ			225	1.5～3.5cm	48	
	カワニナ			16			
	フトヘナトリガイ						
	ヘナタリガイ						
	カワアイイガイ						
	イボウミニナ						
	ウミニナ						
	ホソウミニナ						
	ウミニカ科						
	ホシキヌタ						
	ツメタガイ			176	1 ～ 6 cm	1 ～ 50 g	大多数 1～50g
	アカニシ			1,205		10～250 g	
	アラムシロ			3,373	0.5 ～ 2 cm		多量、大きい
	スガイ			167	0.1 ～ 3 cm		やや大きい
	マテガイ			65			
掘綱	オオマテガイ			5			
	ツノガイ			3			
斧足綱	アカガイ						
	サルボウ	7,572	9,007	16,579		1 ～ 20 g	欠け 1,300
	ハイガイ						
	イタヤガイ						
	ナミマシワガイ	47	81				
	マガキ	668	425				
	ヤマトシジミ	54	63	117			欠け 36
	ハマグリ	372	362	734		1 ～ 30 g	欠け 316
	カガミガイ						
	アサリ	9,694	9,384	19,078		1 ～ 7 g	欠け 5,266
	バカガイ						
	シオフキガイ	4,336	4,086	8,422	0.5～3.5cm	1 ～ 10 g	欠け 4,940
	ミルクイガイ						
	ヒメシラトリガイ	1,175	1,000	2,175			欠け 755
	オオノガイ	177	111	288			すべて欠け
	オキシジミ	305	322	627			

第 3 表　D－4区（2層）

地区名		B 1 区					
種名		左	右	個体総数	殻長(mm)	重さ(g)	その他・備考
腹足綱	ダンベイキサゴ			53	1.8 cm	1 g	1 gが多数
	イボキサゴ						
	カワニナ						
	フトヘナトリガイ			16	2.7 cm	0.7 g	
	ヘナタリガイ			4	2.3 cm		
	カワアイイガイ			3	2.6 cm		
	イボウミニナ			9	2.3 cm		
	ウミニナ			281	2.7 cm		
	ホソウミニナ			14	2.0 cm		
	イボニシ			33			
	ホシキヌタ						
	ツメタガイ			896		10～250 g	
	アカニシ			915		11～120 g	
	アラムシロ			154			
	スガイ			2	1.3 cm	0.2 g	
掘綱	ツノガイ			1			
斧足綱	アカガイ						
	サルボウ	2,437	2,773	5,246		0.2～20 g	欠け　674
	ハイガイ						
	イタヤガイ						
	ナミマシワガイ						
	マガキ			42	4 cm	48 g	
	ヤマトシジミ						
	ハマグリ	194	162	356		0.4～24 g	欠け　166
	カガミガイ	87	75	162		1～18 g	欠け　56
	アサリ	7,522	7,485	15,007		0.2～7 g	欠け　9,980
	バカガイ	25	39	64			欠け　200
	シオフキガイ	1,030	983	2,013		1～10 g	欠け　926
	ミルクイガイ						
	ヒメシラトリガイ	57	73	130	1.5～2.1 cm	0.2～1 g	欠け　215
	マテガイ	2	2	4	3.5 cm		
	オオノガイ	4	4	8			
	オキシジミ						

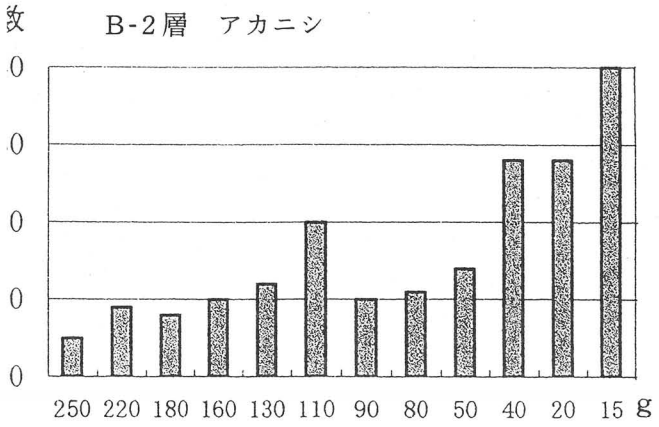
第 4 表　E－5区（2層）

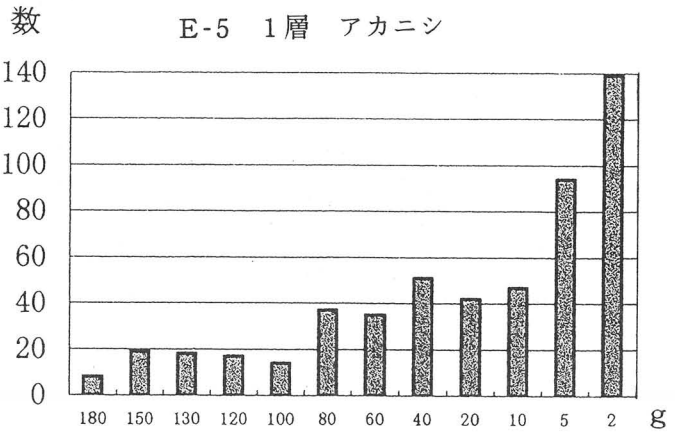
地区名		B 1 区					
種名		左	右	個体総数	殻長(mm)	重さ(g)	その他・備考
腹足綱	ダンベイキサゴ						
	イボニシ			166	1.5～4cm	1～5g	
	カワニナ						
	フトヘナトリガイ			506	1.5～3cm	0.2～1g	
	ヘナタリガイ			34			
	カワアイイガイ			57			
	イボウミニナ			93	1～3cm		
	ウミニナ			706	1～3cm	0.1～1.5g	
	ホソウミニナ			444	0.5～2cm	0.1～0.5g	
	ウミニカ科			547			
	ホシキヌタ						
	ツメタガイ			121		1～32g	
	アカニシ			521		2～180g	
	アラムシロ			100	0.5～1.5cm		4g多数
	スガイ			248		0.2～1g	
掘綱	ツノガイ			3			
斧足綱	アカガイ						
	サルボウ	915	957	1,872		1～16g	欠け　214
	ハイガイ						
	イタヤガイ						
	ナミマシワガイ			135			
	マガキ			172			
	ヤマトシジミ	1	15	16		0.5～3g	
	ハマグリ	1,702	1,671	3,373		1～26g	欠け　2,240
	カガミガイ	245	247	492		1～14g	欠け　240
	アサリ	2,533	2,536	5,069		1～7g	欠け　3,680
	バカガイ						
	シオフキガイ	1,550	1,513	3,063		1～10g	欠け　1,860
	ミルクイガイ						
	ヒメシラトリガイ	249	140	389			欠け　250
	マテガイ			2			
	オオノガイ						
	オキシジミ						

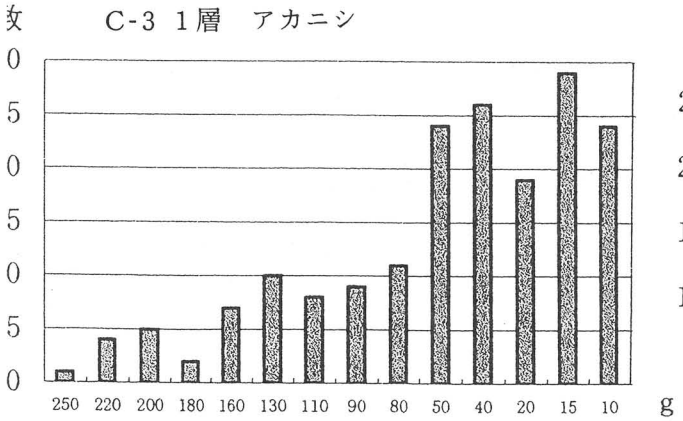
第5表　微小貝類一覧表

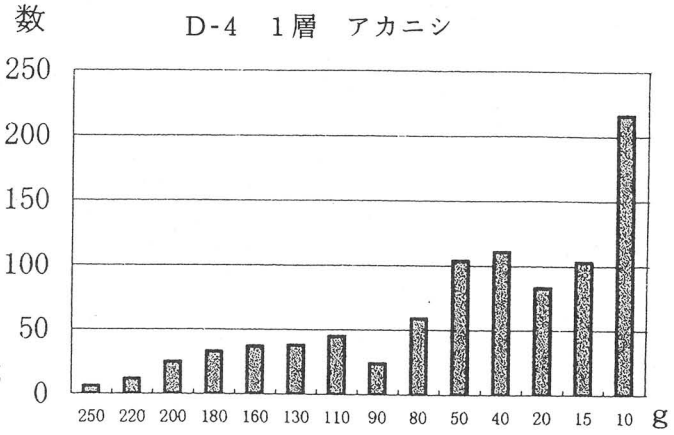
番号	貝　種　名	B-2　1層	C-3　1層	D-4　1層	E-5　1層
1	ハ　イ　ガ　イ	7			
2	ヒ　メ　ギ　セ　ル	1	316	32	
3	ム　ラ　サ　キ　ガ　イ	右2　左2			右100　左120
4	オ　オ　タ　キ　コ　ギ　セ　ル		160		
5	ヒ　タ　チ　マ　イ　マ　イ		2		
6	イ　シ　マ　キ　ガ　イ		8		
7	ヒメジザメザンショウガイ		9		
8	イ　タ　ボ　ガ　キ		3		
9	ス　ミ　ノ　エ　ガ　キ		左4		
10	ム　ギ　ガ　イ		48		
11	ヒ　メ　コ　ハ　ク　ガ　イ		125		1
12	キ　セ　ル　ガ　イ　モ　ド　キ				1
13	オ　オ　コ　ハ　ク　ガ　イ				31

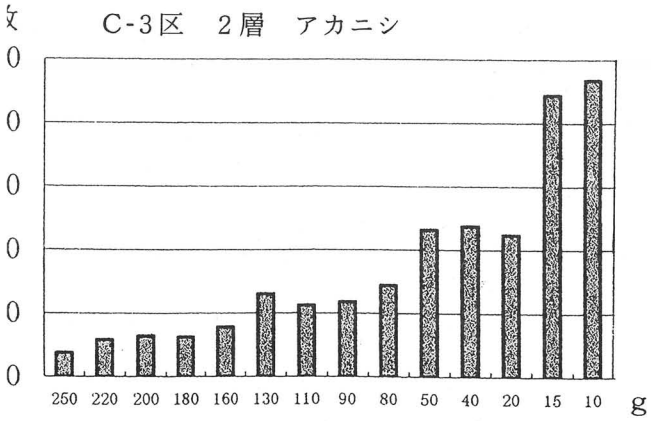
第6表　アカニシ遺体



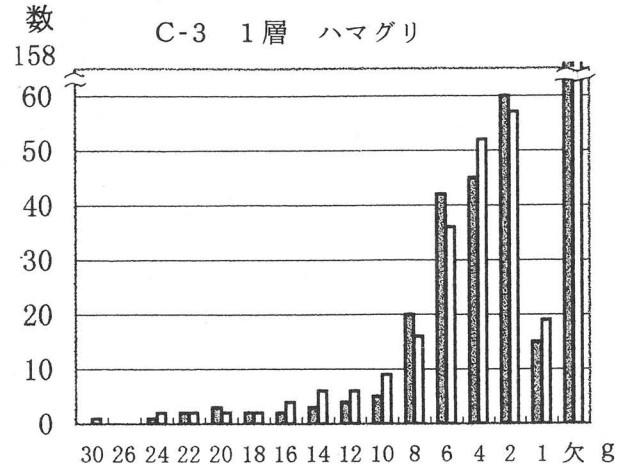


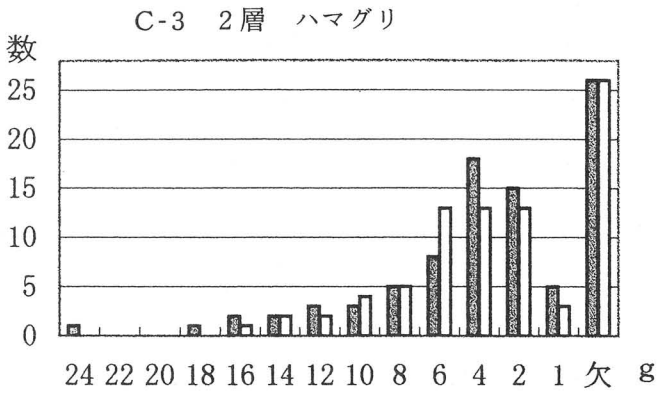


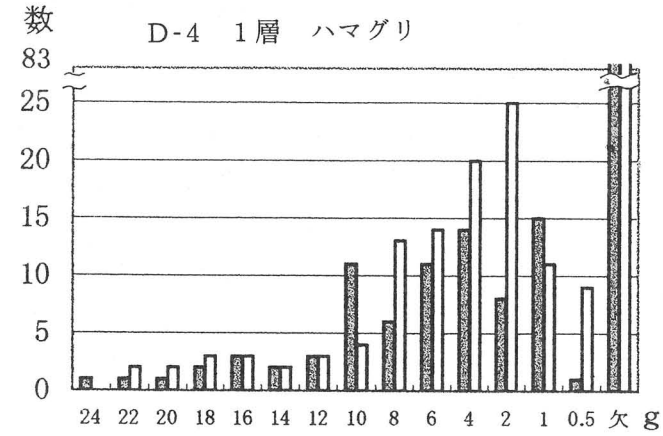


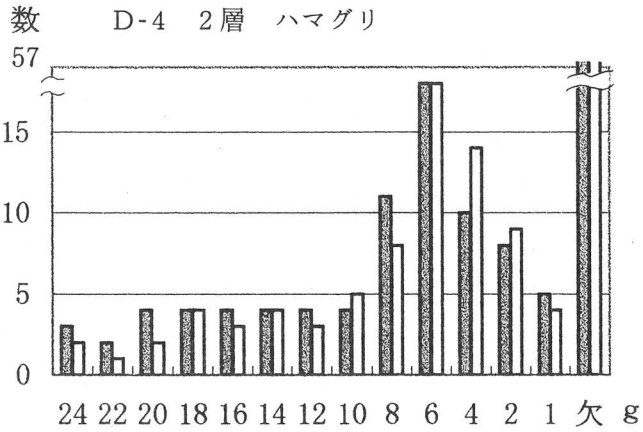


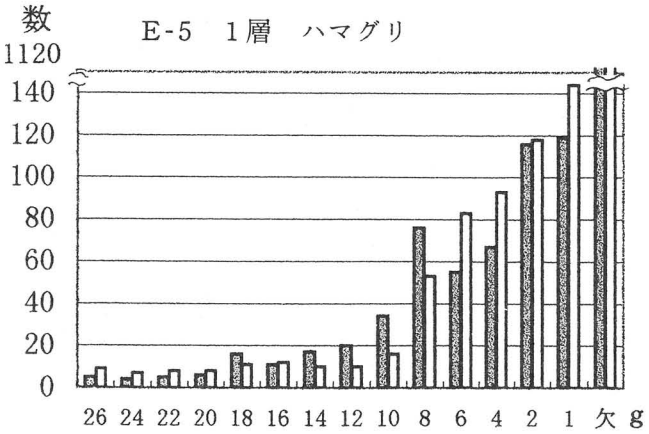
第7表　ハマグリ遺体





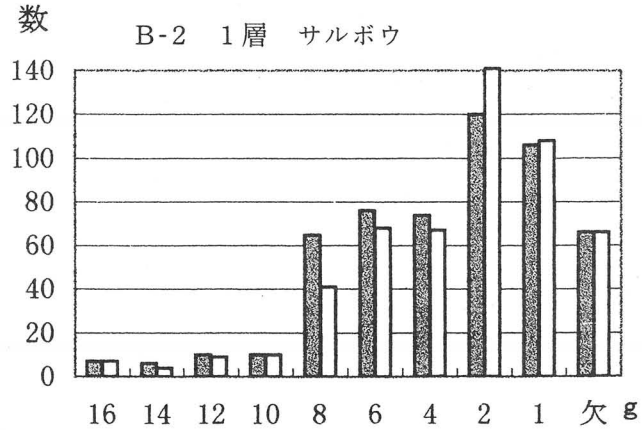


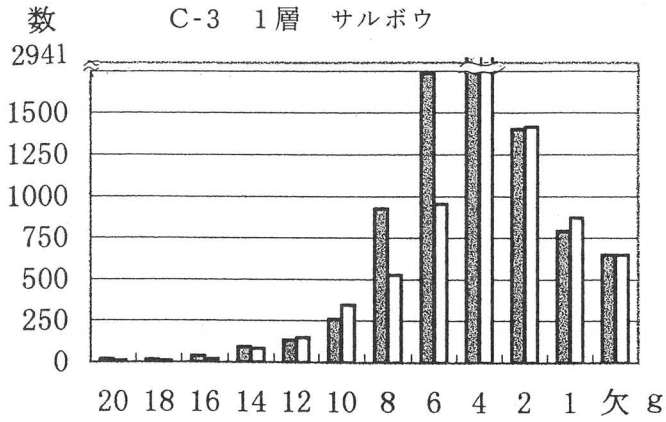


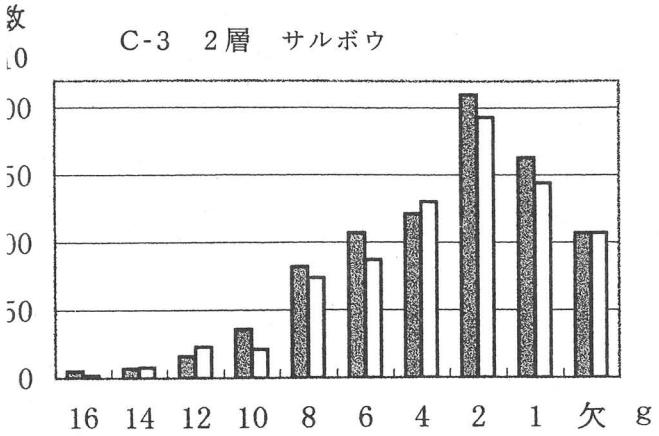


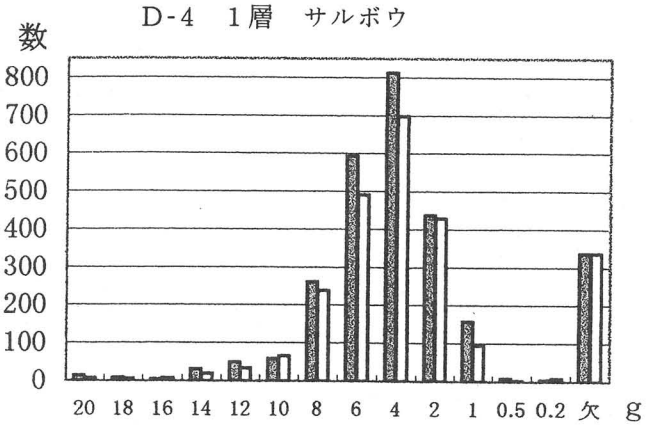
■右
□左

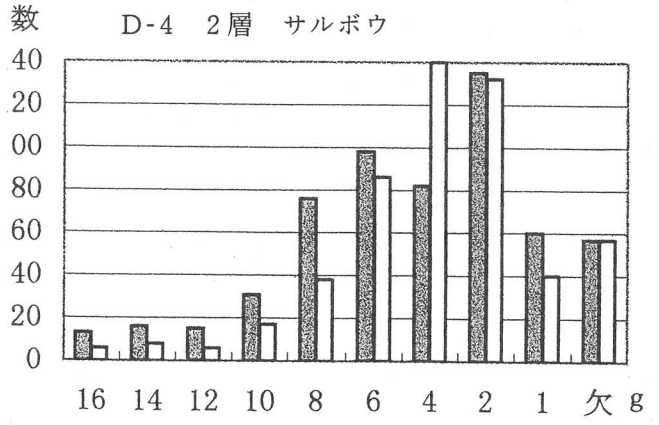
第8表　サルボウ遺体グラフ

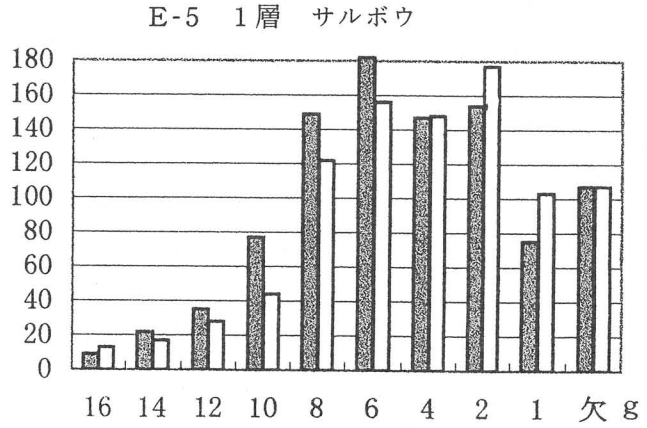




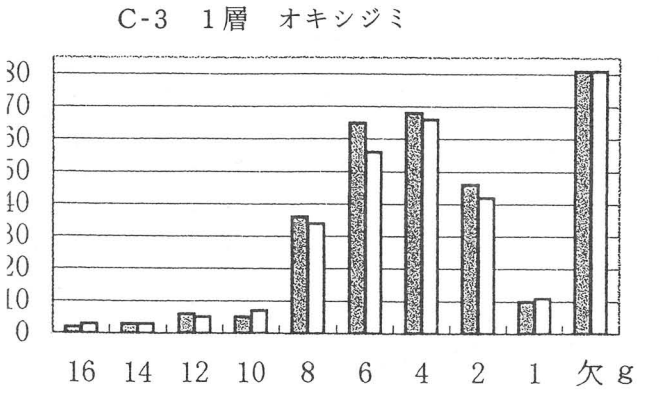


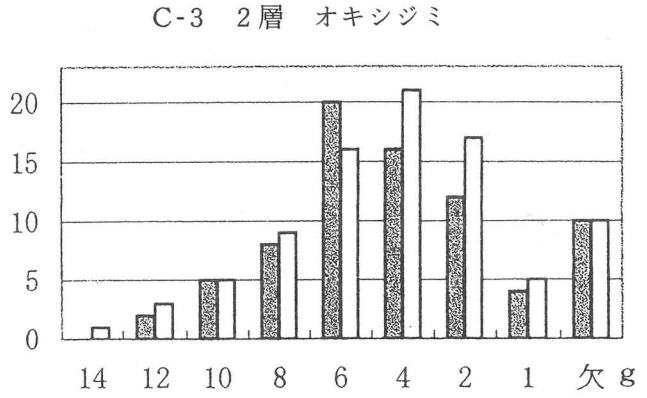


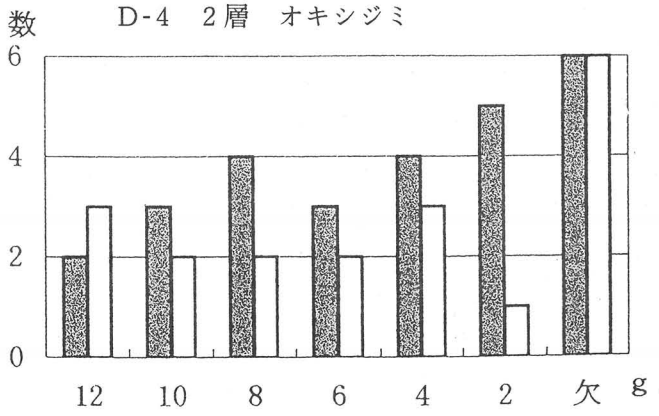


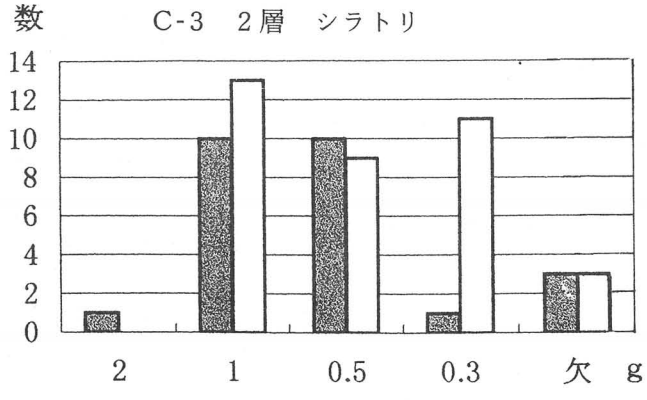


第9表　オキシジミ・シラトリ遺体

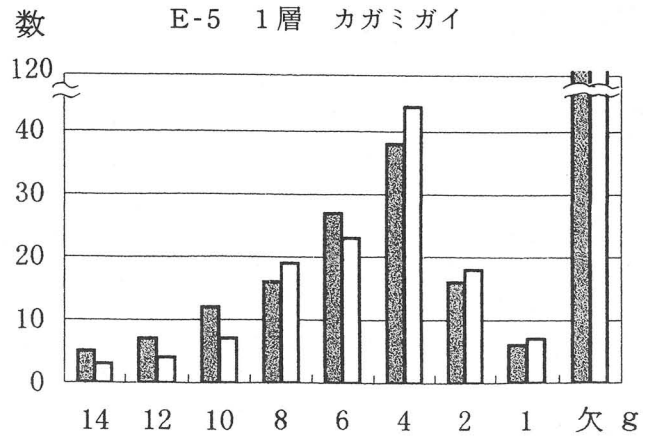


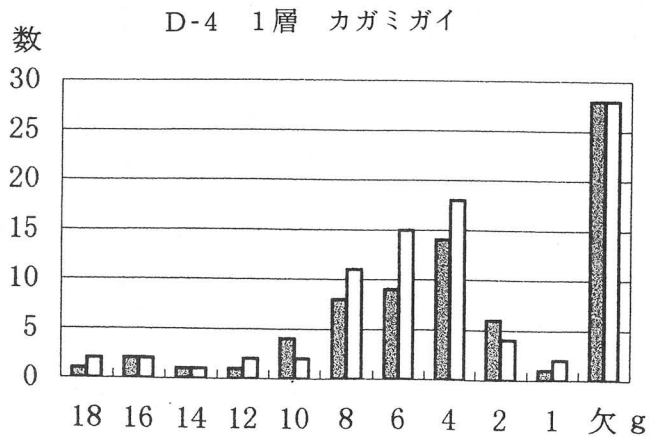


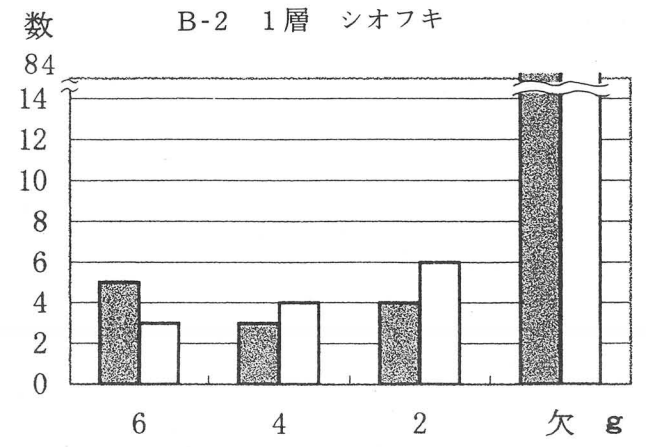


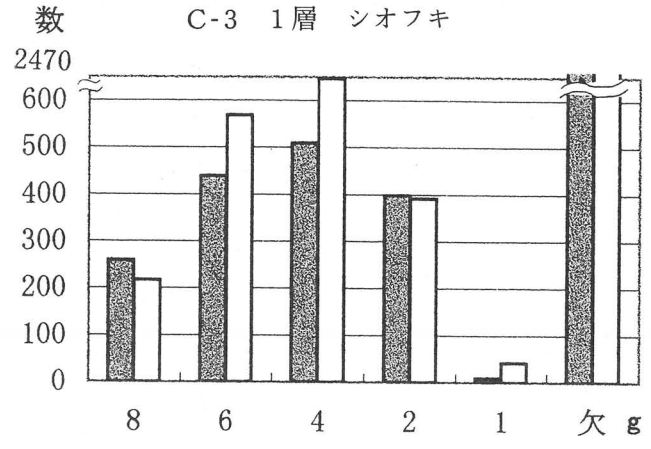


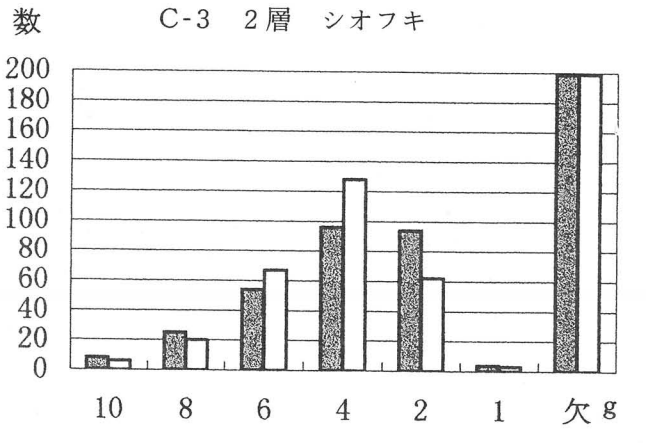
第10表　カガミガイ・シオフキ遺体

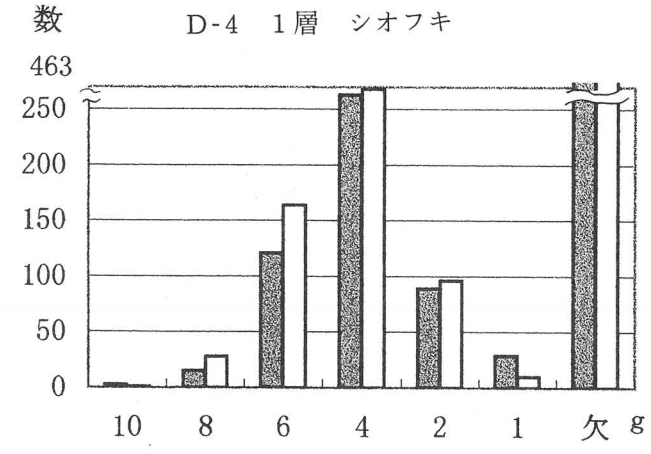


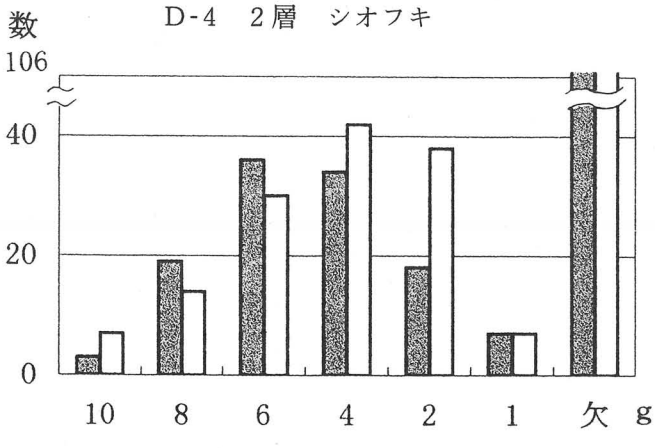


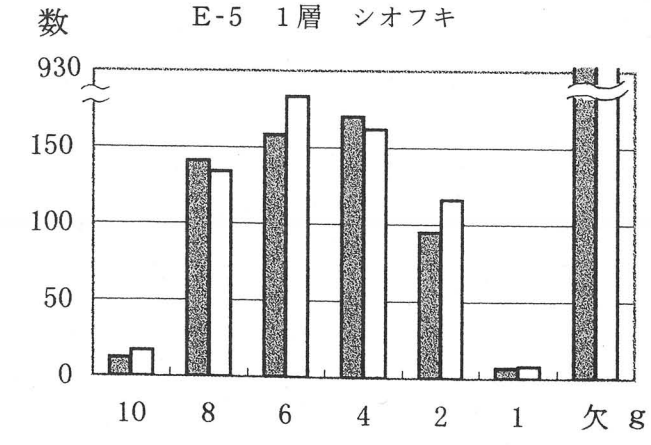




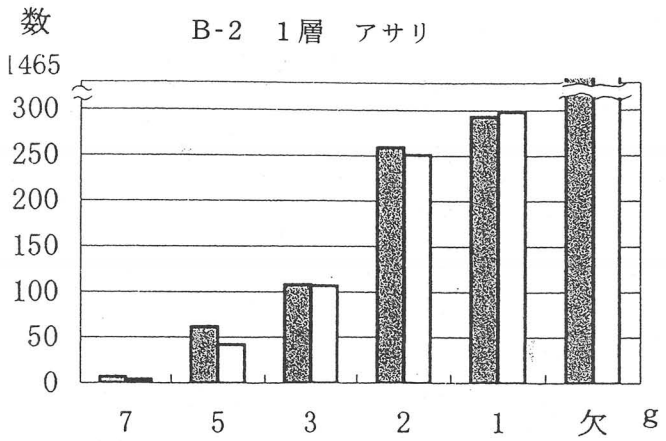


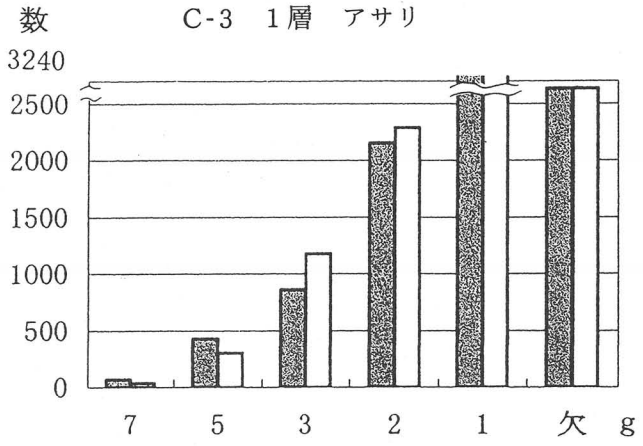


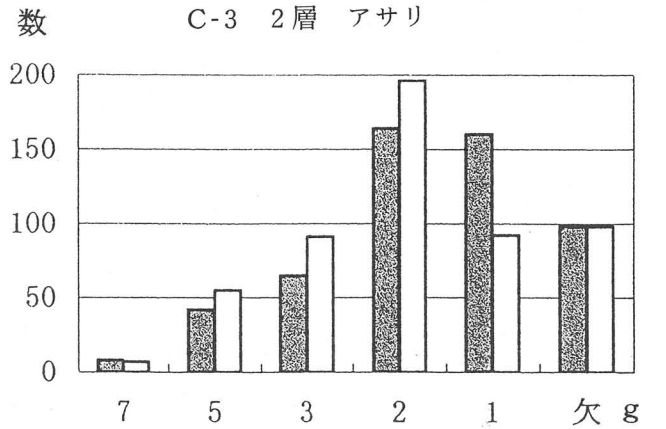


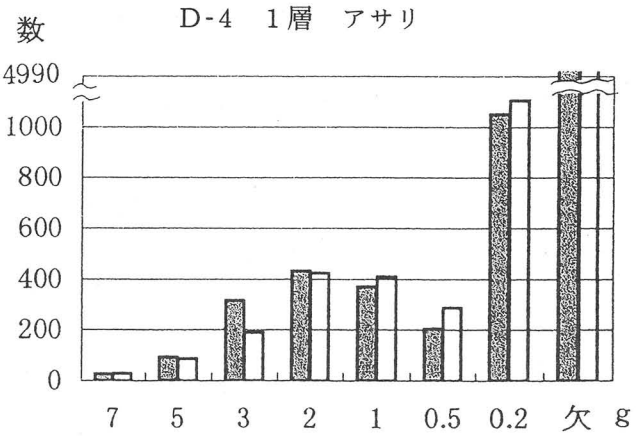


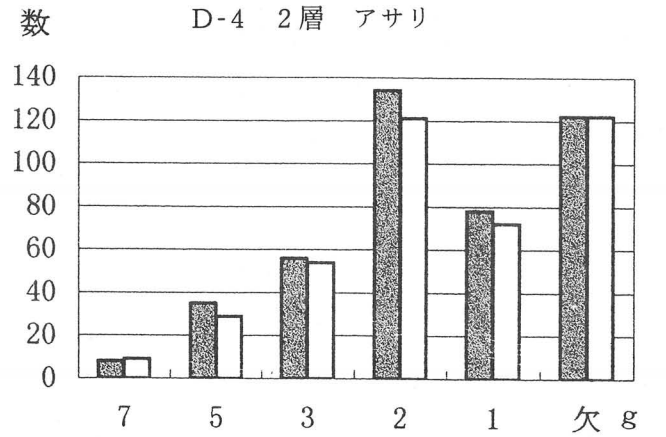
第11表　アサリ遺体

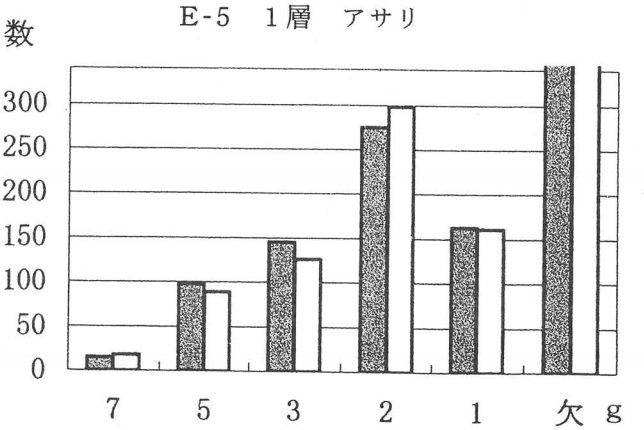

数
B-2　1層　アサリ
1465
300
250
200
150
100
50
0
7
5
3
2
1
欠
g


数
C-3　1層　アサリ
3240
2500
2000
1500
1000
500
0
7
5
3
2
1
欠
g


数
C-3　2層　アサリ
200
150
100
50
0
7
5
3
2
1
欠
g


数
D-4　1層　アサリ
4990
1000
800
600
400
200
0
7
5
3
2
1
0.5
0.2
欠
g


数
D-4　2層　アサリ
140
120
100
80
60
40
20
0
7
5
3
2
1
欠
g


数
E-5　1層　アサリ
300
250
200
150
100
50
0
7
5
3
2
1
欠
g

各区出土

第12表　B－2区　1層

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prom	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・骨間 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
クロダイ	r				14		8													タイ歯 198　背　棘 61
	l				15		8	8												第1血管棘 3
エイ目	r													椎骨	尾棘					
	l													12	2					歯板 1　鱗板 2
ウナギ	r																			椎骨 20
	l													5						
サメ類	r													椎骨						遊離歯 1
	l													22						
サヨリ属	r													椎骨						
	l													181						
ニシン科	r													椎骨						
	l													121						
サバ科	r													椎骨						
	l													28						
マグロ類	r														尾椎					
	l														1					
ボラ科	r											2								
	l																			
マイワシ	r													130						
	l																			
イシカレイ	r																			第1血管棘 4
	l																			
フグ	r																			歯板 3
	l																			
サッパ	r																			第1脊椎骨
	l																			32
その他魚	r													椎骨						ウロコ 29
	l													658						細片 514

	r／l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert	肋骨 rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
カモ	r																		
	l																		
鳥類	r																		細片　14片
	l																		
ヘビ	r																		椎骨　3
	l																		

第13表　C－3区　1層

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・骨間 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
クロダイ属	r						1								39					細片 10
	l			3			1													
タイ	r													椎骨						背　棘 113　歯 151
	l													6						第1血管棘 7

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・間骨 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
クロダイ属	r						1								39					細片 10
	l			3			1													
タイ	r													椎骨						背棘 113 歯 151
	l													6						第1血管棘 7
マダイ	r								8											
	l								2											
エイ目	r													椎骨						鱗板 2 歯板 1
	l													2						尾棘 2
スズキ属	r	4		6			8		10			3								関節骨(C)7
	l			7			5		8											(R)4
ウナギ	r													椎骨						篩骨 1
	l													113						
サメ類	r													椎骨						
	l													16						
ニシン科	r													椎骨						
	l													341						
サバ科	r														19					
	l																			
マイワシ	r													89	10					
	l																			
コチ	r						4					1								歯骨細片 8
	l						1					2								
マアナゴ	r						2													
	l						2													
フグ科	r			3																
	l			1																
ボラ科	r																			
	l											3								
サッパ	r																			第1脊椎骨
	l																			31
カレイ	r																			第1血管棘
	l																			9
クサカゴ科	r											1								
	l											2								
ハゼ科	r													椎骨						
	l													12						
ヒラメ科	r																			関節骨(R)1
	l																			(L)1
フナ	r																			副蝶形骨
	l																			4
ウニ	r																			殻板 1
	l																			
その他魚骨	r																			不明椎骨 220
	l																			骨 3842
製品	r																			針 2
	l																			その他 1

C－3区　1層

	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert rib	肋骨	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
鳥類	r																		細片 13
	l																		
ネジミ	r																		歯 2
	l																		
小形猛類	r																		未節骨 2
	l																		
ヘビ	r																		椎骨 12
	l																		
アカカエル	r																		
	l												1						
シカ	r																		細片 3
	l																		

C－3区　1層

	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert	肋骨 rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
その他獣骨	r l																		細片　65
不明小動物	r l																		細片　24
	r l																		
	r l																		未製品　2 針　12

C－3区　2層

種類	r/l	頭骨 skull 鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	内臓骨 visceral skeleton 前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・骨間 sub imop	脊椎骨 vertebra 腹椎体 abd	尾椎体 cau	肩帯 shoulder gir dle 後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	その他
クロダイ属	r l			3 6			6 5	1 2						48						尾　第2棘5 細片　3
タイ	r l					2 4								椎骨 11						歯　5　背　棘17 第1血管棘6
エイ目	r l													椎骨 36						歯板　1　尾棘　1
スズキ	r l	1		1 3			6		6		2			68						
ウナギ	r l													椎骨 23						
サメ類	r l													椎骨 1						
ニシン科	r l													椎骨 12						
マイワシ	r l													17						第1背椎骨 2
コチ	r l						4				1									
フグ	r l			1																
ボラ	r l											2								
ヒラメ科	r l								1											関節骨(R)1
コイ	r l													椎骨 9						
その他魚骨	r l													椎骨 109						ウロコ　7 魚骨　471

C－3区　2層

	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert	肋骨 rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
鳥類	r l																		細片　5
ガンカモ科	r l					1			2			1							鳥口骨(R)1 趾骨　1
カモ	r l						1												
キジ科	r l																		頸椎　1
ネズミ科	r l												1						
ヘビ	r l																		椎骨　4

C－3区　2層

	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
シカ	r l																	細片 8 歯 1
イノシシ	r l																	細片 2
小動物	r l																	不明骨 6 〃 歯 2
ぬい針	r l																	1

第14表　D－4区　1層

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・間骨 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
クロダイ	r l			2 1		1 2	2 6	1												細片 11
タイ	r l															2				背棘 42 歯 39　第1血管棘 7
マダイ	r l								1											
ニゴイ	r l																			副蝶形骨 5
エイ目	r l													椎骨 56						尾棘 5　歯板 8 鱗板 1
ウナギ	r l						1							椎骨 33						篩骨 1
スズキ	r l	4		4 3			2 5		2			2		34						関節骨 1 主上顎骨(R) 1
サヨリ属	r l													31						
フナ	r l														28					
ヒラメ	r l													椎骨 21						
マイワシ	r l													9						
ブリ	r l													2						
フグ科	r l			3 3																
イシカレイ	r l																			第1血管棘 2
サバ科	r l														2					
コチ	r l						4 1				1 2									
ボラ	r l													5						
ネズミザメ	r l																			顎歯 1
その他魚骨	r l																			細片 1396 ウロコ 3　椎骨 400

D－4区　1層

	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
ガンカモ科	r l								1									

D－4区　1層

	r／l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert	肋骨 rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 me psd	骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
カラス属	r l												1						
その他鳥類	r l																		骨体　22
	r l																		
リス科？ 詔歯目	r l						1												
	r l																		
ネズミ科	r l		1 2								1	1 1	1						
不明小動物	r l																		体骨　16
ヘビ	r l																		椎骨　6
犬？	r l																		歯　1
人間	r l																		歯　4
シカ	r l																		細片　30 歯　2
イノシシ	r l								1										未節骨　1 歯　3
その他獣骨	r l																		細片　90
製品	r l																		未製品　2 針　3

D－4区　2層

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・間骨 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
タイ科	r l																			背棘　13
クロダイ属	r l			1																細片　1
フグ科	r l																			上歯板 (R) 2
スズキ	r l	1		2 2		1 1	1 1							椎骨 14						
エイ目	r l													椎骨 9						歯板　1 尾棘　1
ウナギ	r l													椎骨 8						基後頭骨 2
ニシン科	r l													椎骨 9						
サバ科	r l																			尾棘　14
コチ	r l										1									
サメ類	r l													椎骨 19						
マイワシ	r l													4						第1背椎骨 1
サヨリ属	r l													椎骨 6						
サッパ	r l																			第1背椎骨 6
その他魚骨	r l																			細片　433 椎骨　125

D－4区　2層

	r／l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	肋骨 脊椎骨 vert rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
キジ科	r l																	頸椎 2
その他鳥類	r l																	体骨細片 5
ネズミ科	r l																	上顎骨(L) 1
リス科	r l					1												
	r l																	
ヘビ	r l																	椎骨 2
	r l																	
タヌキ?	r l																	歯 1
イノシシ	r l																	歯片 4
ンカ	r l																	細片 34
その他獣骨	r l																	細片 66
その他小動物	r l																	不明 5
人	r l																	歯 2
	r l																	
製品	r l																	針 1

第15表　E－5区　1層

種類	r／l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	上後頭骨 前頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・骨間 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
タイ類	r l													椎骨 4						歯 46　第1血管棘 7
クロダイ属	r l			1 3			2 1	1 1												細片 13 第1腹椎 3
スズキ	r l			3 3			5 5		2 1					椎骨 104						
エイ目	r l													椎骨 114						歯板 3　尾棘 2 鱗板 1
ウナギ	r l													椎骨 117						
フグ科	r l			4 4																
ニシン科	r l													椎骨 75						
サバ科	r l														40					
コチ	r l						3 2				1			6						関節骨(L) 1
マイワシ	r l													40						
マハゼ	r l			3										椎骨 24						
サッパ	r l																			第1背椎骨 9
サヨリ	r l													椎骨 59						

E－5区　1層

種類		頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
		鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前蓋骨 preo	主蓋骨 ope	下蓋・骨間 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc	
ニゴイ	r l																			副蝶形骨 3
クサカゴ科	r l											1								
ボラ	r l											1		椎骨 10						
コイ	r l													椎骨 13						
アジ	r l													11						
フナ	r l													7						
サメ類	r l													椎骨 18						
ブリ	r l													2						
その他魚骨	r l													椎骨 364						細片 1366

E－5区　1層

	r／l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert	肋骨 rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	骨 fib psd	距骨 ta	骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
ガンカモ	r l						1 1	1		3									烏口骨(R) 1
キジ	r l																		頸椎 2
鳥類	r l																		細片 47
カラス	r l												1						
	r l																		
ヘビ	r l																		椎骨 15
	r l																		
テン	r l		1																
ネズミ	r l		1																歯 3
タヌキ	r l		1																歯 7
イノシシ	r l		3												1				基節骨1　平根骨1　歯24 頸椎1　中節骨1　体骨3
シカ	r l						1												細片 45
獣骨	r l																		細片 167
人間	r l	1																	歯 5
未製品	r l																		針 2 その他 3

Ⅶ 総 括

道城平遺跡は、当初は未登録の遺跡で土砂採取の申請があり確認したところ土師器、須恵器の散布が認められ住居跡と推察出来る土層、土塁と推察される部分等が存在した。よって調査の必要が確定し調査に入った。当初は土師器の住居跡と土抗と考え調査を始めた。終了まじかに成り表土を剥がなかった谷頭部分（牛糞の山で低いため）を剥ぎ始めたところ遺存状態の良い貝層が出現した。調査区域の中央部に貝塚が認められた。よって本貝塚は道城平遺跡の中の貝塚としての呼称するに至った。

遺構は、奈良時代後半から平安時代にかけての住居跡で４軒が検出された。竈を西北壁北壁側に置く。掘り込みはいずれも浅く全容を把握出来る状態の遺構は存在しなかった。16基検出された土抗も損壊が激しく、時期を特定出来るものは13号のＶ字状のピットのみであった。

遺物は、土師器の胴部の張りは弱く口縁部は外反し器肉は薄い。杯は、碗状器形を呈する。須恵器蓋は、宝珠摘みは扁平化しカエリはやや顕著に見られる。

貝塚は、前述のとおりで未確認であった。規模は10ｍ×７ｍ程の楕円形状を呈し小谷津最奥部の凹地に占地し埋積されていた。貝層の厚さは最高で70㎝を測る。出土貝類は、サルボウ、アサリ、シオフキガイを主体とした貝塚であった。貝種は、腹足綱13種、掘足綱２種、斧足綱13種が認められた。ハマグリの占める割合は少ない。

微小貝類は比較的少なくヒメギセル等が少量検出されている。ヤマトシジミは極少量で、全グリットからは検出されていない。貝類の生育は全体に良いが、本域の縄文時代後期貝類とは差がみられる。検出された貝類から海底は、砂浜が少なくやや砂泥の状態が推察される。遺跡周辺では砂泥質の海底が多かった事が推察される。淡水産の貝類は微量であった。

貝製品で特筆すべきは、ホシキヌタガイ、ハチジョウタカラガイ、カズラガイの加工品の出土を見た事で、本例は北浦、西浦域の貝塚研究の貴重な資料となった。いずれも背面を加工した製品で、カズラガイ製は良く加工されている。類例は麻生町於下貝塚から出土している。貝の王様とも言われるもので本域には棲息しない種で伊豆諸島等からの搬入品と考えられる。カズラガイの加工品も見られ、これらは一種の（宗教等）装身具として使用されたとも推察されている。

魚種は、13～15種前後でやや少ない。これは貝層の遺存状態の差か（部分的な投込み状的な埋積を示していた）。

両棲類、爬虫類も魚種同様な状態でカエル、ヘビ等が極少量遺存していた。

哺乳類も少なくシカ、イノシシに代表されるが出土遺体からは数頭の遺体が推察されるのみである。これらは当時の自然環境が生育に適しないのか、捕獲しない拘束が存在したのか、本来縄文中期には捕獲可能な頭数が存在、生育していなかったのか、周辺貝塚と比較検討が必要である。

本貝塚では、角座を利用した叉状抉り加工品が出土している。円形穿孔列、窓状切り込み等、他に類例を見ないシカ角座利用が見られた。千葉県向油田に近い類例が見られるが半戯品で加工面に差が見られる。腰飾と推察される。また、角、骨を利用した装身具も６点程見られ刻み目、穿孔が見られる。豊富な装身具をも持つ先人、縄文人の生活感がみられる。

人は、頭蓋骨、歯等が検出された。歯骨の状態から幼年、壮年等３人前後のものと推察される。

土器は、貝層中からテンバコで20箱出土している。図示したのは各層の特徴的なものである。

層位的には１層では加曽利ＥⅠ、Ⅱ式が主体を占め、２層では中峠式、阿玉台式が認められた。ほぼ各層に共通し、これに前期の黒浜式、浮島式が混在していた。阿玉台式はⅡ、Ⅲ、Ⅳ式が大半で本貝塚が、これらの時期にほぼ連続して生成された事が窺えがえる。言い換えれば阿玉台Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ式、中期峠式、加曽利ＥⅠ、Ⅱ式は連続して続く土器と言える。

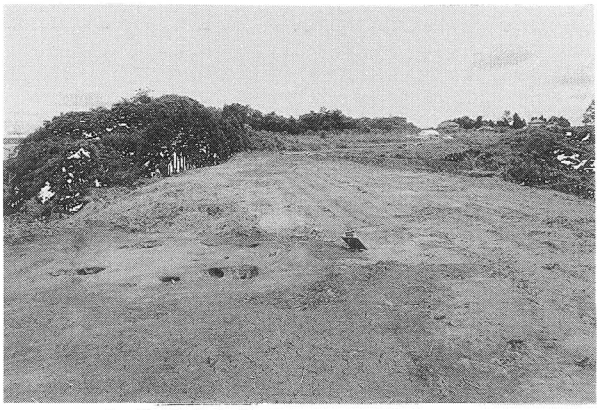
以上、概要を箇条書的に述べて総括とし結びに替えたい。

最後に調査、整理に多大なご教示を受けた茨城県歴史館斎藤弘道氏に記して感謝を申し上げたい。ご教示の半分も生かせなかったことは小生の力不足で誠に残念である。

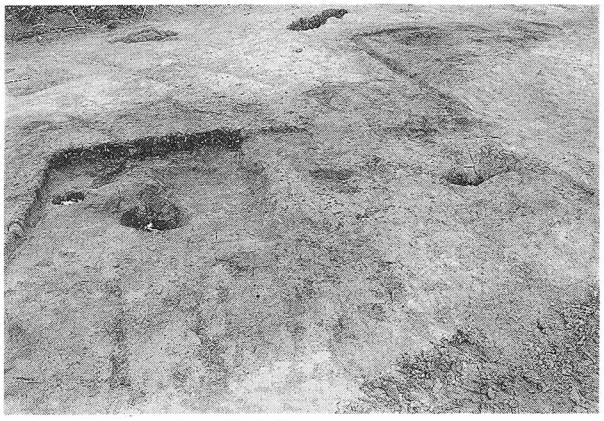
宝の山を「ゴミの山」にしか出来ないもどかしさと経済力、遺跡に対する認識の差の違に改めて感じいった。

○参考文献

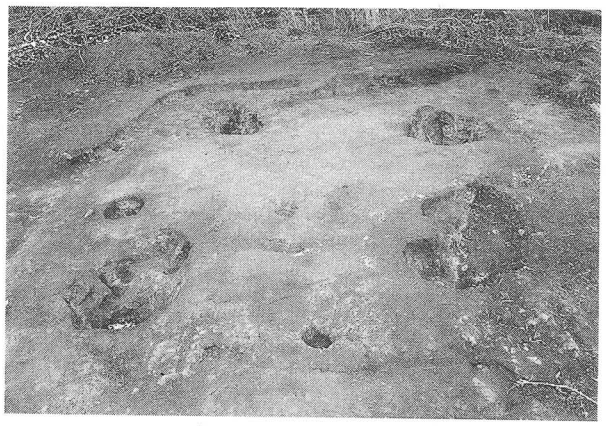
於下貝塚	麻生町教育委員会	１９９２	加藤晋平他
上高津貝塚Ａ地点	茨城県土浦市教育委員会	１９９４	慶応大学
鳥浜貝塚	福井県教育委員会	１９７９	
〃	〃	１９８１	
学術研究第15号	早稲田大学教育部	１９６６	西村　正衛
茨城県史研究37	茨城における貝塚研究の現状	昭和55年	川崎　純徳
貝	標準原色図鑑	昭和46年	渡部　忠重 小菅　貞夫
井上貝塚	玉造町遺跡調査会	１９９９	汀　安衛
向台貝塚資料図譜	市立市川考古博物館研究調査報告　第７冊	１９９９	市立市川考古博物館
考古民族書	骨角器の研究　縄文編１	昭和61年	金子　浩昌 忍沢　成視
貝塚研究	第６号	２００１	園生貝塚研究会
タカラガイの道〔Ⅱ〕	苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報１	１９９９	佐藤　一夫
石器時代における	利根川下流域の研究　早稲田大学出版部 ―貝塚を中心として―	１９９９	西村　正衛
若海貝塚	玉造町遺跡調査会	１９９８	汀　安衛



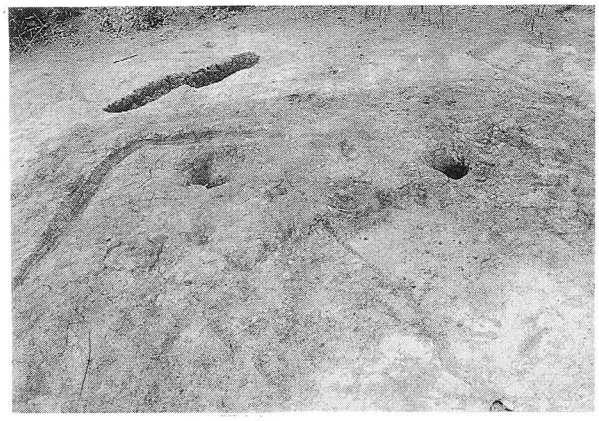
▲ 住居跡全景



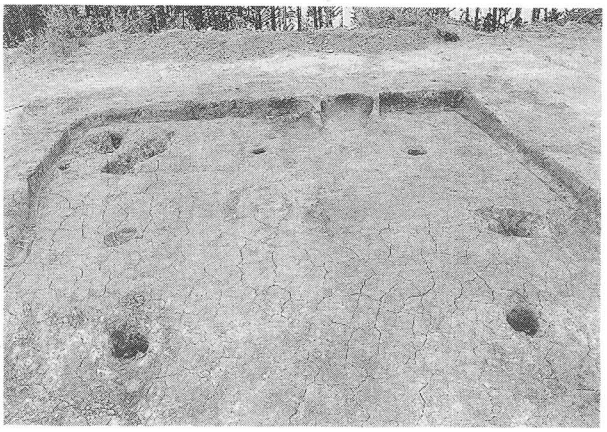
▲ 3号住居跡完掘



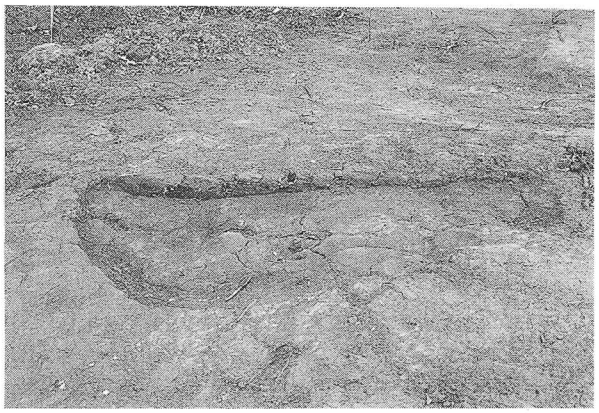
▲ 1号住居跡完掘



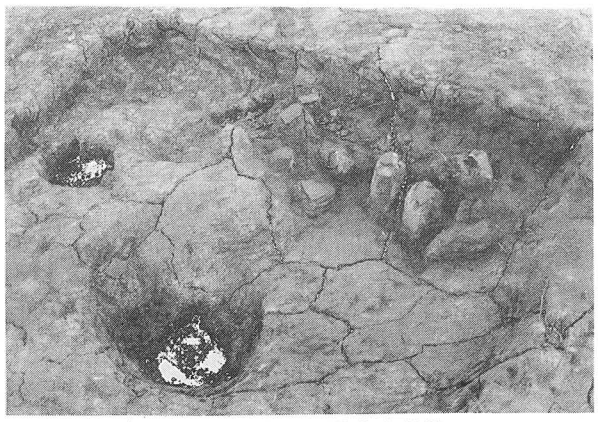
▲ 4号住居跡完掘



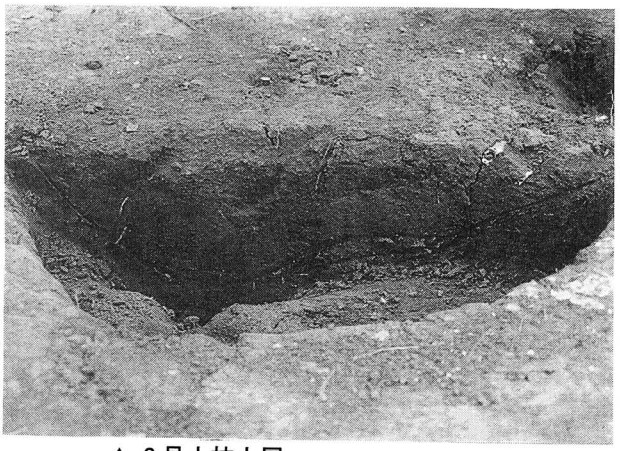
▲ 2号住居跡完掘



▲ 1号土抗土層



▲ 2号住居跡、土器出土状態



▲ 2号土抗土層

ＰＬ－１　全景、１・２・３・４号住居跡完掘、１号・２号土抗土層

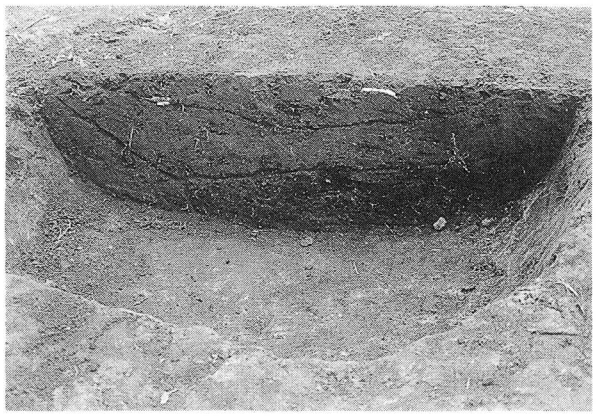
▲ 2号土抗完掘

▲ 10号土抗完掘

▲ 3号土抗完掘

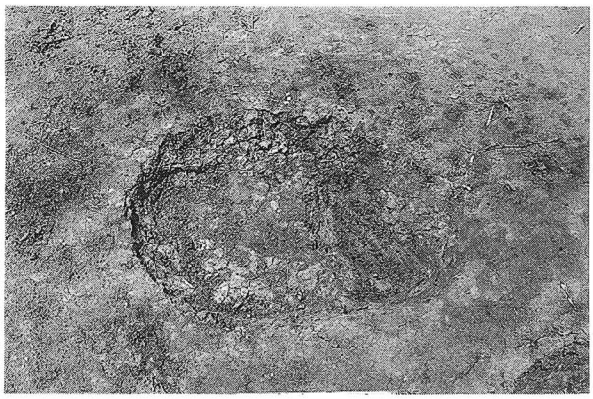
▲ 11号土抗完掘

▲ 8号土抗完掘



▲ 12号土抗土層

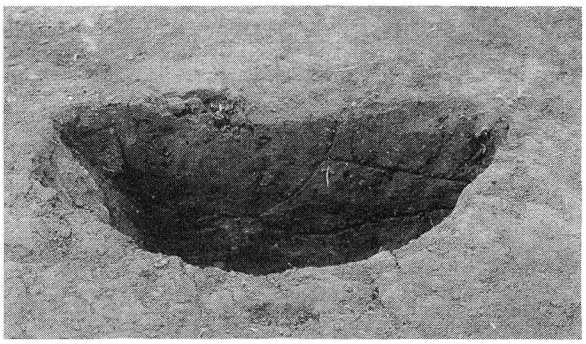
▼ 9号土抗完掘



▼ 12号土抗完掘

PL－2　　2・3・8・9・10・11・12号土抗完掘

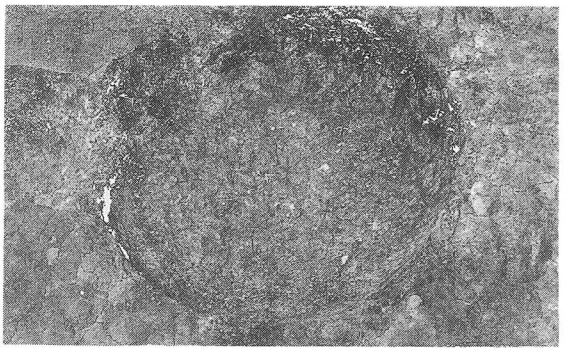
▲ 13号土抗土層



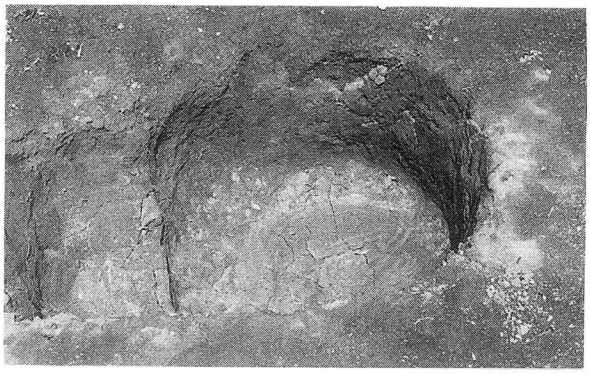
▲ 16号土抗土層

▲ 13号土抗完掘

▲ 16号土抗完掘

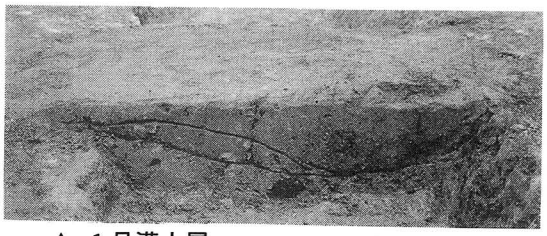


▲ 14号土抗完掘



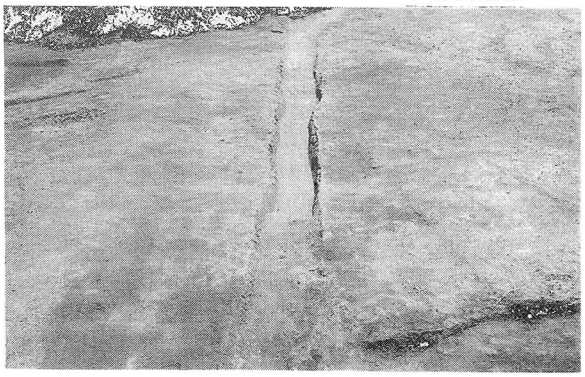
▲ 17号土抗完掘

▲ 15号土抗土層



▲ 1号溝土層

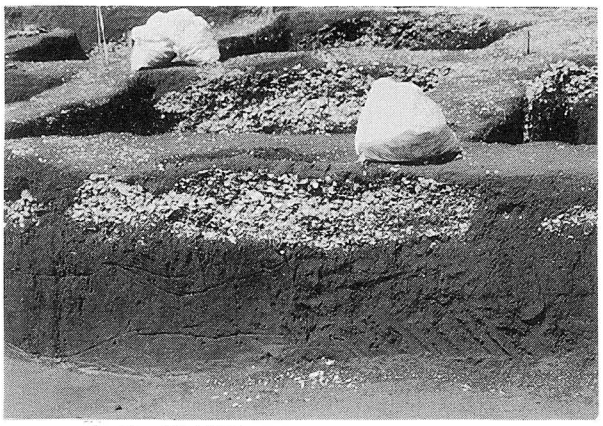
▼ 1号溝完掘



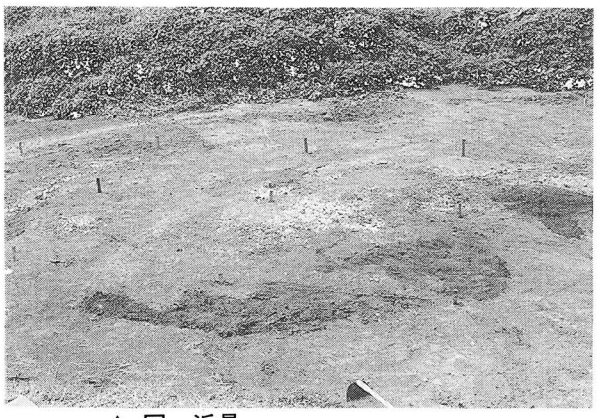
▲ 12号土抗完掘

ＰＬ－３　　12・13・14・15・16・17号土抗完掘、１号溝完掘

▲ 貝塚全景

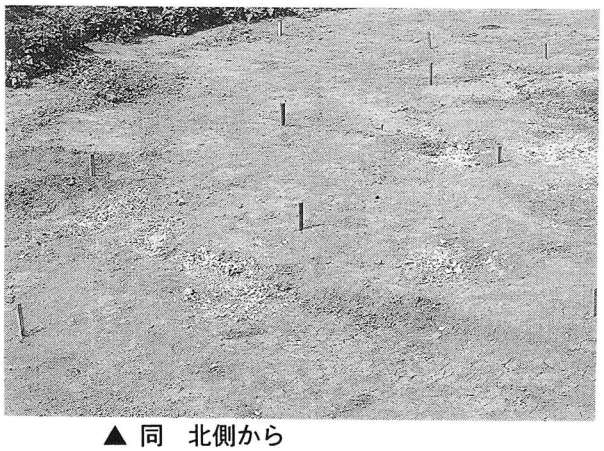


▲ B－3G貝層



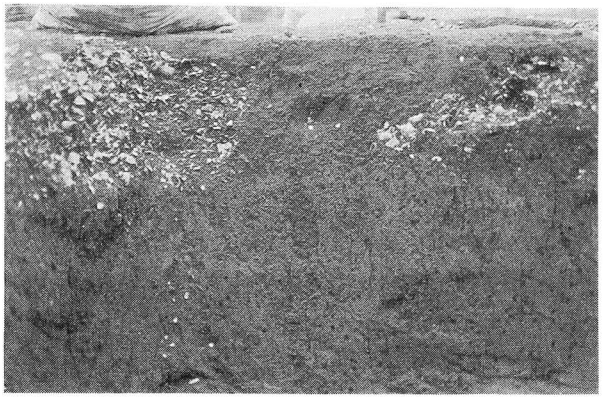
▲ 同　近景

▲ B－4G貝層



▲ 同　北側から

▲▼ C－2G土器出土状態



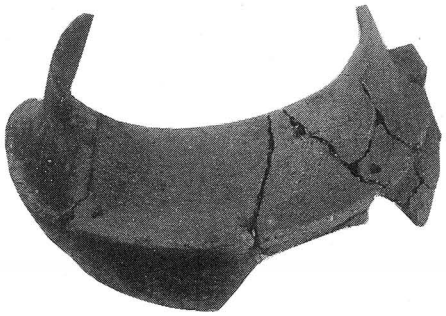
▲ B－2G貝層

ＰＬ－４　貝塚全景、同近景、同北側から、B－2G貝層、B－3貝層、B－4貝層、C－2土器出土状態

▲ C－3G土器出土状態

▲ 貝塚完掘

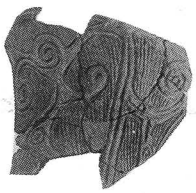
▲ C－3G土器出土状態

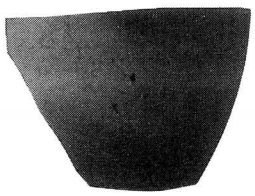


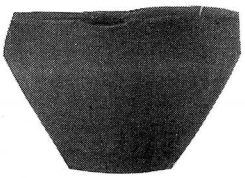
C－3グリット出土土器

▲ C－3G貝層

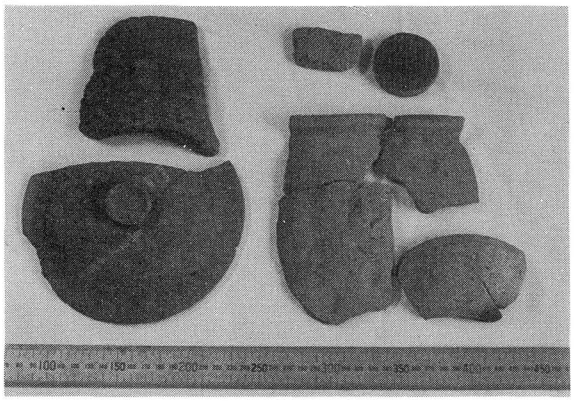
▼ 貝塚完掘北側から



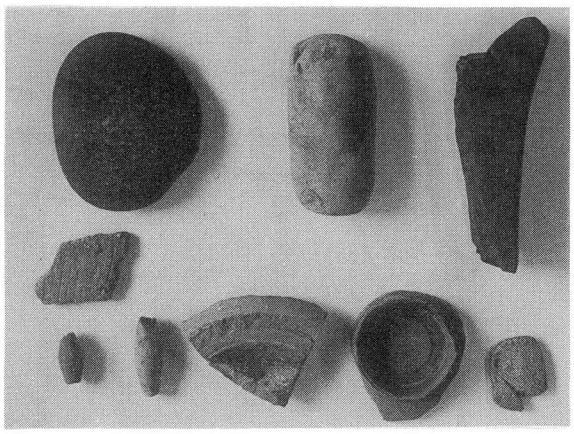




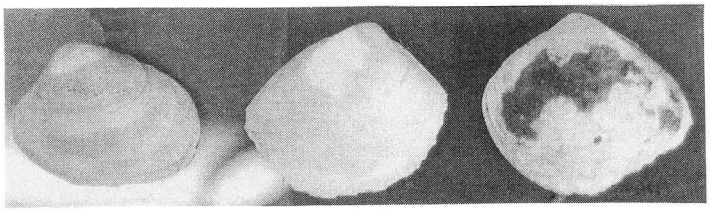
ＰＬ－５　C－3土器出土状態、同、C－3貝層、貝塚完掘、同北側から出土土器



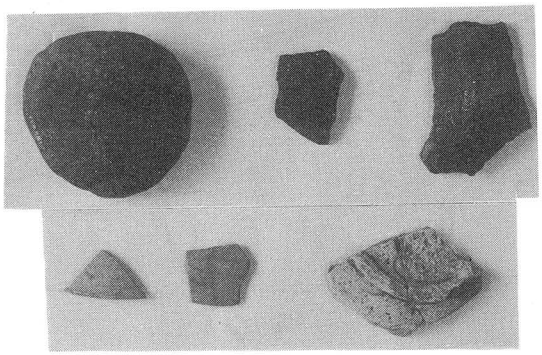
1・2・3号住居跡出土土器
13号土抗出土円盤製品



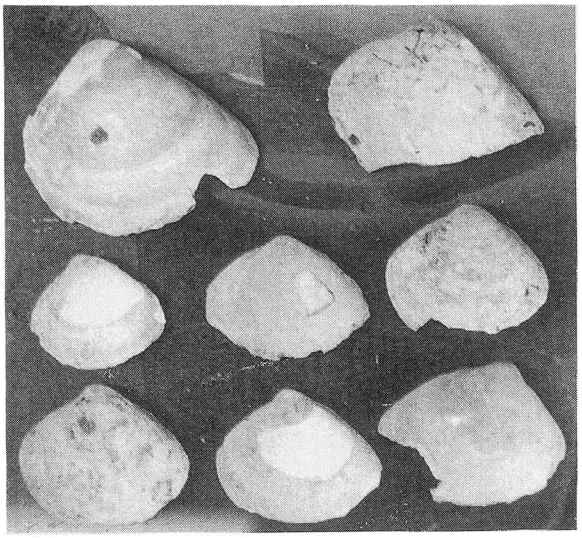
表採遺物　石器　管状土錘　砥石



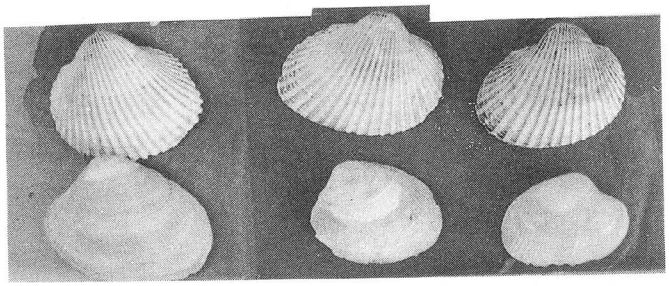
ハマグリ貝刃



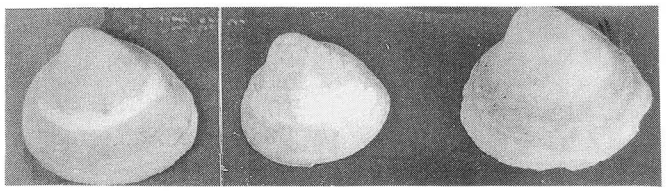
磁器　石器



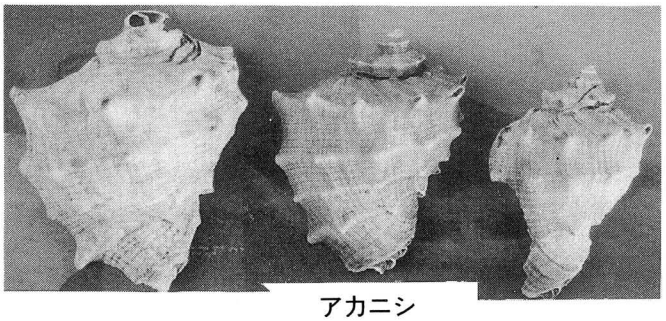
ハマグリ貝刃



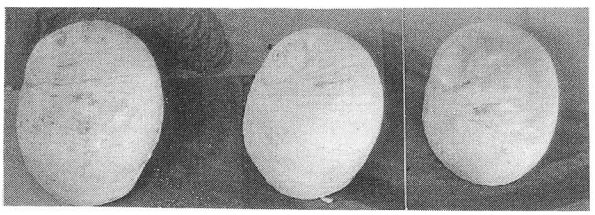
サルボウ　オキシジミ



シオウキ

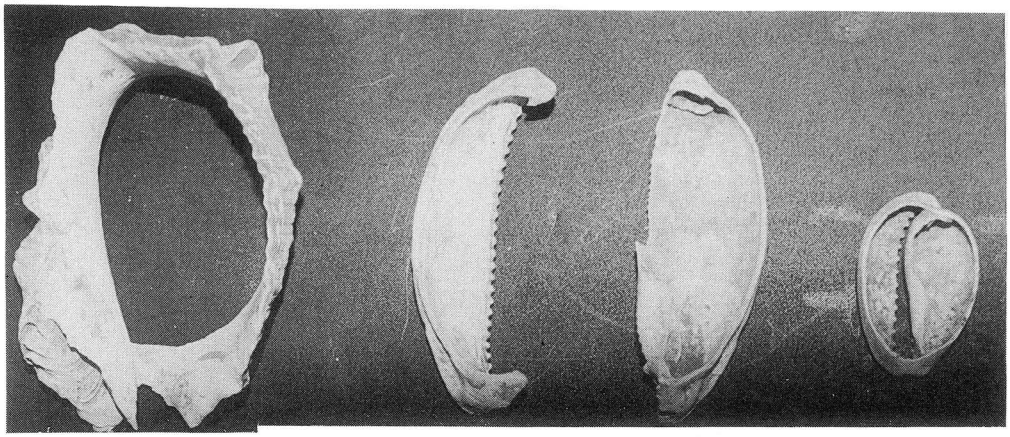


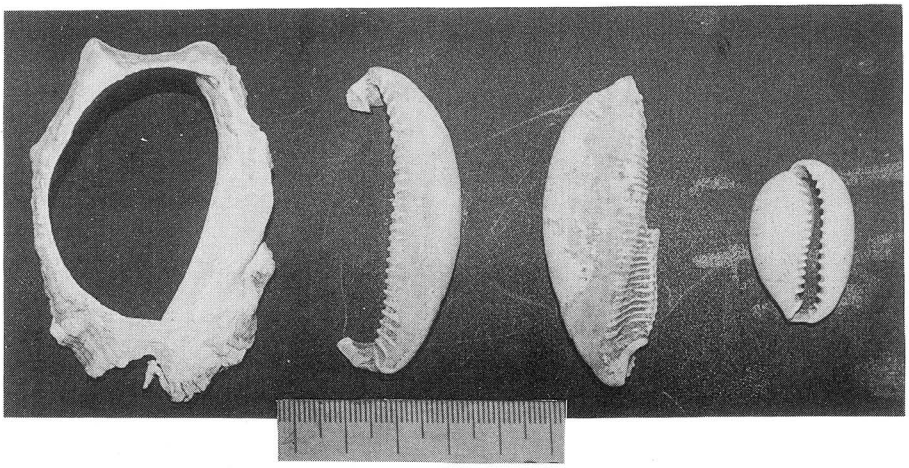
アカニシ

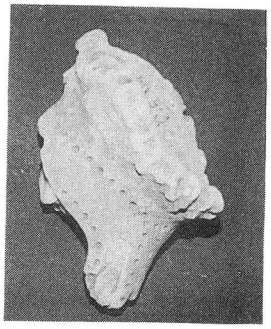


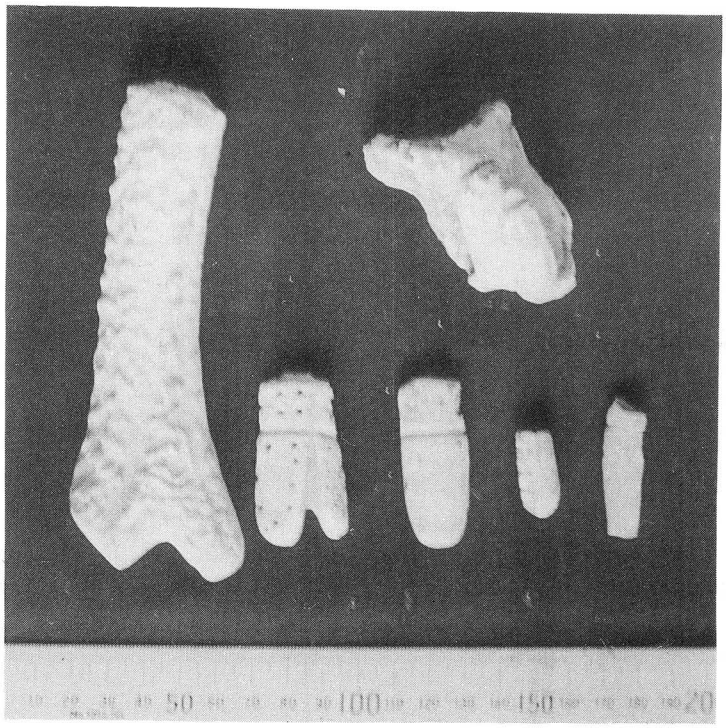
ツメタガイ

ＰＬ－６　１・２・３号住出土土器、表採遺物、出土貝類、貝刃等

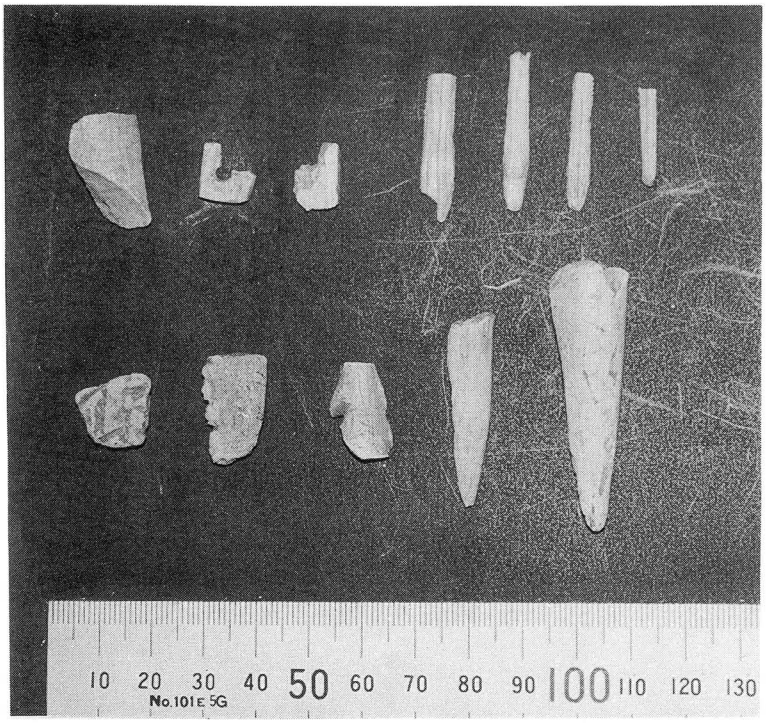


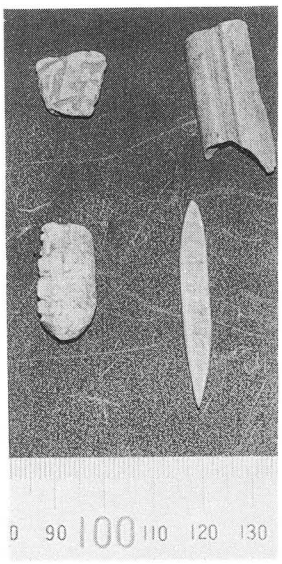


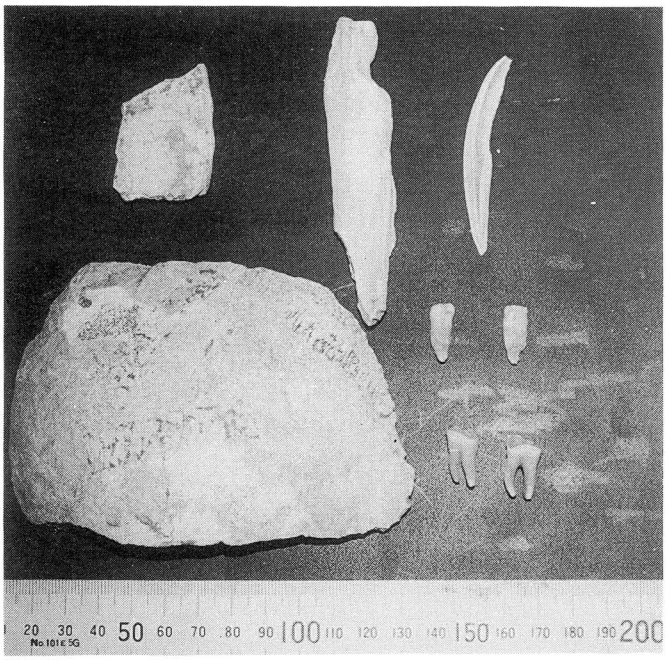




ＰＬ－７　貝輪、タカラガイ（ホシキヌタ）（ハチジョウタカラガイ）鹿角製品







ＰＬ－８　骨製品、人骨　頭、歯骨

抄　　録

フリガナ	ドウジョウタイライセキハックツチョウサホウコクショ
書　　名	道城平遺跡発掘調査報告書
発行者名	麻生町教育委員会・麻生町遺跡調査会
所　在　地	〒311-3892　茨城県行方郡麻生町麻生1561－9
編集者名	汀　　安　　衛
編集機関	鹿行文化研究所
所　在　地	〒311-2211　茨城県鹿嶋市青塚718－3
発行年月日	西暦1997年12月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ドウジョウタイライセキ 道城平遺跡	アソウマチ 麻生町 オオアザアソウ 大字麻生	08421	052	35° 59'	140° 29'	1997.07.01 1997.10.16	3,000 ㎡	土砂採取に伴う調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道城平遺跡	集落跡	古墳時代前半	住居跡	縄文土器　貝・鹿角	

道城平遺跡

発掘調査報告書

1996年7月

編集　鹿行文化研究所
　　汀　安衛
　　鹿嶋市青塚690

発行　道城平遺跡調査会
　　麻生町教育委員会
　　麻生町麻生1591－9

印刷　久保田印刷
　　麻生町四鹿963－20